

912.4 Ti 238 T3T

近松世話浄瑠璃詳解自序

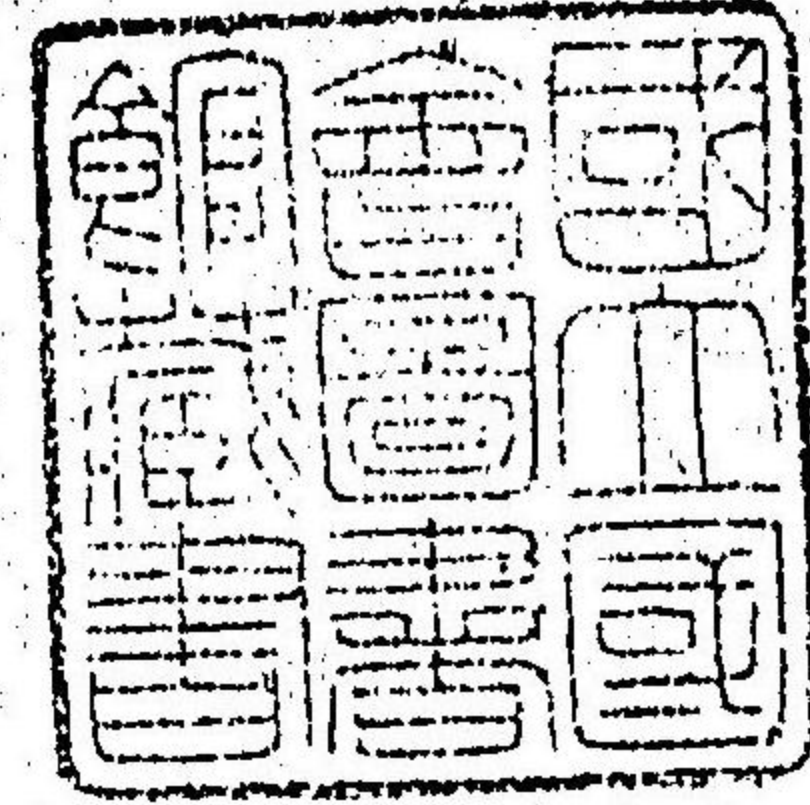
余は信州の山奥に生れて、粗野木強木曾義仲の亞流たり。時七百餘年の背にあらずして身旭將軍の榮位に立つものにあざれば、牛車に目をまはし、狩衣の襟に喉を詰め、立烏帽子の窮屈に堪へずして首を振るといふが如きことはあらず。されど、もし幌馬車とやらんに乗り、金装嚴めしき大禮服、何官何位殿の戴き給ふ禮帽とやらを着けば、必ずや目をまはすべく、呼吸にも苦むべく、首をも振るべくして、都門の人の笑を招くべし。

余や今帝都にあり。數年前貧書生の境を去りて、却てあはれなる腰辨の群に入れり。早朝より黄昏、終日の勞を慰せんにも、食前方丈はいふべくもあらず、一椀の白馬すら容易には求め得られざるなり。さればただ古書を亂抽して耽讀するを以て樂とせり。古書にして

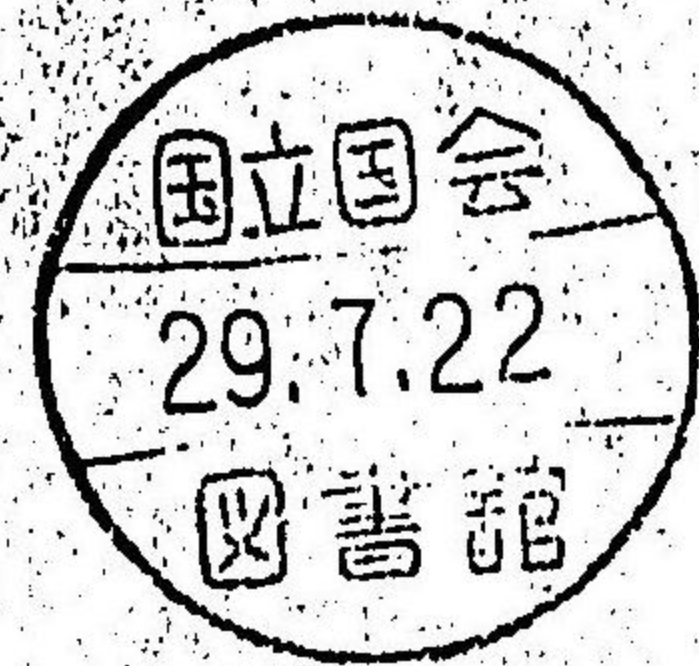
近松世話浄瑠璃詳解自序

浄瑠璃

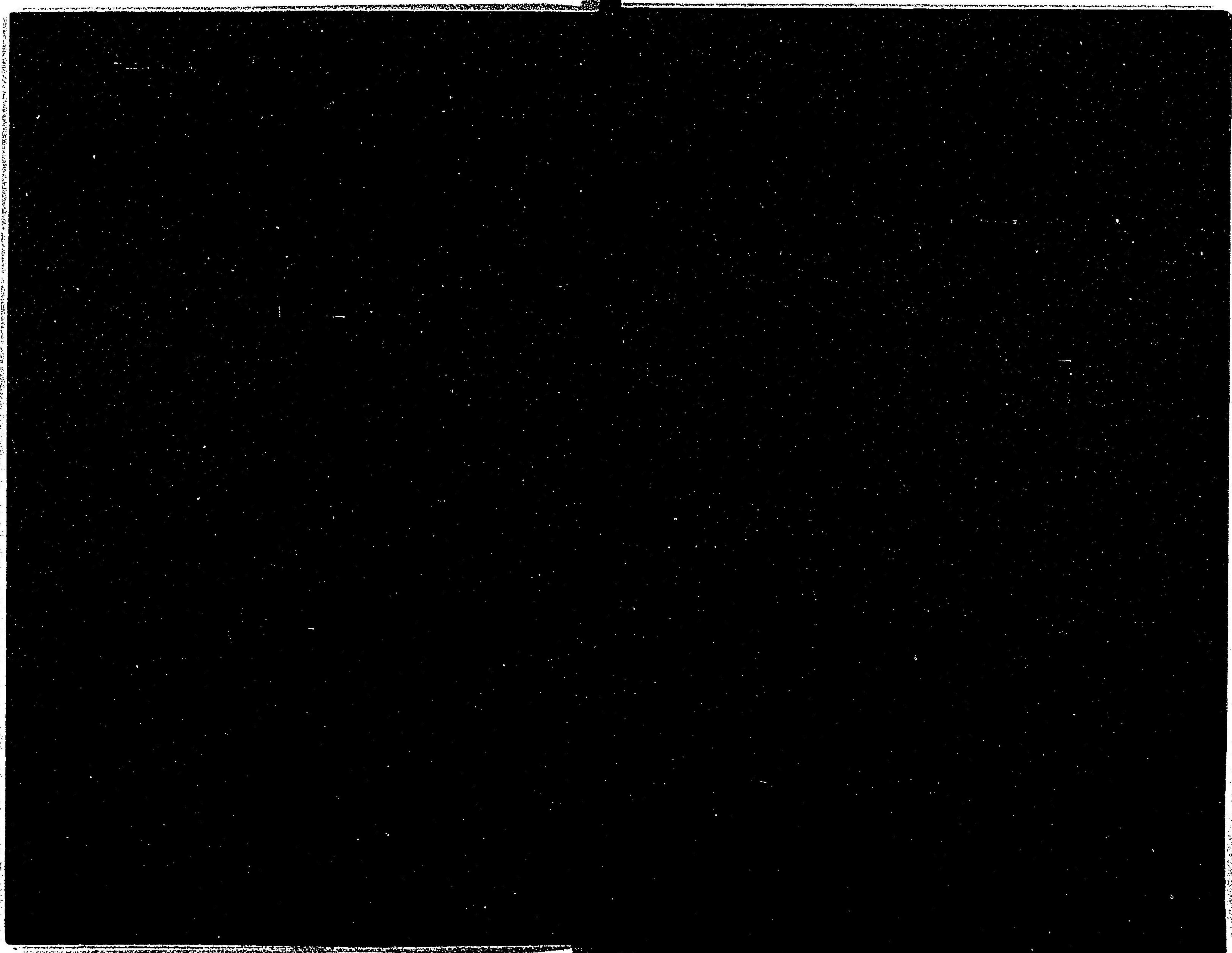
龜田學之



著者



337425



近松世話浮瑠璃祥翁

心中重井筒

院鯉出世流徳

夕霧阿波鳴石

卷 五 末

912.4 Ti 238 Text

近松世話浄瑠璃詳解自序

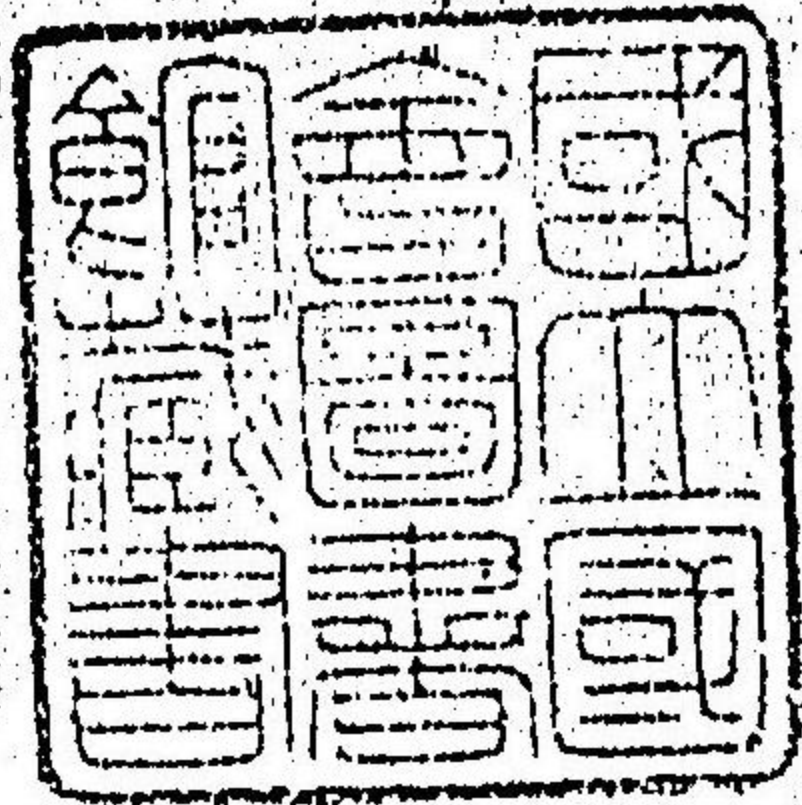
余は信州の山奥に生れて、粗野木強木曾義仲の亞流たり。時七百餘年の昔にあらずして身旭將軍の榮位に立つものにあざれば、牛車に目をまはし、狩衣の襟に喉を詰め、立烏帽子の窮屈に堪へずして首を振るといふが如きことはあらず。されども、もし幌馬車とやらんに乗り、金装嚴めしき大禮服、何官何位殿の戴き給ふ禮帽とやらんを着けば、必ずや目をまはすべく、呼吸にも苦むべく、首をも振るべくして、都門の人の笑を招くべし。

余や今帝都にあり。數年前貧書生の境を去りて、却てあはれなる腰辨の群に入れり。早朝より黄昏、終日の勞を慰せんにも、食前方丈はいふべくもあらず、一椀の白馬すら容易には求め得られざるなり。さればただ古書を亂抽して耽讀するを以て樂とせり。古書にして

近松世話浄瑠璃詳解自序

浄瑠璃

田嶋



田嶋



337425

最も余の感興をひくものは巢林子の彩筆たり。巢林子もこれ神儒佛に通ず。所謂神祇釋教戀無常の世態人情に精しかりし人なり。其筆の多面に涉りて人間胸底の琴線に觸ること、西鶴、文流、其磧等の比にあらず。殊に其世話物に至りては老幼親子夫妻主従遊里教坊朝暮の情到り悉して遺憾なきものの如し。翁や世の大通人たり。

翁の如き大通人の作を釋かんには、すくなくとも、身京阪地方に生れて其地の風俗言語等を解くに便なるべく、かつては章臺楊柳を折り、今なほ三絃を抱けば甲乙宜しきに叶ひて聲のあやぎれ確に、京阪文學には廣く眼を曝らして、年も不惑を過ぎたらんものこそ適すべけれ。余は淺學非才なり。六七年前黃嘴の頃、淨瑠璃史といふあらずもがなの一書を出して深く臍を噛み、再び書を出さんには

甚深の研究を経べきを感じて、かつて一たびも此方面に筆を執りたることなし。しかして今又此書を出すに至れり。此書を出すに至れりといへども、敢て甚深の研究を経たりといはず。

余は幸か不幸か、土手八丁に立ちて遙に響く新内に熱涙をそそぎたることなし。況んや朱雀あたりに昔ながらの長持の環の音を耳にし、新町橋上に九軒の方を見かへりたることをや。世の波には今も打たるれど、未だかつて、よしやわざくれ一寸先は闇の夜をきめたることはあらず。余の如きは、實に世の一隅を知つて三隅を知らざるものなり。書中述ぶる所定めてぶまのこと多かるべく、説きて詳ならざるものあるべし。されど着實をむねとして孫引と臆斷とは力めてこれを避けたり。本文も正本のままにして、おしあてがひの漢字に改めず。句切、サワリの類も其儘に存したれば、多少は斯道

に貢献するところあるべしと信ず、これまた無鹽の平葺を猫間中納言に強ふるの亞流たるべきか

明治三十九年十月

斑山識

近松門左衛門の世話浄瑠璃

世話浄瑠璃とは其當時の出来事を史上の人物事蹟に假らずして仕組みたる浄瑠璃又は全く作者の空想によりて成れるものにて、時代を其當時にとりて作れる浄瑠璃をいふ。近松門左衛門の作れる浄瑠璃無慮百數十篇、そのうち世話浄瑠璃に属するは左の二十四篇あるのみ。

外	題	登場年代	登場當時の著者の年齢
長町	女腹切	元禄十三年正月六日 (正徳二三年九)	四十八歳
淀鯉	出世瀧徳	元禄十三年四月八日 (寶永六年九)	四十八歳
曾根	崎心中	元禄十六年五月七日	五十一歳
源五兵衛 おま	薩摩歌	寶永元年正月十五日	五十二歳
心中	重井筒	寶永元年四月十六日	五十二歳
心中	二枚繪草紙	寶永三年三月二十七日	五十四歳

大	堀	丹波	高野	清十郎	心中	夕霧	梅忠兵衛	お平	鍵	山崎	博多
經師昔曆	川波の鼓	波與作待夜の小屋節 (伊達染手綱)	山心中萬年草	五十年忌歌念佛	及は氷の朔日	阿波鳴渡	川冥途の飛脚	が次生玉心中	の權三重帷子	與次兵衛壽の門松	小女郎波枕
寶永三年九月二十一日	寶永四年二月十五日	寶永四年六月二十四日	寶永五年四月十六日	寶永六年正月二日	寶永七年六月十六日	寶永七年七月二十四日	正徳元年三月五日	正徳五年八月一日	享保二年八月二十二日	享保三年正月二日	享保三年十一月二十日
五十四歳	五十五歳	五十五歳	五十六歳	五十七歳	五十八歳	五十八歳	五十九歳	六十三歳	六十五歳	六十六歳	六十六歳

女	心中	女	心中
殺油地獄	宵庚申	殺油地獄	宵庚申
享保五年十二月六日	享保七年四月二十二日	享保六年七月十五日	享保七年四月二十二日
六十八歳	七十歳	六十九歳	七十歳

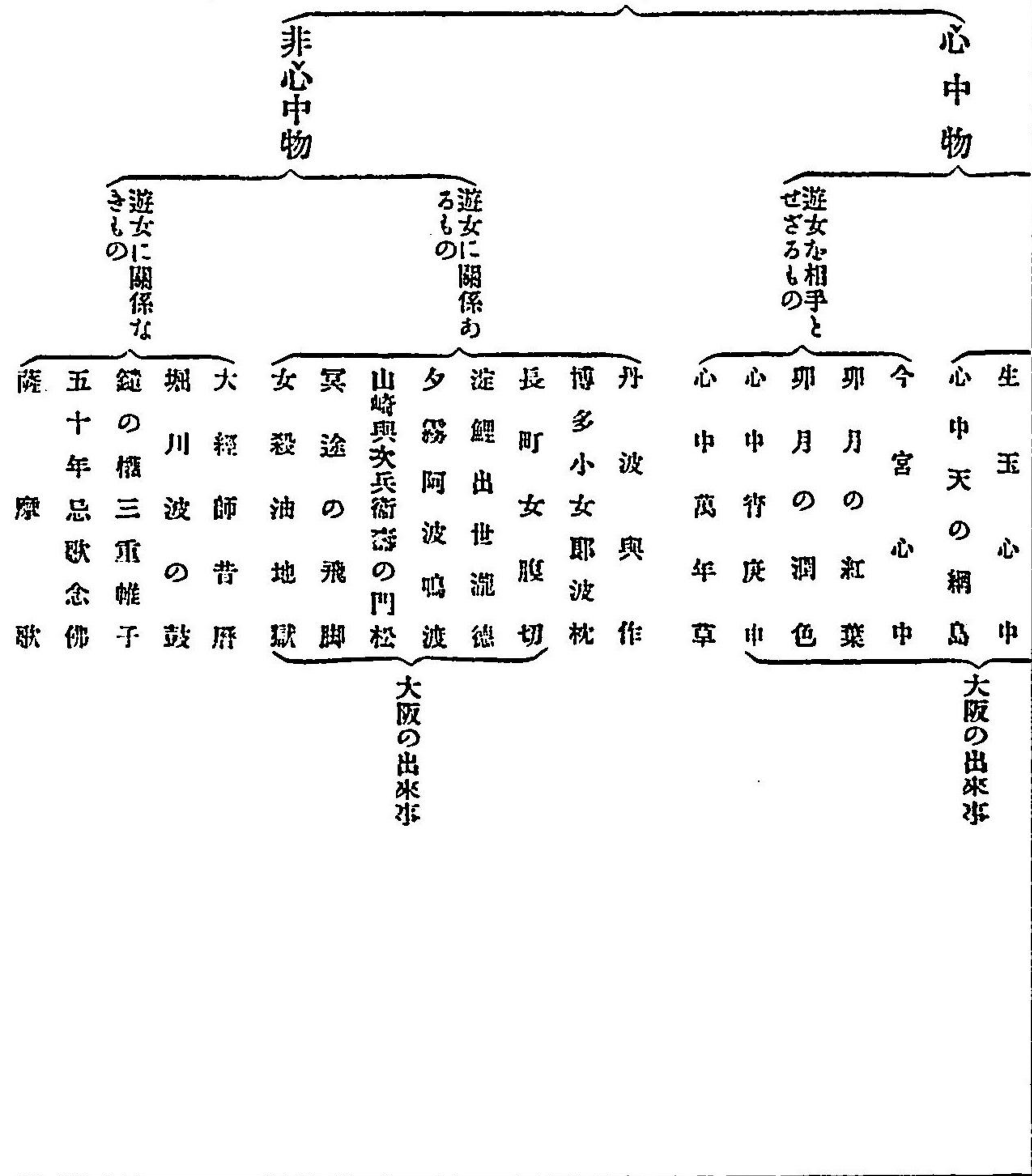
登場年代は一に外題年鑑による。括弧の中に示したるは余の考なり。早稻田文學明治三十九年四月之卷に掲ぐ又、右の外、一二の時代物に於て、其一部は世話物と認むべきもあれど、全部を通じて然りと認むべからざるものは擧げず。

近松の世話浄瑠璃は何れも男女間の情事に關するものにして、多くは平民社會即ち百姓町人間の出來事を仕組めり。武士社會の出來事を仕組めるものとして數ふべきは、ただ堀川波の鼓、鍵の權三重帷子の二篇あるのみ。また其出來事のありし所につきていへば、二十四篇悉く關西地方の事にして、京阪地方、わけて大阪の出來事其大部を占む。これ其劇場の所在地が大阪なりしにもよるなり。京阪地方の出來事にあらざるものは、薩摩歌、丹波與作、心中萬年草、五

十年忌歌念佛、博多小女郎波枕の五篇のみ。しかして、このうち、博多小女郎波枕の一篇は多少京阪地方に關係する所あるものとす。又仕組よりいへば、情死を以て局を結ぶもの多ければにや、世話物を總稱して心中物と呼ぶ者もあれど、眞の心中物は世話物全部の半數を占むるのみ。しかして、このうちには遊女と心中するものと然らざるものとの別ありて、前者は後者より多し。すべて、西鶴、文流等の浮世草子、其積、自笑等の八文字屋物が、遊里教坊に關するもの多きが如く、近松の世話物もまた遊女にして主人公または副主人公たるもの其過半に達せり。今出來事の實説如何を問はず、作の上より見て分類すれば左の如し。

遊女を相手とせるもの
 曾根崎心中
 心中重井筒
 心中二枚繪草紙
 心中双は永の朝日

近松の世話浄瑠璃



右は最も容易なる分類を試みたるものにて、此等の世話物の中には、當時の俗謡に附會して假作せるもの、俗謡に其當時の出來事を附會して假作せるもの、其當時の出來事を多少改めたるのみと思はるるもの等あり。同じ心中物にも夫婦心中のあるあり、非心中物の中にも事實には心中せりと傳ふるものなどありて、此表の如きは固より其萬般に涉れるものにはあらざるなり。

近松が世話浄瑠璃の由來につきては、櫻庭篁村氏の説、近松の研究に見ゆ。また世話浄瑠璃全般に涉りては、近松の研究、藤井乙男氏の、近松門左衛門等に詳し。

凡例

一 本文はすべて正本のまゝにせり。正本は多く假名書にして、イとキ、イとヒ、ウとフ、エとエ、エとヘ、オとヲ、ホとヲ等の假名遣を混同して誤れる所も多けれど、一も改めず、又假名を漢字に改むることなく、一寸讀下し難しと思はるる所又は誤讀しやすしと思はるる所等には漢字を傍書せり。

一 正本もなるべく八行本または十行本の古きによれり。墨譜は到底活版印刷物に望み難きことなれば、すべてこれを省きたれども、句切及びサワリの歌謡、萬歳、大黒舞、節季候、間の山、冷泉等の類、または、ナヲス、ヲクリ、三重等はすべてこれを存せり。

一 總じて浄瑠璃には、地のうちに詞あり、詞のうちに地ありて、時に素讀しては迷ふことなきにあらず、されど語り物としての結構を見んには、詞及地のしるしを正本のまゝに存するの可なるを思ひて敢て改めず。ただ、地よりフシに入り、フシより地にうつるところは、フシのしるしを略したれば、フシより地にうつる所の地のしるしをも省略せり。されば本書の地語りとして示す中には、フシにて語る所もありと知るべし。

一 語句の註解には時に細粗の別ありて、一通り其意を解かば本文の意を汲み得る所にも、縷々詳細に涉りたる所なきにあらず。これ他の作の意を得るに便せしめ、延いて所

謂元祿文學を見んための便を圖りたるなり。所々に用例又は典據を示したるも此用意に出づ。

又一度註したるものは再び註せず。されば或語につきて其註の所在を知るに便せんが爲めに巻尾に索引を附せり。多くは其語を上欄に抽出して其下に*の附號を附して索引を見るべきを示したり。

一普通の辭書に見ゆる語もまた言海等によりて註せり。風俗等に關することにて註解のみにては明にしがたきものは別に附録として其圖を示せり。

一此種の書の體裁につきては、本文の一段をあげては其後に語句の解を附すること當代の習はしの如くなれど、讀者の便よりいへば、むしろ頭書を主とするのまされるに如かずと思ひて、湖月抄、春曙抄等の體を學べり。

第一卷はしがき

本書の第一卷は時代の最も古しと思はるるものより始むるを可とするに似たれど、近松の世話浄瑠璃は其筆と想と共に圓熟の境に達したる時代の作にして、各篇逐次に關係を有することなきと階段的進歩の痕も明瞭には認め難きとによりて、先づ時代も古く作もすぐれたれど、餘り世人に注意せられざる心中重井筒を探り、重井筒に關係ある淀鯉出世瀧徳を探り、此作に關係ある夕霧阿波鳴渡を探り、以上三篇を取りて、ここに第一卷とす。

近松世話淨瑠璃詳解第一卷目次

第一卷引用書目

心中重井筒

解題……其實說
本文……註解

淀鯉出世灌德

解題……其實說……登場年代につきて
本文……註解

夕霧阿波鳴渡

解題……其實說……夕霧の傳
本文……註解

索引

附錄圖

第一卷引用書目

(普通の國書、漢籍、佛典の類は略す)

了行

遊君三世相	近貞三	門左衛門	作板
一話一言	蜀明治	十人	編刊
異本洞房語園	享保	五	成
浮世物語	庄司勝	意	著
江戸八百韻	淺井了	意	作板
烏帽子折	幽山寶	八	撰板
艶道通鑑	増正徳	五	作板
御伽名代紙衣	江元	三	著板
大幣	貞島	二	刊
力行	貞島	二	刊
好色一代男	井天和	二	作板
好色一代女	井天和	二	作板
好物訓蒙圖彙	貞島	三	作板

第一卷引用書目

可笑記

河内名所圖會

榮大門屋敷

嬉遊笑覽

奇異雜談集

近世女風俗考

近代世事談

京童

熊坂今物語

寛濶役者氣質

傾城色三味線

傾城禁短氣

傾城反魂香

傾城吉岡染

外題年鑑

毛吹草

元祿太平記

御前義經記

滑稽雜談

了行

西鶴置土産

沙石集

雜事類編

三養雜記

色道大鑑

實事

眞俗佛事編

神都名勝誌

新百人一首

人倫訓蒙圖彙

中央書局

還魂紙料 柳亭政九 種彦年 著刊	醒醉笑 安樂國文九 庵策庫年 傳本成 著	攝陽落穗集 文化五年成 松歌國 著	攝陽群談 元祿十四年 阿田後志 著刊	宗長手記 天正八年 群書類從 成著刊	俗つれ草 元祿八年 井原西鶴 著刊	會我姿富士 正德四年 紀海豐竹座 音興行 作	夕行	塵添儘囊抄 天文年間 著者未 成刊詳本	女用訓蒙圖彙 元祿元年 奧田松栢 編刊	東海道名所記 萬治元年 淺井了意 著成	東廬子 享保元年 田宮仲元 宣年著刊	浪花方言 文政二年 著者未 成(寫本) 詳	難波橋心中 紀登揚年 海代不 音作明		
南水漫遊 濱寫松歌 丸光廣中 著刊國 著本	仁勢物語 烏丸永光 丸光廣中 著刊國 カカ	八行	誹諧通言 並文木化 五四年 著刊	一目千軒 斜寶天曆 香獅共 著刊	日次紀事 黑延川寶 道年祐 著成	百物語 語著萬治 二未 年詳刊	風流曲三味線 自寶永七 年笑 本	北條氏直時代 諺留寫 本	マ行	松の落葉 扇寶永七 年編刊	松の葉 秀元祿十 六年編刊	萬金產業袋 享保十七 年來著刊	大阪新町浴 標(原板寶 曆七年刻 著刊)	名人忌辰錄 關明治二 十七年誠 著刊	尤の草子 慶安二年 未詳刊
謡曲拾葉抄 大明和九 貞九 著刊	雍州府志 黒真川享 道三年 著刊	用捨箱 柳天保十 二年種 著刊	世繼會我 近松門左 衛門作 著刊	ウ行	柳亭筆記 柳寫享種 彦著本	俚言集覽 村明治三 十三年阿 著刊	ワ行	我衣 文(溫知) 化年中 成著本	和漢三才圖會 寺正島良 三安年著刊	和訓 榮谷明治 三十一年 著刊					

心中重井筒解題

心中重井筒は大阪六軒町の色茶屋重井筒の抱ふさと重井筒の主人の弟にして上町萬年町の紺屋に入夫となりし徳兵衛との情死を仕組みたるものなり。一樂子の浄瑠璃外題年鑑によれば、元祿十七年即ち寶永元年四月十六日を初日として竹本座の興行したるものにして、巢林子が五十二歳の時の作なり。これに先立つ巢林子の世話物としては、長町女腹切(?)曾根崎心中源五兵衛薩摩歌の三あり。心中物にして大阪の出来事を作れるものとしては曾根崎心中の一あるのみ。

心中重井筒は心中物の始と稱せらるる曾根崎心中の如くには、當時の世評等につきて傳はるところあらざれど、淀鯉出世瀧徳に、此なつこゝのしばるへ、竹本の弟子がくだつて重いづゝをかたつたといひて、此作の火燧の段を作りこみ、丹波興作の興作をどりにこの作を縮めて踊歌としたるが如きを見れば、巢林子が得意の作なるべし。一低一高變化の妙を極めたれど、趣向に無理なく、當の主人公なるふさ、徳兵衛を始として、丁稚の三太、隠居の惣徳、妻のおたつ等何れも皆よく寫されたり。巢林子が世話物中の良作といふべし。

此作の實説は明かならず情死の時日と場所とにつきては、故關根只誠氏の劇場年表に
寶永元年三月二十九日 萬年町紺屋徳兵衛六軒町(今のぬしや町)重井筒おふさ大
佛掛所にて情死
と見え、南水漫遊には

重井筒や藤十郎抱女郎おふさ、上町紺屋徳兵衛と高津大佛殿勸進所にて相對死せ
しは寶永元年申十二月十五日夜の事にておはつ徳兵衛が梅田におゐて心中せし
翌年なるゆへ、道行血汐の膾炙の文中に、お初天神記會根崎心中を少し改めたるも
の(の)道行知死期の霜の文句を取れり云々

と見えたり。此作の上之巻に「けふはしはすの十五日」といひ、あすはいせの御えん日とい
へる徳兵衛の詞もありて、後説眞に近きものの如くなれども、もしこれを正しとすれば、此
作の登場はすくなくとも寶永二年の春頃と見ざるべからず。又しばらく外題年鑑によ
るとせんか、前説却て正しきが如し。外題年鑑は次の淀鯉出世瀧徳の解題にも、のぶるが
如く、まゝ疑はしきところあれど、さりとて此書以外に竹豊兩座の興行につきて其初日
を知るべきものはあらざるなり。

此上は此作の内面より立證して登場年代を定むるを至當とすべけれど、たよるべきは

中之巻の

月ははやわたりぞめして中橋や云々

なんとなかばしかけたのらんかんわたすばつかりはるはちやう中わたりぞめ云
云

と下之巻の

こぞのおしまの心中のそのゐづゝ屋にわれが今かさねゐづゝとしのづかにいは
れいはるの半四郎云々

との道頓堀中橋の架設とおしまの心中との二件のみの如し。しかして中橋につきては、
南水漫遊に、延寶六年刊の「大阪道おしえ」の道頓堀の分に見えたる

大和橋中橋これや日本橋南のかわぞ芝居なりけり

の歌を引きて「大和橋と日本橋との間に中橋といふはしありて今の相合橋なし。此の考
は六軒町重井筒の條に著す」として、その條に

道頓堀大和橋と日本橋との間に中ばしありしはいつの頃にか絶えて、今の相合橋
は寶永の初に懸りて中橋と名付しにや、重井筒の中の巻の枕に月ははやわたりぞ
めして云々

と述べたれど、南水漫遊の著者は、余が更に考證せんとする重井筒の文を典據としたるものにして、これによるべくもあらず。ただ元祿十四年刊の攝陽群談のみは據るに足るべきか。同書は大和橋の次に日本橋を掲げ、日本橋の次に相合橋を掲げて、其條下に、此橋貞享年中始テ造之と載せたり。

よりに思ふに、大和橋と日本橋との間にありし中橋はいつしか絶えて、新に日本橋と太左衛門橋との間に一橋を架したるは貞享年中のことにて、この橋を中橋とも相合橋とも呼びたるものなるべく、月にはやわたりぞめして云々といへるは、元祿十六年末又は寶永元年の春頃に架け替へたることありて、その時のことをいへるにはあらざるかし。かして此架け替工事の何時成功せしかにつきては、寡聞未だ知ることを得ざるなり。次には、おしまの心中なれど、これも元祿十六年刊の、心中戀の塊り並に名寄鹿子の名寄にも見えず、そのゐづゝやにわれが今かさねるゝと云々とあれば、心中二枚繪草紙のおしまにも合はずして、識者に教を乞ふの他に途あらず。

南水漫遊の著者濱松歌國の著書には、まま戯曲小説の類によりて事蹟の年代を定めたりと思はるるところあり。攝陽落穂集に淀屋辰五郎の追放を寶永二年五月とせるが如きおしま徳兵衛の情死を寶永元年十二月十五日のこととせるも、中橋の年代を此重井

筒によりて定めたるの類にて、此作によりていへるにはあらざるか。

劇場年表が此情死を寶永元年三月二十九日とせるは何によれるか明かならざれど、外題年鑑の掲ぐる所にも適合すれば、余はしばらくこれに従ふべし。思ふに三月末の事件を十二月の事件として仕組みたるは、此事ありて二旬日を出ざるに興行することなれば、巢林子が殊更に前年末の出来事として作れるにはあらざるか。然りとすれば此作は巢林子一二週日の間に脱稿したりと見るべきなり。

本篇の本文はすべて山本九兵衛板の八行本によれり。八行本に二種ありて、本篇にイ本とせるものゝ方奥書によりて見れば他の一本より稍古きに似たれど、版に磨滅の痕見えてまゝ、読み難き箇處ありしゆゑ、稍新しと思はるれど、文字の判然たるものによれり。二本異同極めて妙し。異なる所には一々イ本……と掲げたり。

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

* 索引によりて其解を見よ

よさこひと……れたところ
當時の流行唄なり。此唄五十年
忌歌念佛下之巻にも見ゆ。傾
吉岡染にも「よさこひの。たま
づさつばさ。に。うけて。イそ
に。つり田の。あきの。かり。イそ
な。」と見えて、エリ、チクリ等
の節付相同じ。其他には、花山
院都歌(紀海音作、享保元年豐竹
座興行)れんぼの辻占にも「よさ
こひと。いふ字をきん。やて縫
せ。イそにおてきとれた所。イそ
そにおてきとれた所」と見え
り。按ずるに、此重井筒に見ゆ
るが本歌にて、他は皆替歌なる
べし。しして、本歌と思はるる
此唄は、お夏清十郎の噂の高
りしは寛文中のことなれば、
其頃世に唄ひ出したるものなる

心中重井筒

近松門左衛門作

歌夜來よさこひと。いふ字金紗じをきんしや。で。ぬ縫いせ。す器そに清
十郎と。ねた染所ところ。つり器すそに。清十郎とね染風色ずみいろ。地京
のよし吉岡紙をかかみ子ぞめ。やぼ染てりがきか。う漆桶すがきか。正
月前際まへのき際い々に旦那殿だんな外内の外内そとがうち。おみ酒通きす
こ浮々してうか山州音く々とやまし音うとい音へ目はめが見内居へず。うち内居に居
やん内儀す儀ない此方人き打さま任ま任こちとばかり打任にうち打任まかせ。あ漆桶つらへも
の節季もせ打任つき打任き打任をも。ど仕舞ふ仕舞しま事いん事す事こと事じ事や事やら。げ下心し下心んの
わる悪い悪だ悪ん悪などの。

心中重井筒

へきり。よきひは夜来いにて夜来との意なり。此當時はなほその意に用ゐたれど、徳川時代の末にはその意を失ひて小唄の節の名となれり。この重井荷に用ゐし唄は當時の伊達衣袋の縫と模様となつたものと感はる。

金紗 紗に平金糸を縫ひつけて模様をなせるものことなれど、俗に誤て金糸をいへり。

京の吉岡紙子染 雍州府志に「西洞院四條吉岡氏、人始染黒茶色」故明吉岡染、俗毎本如法三行之稱、蓋法一新、染家吉岡、祖每事如此故二世稱三染と見えたり。又、傾城吉岡染に「紙にそのむむ、一岡染の。しよしよのよそにおちくるたきの水。あらははあらへ。さらさらさつせ。むねはするどきりんぼくろちのまつくろく」とも見え、「すゑよしなごのけんぼくろちあらへどおちろふつぎなり」とも見えたり。紙子は紙子紙といふ白き紙をつぎ合せ、これに柿澁をひき、採みかけて衣服にしたるものなれり。○(す)てりがき。うすがきとつづけたるを見れば紙子染とは此澁色に染むることをいふもの如し。當時吉岡染には、黒茶色の外に此色もありしものと思はる。

●薄柿 うすがき色の略にて、澁色をいふ。●やほてりがき 薄柿に對して澁き澁色をかく呼びしものと思はる。

よきひと……やほてりがきうすがき、迄の一段は紺屋徳兵衛の身持を寫さんが爲めに、流行唄よりいひかけて紺屋のことなれば黒色を出し、ついで吉岡染の紙子染とつづけて、やほてりがきに野暮(不持)薄柿に柿の意なきがせて、徳兵衛が、家を女房や手間取に打任せてうらりと遊び居るは野暮が柿かと書き出したるなり。

正月前のよりは年季小僧三太郎の詞。●際々 際は支拂時をいふ。●山しう お山といふに同じ。お山は遊女の通名にも用ゐれども、當時京阪地方にては色茶屋の動女をかく呼べり。しうは州の字をうつ。お山を山州といふは、風呂屋女を山州、野郎を野州と呼ぶの類にて、當時廣く行はれたることなり。八文字屋物などにも多く見ゆ。(附圖第四を見よ) ●うちにあやう内儀様の下に「や」を補ひて見るべし。●下心 心得、または、ただ、心といふに同じ。

茶屋 水茶屋といはず、ただ茶屋といへるは多く色茶屋のことなり。

さらりつと淺黄に云々 何事にもうはべばかりであまり深入りしたことをいはずに居よの意。

下染 紺屋にて、或色の染上を

する前に、他の色にて染むることなれり。こには生立ち、養生などの意に用ゐたり。南の茶屋 南は大阪の島之内をいふ。島之内の茶屋は色茶屋にて普通の娼家。海松茶 海松色がれる茶色をいふ。藍色の勝てるものを海松茶といふに對して、素海松茶ともいふ。元禄の末年頃は廣く行はれたるものなるべし。傾城色三味線に「しんがし、紫みる茶は今時世間にはやり過ぎて、我ら様な粹仲間目にしみます云云」と見えたり。

柳 煤竹 とともに染色の名。柳は白びみたる青き色。煤竹は竹の煤けたるが如き赤黒き色をいふ。柳は内儀が夫にまづらはぬ意。煤竹は黒くなりてはたらく意。●わせる 來るに同じ。古くよりの語なり。沙石集に「燃シクハ間テモヤセヨ高麗房。千層ニアルン隣四郎ノ本ニ」と見えたり。●郡山染 明かならず。●ほづく 今此語を「出あるく」といふ意に用ゐる所もあれど、元禄頃京阪より出てたる書には皆金を徒費する意に用ゐたり。●土賊色……土賊で物を研ぎおろすやうに身代が減りつくさんの意。土賊色はもえぎに少し黒みのある色をいふ。◎生立ちを下染といひ、乳香子より小紋にいひかけて乳香小紋といひ、見るをいひかけて海松茶といひ、柳煤竹にやるといひ、しみ水るをいひかけて郡山染といひ、土賊色でおろす様に……といへるは皆當時口合(かあひ)と稱したるものにて、丁稚三太の言としては餘りに巧に過ぎたるやうなれど、三太は少し後に「わしら芝居が見たりや六軒町の兄御からなんば行かうとまいじや」と見ゆるが如く、島之内六軒町に兄ありて自然同じ町の重井荷屋の弟なる徳兵衛の業生につきては、他の手間取よりは詳に知りぬたるなり。

調やい三太そりやなんじや。ちや屋へいさやろが山しうをかやろが。だんなだんなこちとりの屋の手間とり。なにごともさらりつとあさきにいふていよいよ。ヲ、喜へいのいやることなれど。わがみのもとをしるまいが。ち

たいだんなのしたぞめいの。かさねるつ、屋といふみなみのちや屋のおととで。地これへいりむこちのみごもんをもちながら。人のみるちやもかまふにこそおないぎりけつかうしや。やなぎす、たけにやつてじやが。いんきよのおやじがわせると。いへうちのしみこほり山ぞめになるいの。あのやうにほついでりやがてしんだいの。とくさ色でおろすやうになつてのけふとわらひける。

酒づけにみつもつくかや 酒び
たりに精氣も盡くつやの意。
持が明く 持は馬場のめぐりの
柵。仕事のはかどることを持が
明くといふは、加茂の競馬の時、
見物人の待ちくたびれていひた
るに起るといふ。
そうぶつもの 贈物ものなり。
浜花方言「そ物 主人より下女
下男等へ呉れる物をいふ。四季
施なも、そ物といふ。贈物。」

間が明く 間がぬける。
水し吞まれぬ 耕作すべき田畑
なも持たぬ窮民を水呑百姓とい
ふの類にて、とてもくらしが立
たぬの意。
◎これ庄介喜兵衛より水も吞まれ
ぬ迄の徳兵衛が間に、口前にはッ
リの、のちの節句はたらきが口
吻を見るべし。

坊主 幼き見、頭髪を剃り落し
居るよりいふ。
そこへ 落ちつつかず取急ぐま
まにいふ。
座を組む 二人以上の人々が位置
を然るべくとりて坐するをい
ふ。
おるさま 正しくはおへさま。
浜花方言「お家さん。まづ大體
通例此通唱ふ。江戸にてのみま
まといふに同じ。」
すつきりと 一向。まつきりとは。
合點 著聞集に「定家朝臣のも
とへ點を乞にやりたりければ合
點して褒美の詞など書付侍り」と
見えたり。和歌などに點を
くるところをいへど、轉じて、承
知、承諾の意に用ゐる。
ずんど ずつと。

地さけづけにみつもつくかやわがやどへ。かへりこん屋の
徳兵衛いそがしげに立歸り。詞これ庄介喜兵衛。らちがあ
かぬのく。これにまたかゝつてか。いつじやおもふけ
ふひしひすの十五日。なかのしまのそうぶつものもきのふ
ぎりのやくそく。たに町のふとんもまだもつていくまいな。
あにきからあつらへのかさねるづののうれんも。地をそ
いとふてはら立じや女ばう共のどこへいた。エ、どんげ
な一こんおれがいのねばもふそれほどまがあく。いひつけ
も見まのしもくちは一ツ目は二ツ。これで水ものまれぬ
といふた所は見ごととなり。下人共のいつものこと。おな
いささまのやりや町のあねさまへ。ちよつといつてこふほ
どに。おまへにとふてふとんちももつていけとのこととい

へば。地そんなら喜兵衛もつていきや。庄介はちやうちん
もつて女房共をむかひにいけ。そればうずめにけがさすな
おほてかへれといひつくれば。あいぐいふもそこへな
がらみなくおもてに出にける。てい主もつち迄ゆくかと
見へしが三十斗の女ばうと。何やらさ、やきつづぶやきて
チクリつれたちへうちに入れれば。女へてい主とをくみて。
おるさまがほしてゐたりける。ねんきの三太すつきりとが
つてんせず。じろく見るを徳兵衛これ三太こへこひ。
つとよれとひさもとへよびつけ。詞こいついずんどりか
うものでいふなといふことはいひぬやつ。地それで人がか
ひひがるちかづきになるしるしに。なんぞやつてたもとい
へばかの女そふやらしてめもとがりはつに見へまする。な

たし たまへの轉。
 顔見 顔見芝居の略。つぼみせ、古くは、つらみせといへり。日次紀事十一月の條「此月初四條河原狂言并傀儡棚之役者人易後各施藝諸人改觀俗是稱「顔見」是使「見」之人「知」役者顔面之義也到「臘月二十日許」各止之來年正月二日又始之「顔見」芝居は江戸京都大阪みな多くは十一月一日より始め、凡そ一年の役者の座組は此狂言にて定めたり。餘の物 ぼつ物の物。
 なんぼ なんぼ。
 お山 色茶屋の遊女。
 やらるる 自分のいふことを申さると敬語にいふ類の滑稽。出来いた 官行のすぐれたるをほむる詞。出来したに同じ。して 然して、さしての略。
 いろは茶屋 南水漫遊續篇「往古は道頓堀側芝居の近邊として、今のごとく寸尺の地を争ふこともなく、建家まばらなるゆゑ、炎天或は俄雨の節、見物の

んとかほみせ見やつたかふだかやるせにやらふか。たゞし
 何 餘 物 欲
 なんぞよのものがほしいかいたといひければ。 詞イニくわ
 等 芝居 兄 御
 しらしはるが見たけりや。六けん町のあにご様からなんぼ
 行 いかふとまじや。わしや銀がほしいといふ。ム、かねも
 つて何かやる。アノかねもろふてか。銀もろふてから其かねで。よそくのお山がひとつ。地かふて見たいとやらるるじやと身をすくむ。詞これにてかいたやすいことく。
 誰 憶
 してだれぞほれたのがあるかアアいろくくと。とひかけられてはづかしがり。わたしはほれたのはいろはのうちにあるといふ。アアそんならばいろはちや屋か。イエく太左衛門ばしすちに。なんじや太左衛門ばしにいろはとりの。ちりぬるをわかよたれぞ地つねなときんじかへせばそれく

そのつぎのらむうげんだとそこたへける。
イ本マナシ

諸人雑述に及びしにつき、元禄十三年卯十一月、立慶町役高二十八役、吉左衛門町役高二十役、都合四十八役、右兩町一役に水茶屋一軒つ御免有之、液側に於て板がこびの内に床几なぐまへ、茶店を出すこととは成たれども、其頃は萬事手輕き事にて、右茶屋四十八軒出来し故、世俗に呼んでいろは茶屋といふ云々。 ●太左衛門橋 道頓堀に架せる橋にて此橋路にも色茶屋ありしなり。 ●らむ豆板 銀玉、または、粒銀、豆銀ともいふ。煎傾のまゝにて大小輕重一ならず、量目によりて通用せり。際長豆板は縦六分、横五分、重さ三錢五分。元祿豆板は縦八分、横八分、厚さ六錢三分。永字豆板は縦五分、横五分五厘、重さ二錢八分。此他種種あり。
 朋輩 傍輩とも書す。同じ師につきて學ぶもの、又は同じ家にあつて同じ職業に従事する者。同僚。なつま。
 みらんも イニしも。

これは上物上めきとまめいた一つぶはつとはづみ。 詞ヤイ今こ、へかねもつてくる人がある。此をなごしゆをおない
 無 音
 ぎさまかといひふほどに、かならずいゝやといふな系。扱
 事 女 男 親 輩 音
 此ことをおんなどもにもはうばいにも。みちんもいふこと
 ならぬぞがつてんかといひければ。三太郎うなづきもつた
 無 音
 いなやぐ地いふことでのござりませぬ。もしもかさねて
 音 出 時 前
 いひたい心できたときぐに。おまへ、そつとこととはりま
 程 銀 下 阿 泉 顔 持
 せふほどに。又かねをくださりませと。あほうなかほでもそ
 道 持 時 表 類
 んをせぬやるすいよりはすいならん。ときにおもてにたの

年配なる人體 よい加減の年より。多くは五十前後位の人にふ。

百合せて下の下に「ありけん」を補ひて見るべし。

子なかなしたるが、子ま出出来たる間柄、狂言、しらびむ、子中をなしたる中を、てるぞびくぞといふ事はあるまい云々、

屋財家財 家も道具も。深しいこと、その下に「いはぬ」の「」などの語を補ひて見るべし。

三頁目 銀三頁目なり。金五十兩に當る。

口入 口入といふ。ことづつての仲立、又は、金銭貸借の間に立ちて世話する者といふ。

くふ 一ぱいくふの略。ちよつとたまさるるをいふ。

入家 入婿に同じ。

丁銀 挺銀とも書す。慶長六年に鑄たる銀貨。形長くして海鼠の如し。大抵一枚四十三匁内外なり。元禄八年に改鑄したれども慶長の制と大差なし。丁銀四百目は金六兩三歩弱。丁銀は慶長以來包のまゝ通用せり。

さつと 早速。

おたつ 徳兵衛の妻の名。

紺屋糊 紺屋にて糊様または紋などを染め出す時、白ゆきにする所にぬるもの。

みましよ。こふ屋徳兵衛殿はこなたかと。としばいなるじんだいなり。ヤア治右衛門さまかおはいりなされ御めんといひてとおりにける。調あれ女房共ないくの治右衛門さま。そなたのはんならかねかさふとおつしやる。地おめにかつてをきやといへばいひあひせてやかの女。これのまあまあ御こんしんな。もつともいへもしやうばいも私のものとは申ながら。子なかなしたるかなればもふ今でハ屋さいかさい。みなぬしのものでござりまする。こふおめにかるうへからわたくしがうけあひ。ふかしいことこそ此いへやしきさうおうに三ぐんめや五十兩のかしてやつてくださいやせと。つまぐあひせるべんぜつにくちいれくふたかほつきにて。調ア、これにハおよばぬことながら。徳

兵衛殿のいりゑるときくかふいたせばのちのため。地又もよ

うをさかふためサアはんをなされよと。手がたをいだせば

徳兵衛。かけすゞりひきよせこれそなたのはん。さらばま

づわたくしとチクリたがひにハんばんめいはくなり。ちや

うきん四百目つ、みのおりきんみなされとうけとりわた

しもふくれまするおいとま申そ。調ちとおさかつきいたし

ましよ。地かさねてくあつけますさらばといひてぞ歸り

ける。さつとすんだ目出たしとかねふところををし入

れ三太。此をなごしゆをおくつて。ちよつといつてくるほ

どにかどもしめてひもとばせ。地其うちおたつがもどつた

らゆ屋へいつたとだましてをけ。かならずなんにもぬかす

など。くちをとめたるこふ屋のりとくさまはやふと出にけ

所持持ても云々、色の染上をす
る緋屋の妻なれば、子持になり
ても色は猶すてぬぞ道理といへ
るにて、下の「あ、提燈もよい
わいの」といへるなます。提燈
は色けしの意。
宵染感 よひまどひに同じ。宵
にぬむたくなること。

法界の男 浮氣な男の意。法界
は佛教の語にて平等無差別のこ
と。法界の男は自他のみまっぴ
なく外な家なる男の意なり。
さる物 着物に同じ。
こりやなんじや こりやどうじ
やといふ。これはまあどうし
たのうといふに同じ。

しこため差る ひとつさり溜め込
まうといふ位の詞に當るべし。
しこためといふ語、入文字屋物
などに多く見ゆれど、皆、金を
多く溜める意に用ゐたり。傾城
禁短氣「いろく」思案して高い
伽羅をかふてやらるる此志婦し
がなしく、二度も焼てはきつず、
眞ひ溜めて近所の香具やへ安く
賣て、銀にしてしこため。若衆
の手づから十露盤はぢき云々」
風流曲三味線「色も知らぬ大慈
無道の男め、法師と心を合せそ
なたをたばかり賣りて、金をし
こためたるに疑ひなし云々」今、
多くといふ意に用ゐる「しこた
め」といふ副詞は此語より出で
たるものならんか。
官甲斐なし 役にも立たぬの
意。
そうとく 徳兵衛の男の表徳
(落屋後の名)なり。徳徳などの
字にや。近松が慈深き人の名に
選びたるものにて實には違ふこ
とならん。當時商人には初者に

り。しよたいもつてもいろいなをすてぬぞ道理こふ屋のつ
ま。月もさえゆくよあらしにあ、ちやうらんもよいわいの。
よひねまどひの小市郎だけがせなかにふら〜と。ねかせ
ひかすな大じの子まんねん町に歸りしが。とひもせぬに三
太郎。だんなさまはたつた今ゆ屋へといへば。ヲ〜とふ
てゆかちやかのみにてあろ。ほうかいのおとこじやと思へ
ばすむとらみながら。小市郎がめさますを。のれんのお
くの小さしきに〜やう〜すかしねいらせてわれもさ
る物。さかへんとをしにいれあ〜ればこりやなんじや。かけ
す〜りあけひろげふうふのゑんばん取ちらせり。これの
〜といのんとせしがあたりを見ま〜しをししつめ。〜
りや三太郎そちに大じの物やらふ。火をとぼしてお〜

いといふよりはやくあい〜。地さらばしこため参ら
ふと小あんどうさけているありさま。下女手間取は見をく
りてないささまとだんなのなか。あちらへ〜さ〜さ〜ちらへ
いひ兩方で物をつかみをる。あいつの〜の〜の〜あきなひと。
の〜きりくすのいひかひなきそねみもしものやくぞかし。
此いへのいんきよ吉もんじ屋のそうとく。代々つたゐるこ
ふ屋のかたと共にはげたるかしらをおろし。ひたひにたへ
しふるげぬきくひかねぬ世もさんようづく。此いへ屋しき
かしよくをばいもとむすめにやり屋町。あねにか〜りてい
んきよぶんたき〜のしまつと〜しみを。日〜れてひとり
よつとくるうちのもの共あれおたつさま。やり屋町のいん
きよさまの御出といふ〜るに。おふといふて立出るそうと

及べば法體となるもの多かりしなり。

紺屋の形 紺屋にて、小紋または紋所などを染め出すに用ゐるものにて、厚紙に漉をひきて造れるもの。

額に絶えし古毛抜云々 當時年若き頃は額に角を入るゝとて、額際の毛を抜きて角額にせしものなれど、その頃は最早老年法體の身なれば、額に絶えし古毛抜といひ、毛抜は毛をくはしめて抜くものなれば、くひかねぬ世とつづけたるなり。

算用づく 勘定づくに同じ。薪の始末云々 始末は儉約といふに同じ。とうし(燈心)に戸を閉めの意をこめて、日暮れてに火呉れての意をこめたり。とがり聲 怒を含める鋭き聲。出るとも出すものがの下に「わら」を補ひて見るべし。

悪性 生れつきの悪しきことをいふ。轉じて、淫奔。いたづら。うちとの者 一家の内に居るもの。内戸の者。

飲みさいて 飲み終へずして。くひこむ 商賣上に利を得ずして資本を減らすこと。

へこむ ひけをとる。閉口すなごの意。榮耀道 贅澤費。おとまし うとましの轉。談義參 僧の談義を聴聞しに參ること。

壘算 今も婦女子、わけて遊女などのすることにて、奴または烟管などを壘の上に投げて、その脚又は吸口より壘の目を算へ、壘の縁までの數、奇數なれば吉、偶數なれば凶などと定む。同行 己れと同じ修行をするもの。主に淨土真宗にて其信者をかく呼ぶ。

鹽の長二郎 手品師の名。還魂紙料 鹽屋長次郎は放家師にて太刀かたなは更なり牛馬をさへ呑む眼くらまに長けたり難波にて大に流行はれて元祿の比江戸に下れりもと鹽屋九郎右衛門

くどがりこゑにて。

調いりむ殿いとこへぞ。せつきしはすうちをあけて出るともだすものが。これふたりめのむこじやぞや。あのまこの小市郎にて、おや三人もたしやん

など。地いふかほのぶきやうなればやさしくも女ばうい。おつとのあくしやうをしつゝみ。調なんのよそへいきやり

ましよ。方々のそぶつものうちもの、手のたらず。けさそうくからしことして。かぜひいてつづつうするとして

おくにねてゐられます。おまへのなにしにお出といへばいや。コレたゞのこぬ。調たつた今そなたが歸つたそのあとへ。

ほりゑのくちいれ治右衛門といふものじゃ。こなたのむすめこむ殿りやうはんで銀四百目かしました。わかい人のことなれば。後日のねんにちよつとしらせて置ますといひ

をいて歸られた。さくとおれめがまふて一ふくのくすり

をのみさいてきた。地四百目といふかねを何にするとかつたぞ。くひこんだかへこんだかめをとのなかのゑようつかひか。エ、おとましやしんだいはゑもつまい。調おれら

がだんぎ参りして一文なげるさいせんさへ。しんぜふかしんぜまいかと。たみさんをいて見て。たとへさんがあふ

ても五とに三とはなげずにしまふ。そばにゐるとうぎやう衆がぐらぐらなげる時に。ぜにを一もんつまんでかた

へ手をかふふりあげ。地なげるかほでしほの長二郎せにの

手にとまつた。かふきてんをきかせねばすぎにくいしんだい。四百目の何にしたいきはをさかふとさめらる。女ばう

扱ひでつちめがはなしにちかひなしと。思ひあたらればねた

座の歌舞伎者とも又鹽をあきなひし者ともいへり。四編置土産「松風琴の丞年十七人形よくつかひ申候此は口から水を吹いだし壁に文字を寫し申候品玉鹽の長次郎まさりに候」

いさは 行き處。ゆきまらさきめる。とがむ。詰る。

ぎやうさん 些細のことを大きくしなすこと。おほげさ。

金こそは云々 金こそは如何にして出来まいし、印判を接して借主となる位のこととは、のつびきならぬ親戚の間柄のしるしといふ意。兼好一代記「たとへ外より身共が此しなを耳へ入れよと一門がいはだまつてくれらるべき其方云々」

千里萬里云々 非常なる間違手落にてもありしこととの意。

ましさいつそいふてのけふか。いや／＼それもむごいこと。どふがこふかとせきくるまにまつさきだつりおつとのかひいさ。詞ア、おやしさまなんぞと思へばぎやうさんな。わし等女夫らめをとが何にしやくせんしませふぞ其銀のな。みなみの兄御あにこの方に。くるわから出たよいはうこう人をかへて。手づけ銀がやりたいがせけん共にかねづまり。あのあたり利高りもたかしことにあにこのびやうちうなり。わしらがはんでのかす人あるとのたのみやう。地かねこそいなるまいしはんつくほどの一もんがひ。ことにわしとたにんなればなをしもぎりのか、れず。又ようむしんもあるものとそれではんをしました。うちとのものもさくぞかし。せんりまりりもちがふたか。あんまりなおやしさまとちんずる心の

南無三寶 失敗を口惜しく思ふとき發する語。略して、南無三とばかりいふ。三寶は佛、法、僧の三をいへど、佛に救助を願ふる意といふ。

まくし出す まくりだすの語。追ひ出す。

今の間 後撰集の「あはざりし時いかりしものとしてたいたまのまも見れば戀しき」などの用例によりて見れば、暫時といふにあたれど、こゝは、忽ち、めのまへなどの意に用ゐたり。

やさしさよ。徳兵衛の女房のかへらぬさきにとあしはやく。かどぐち門口に立けるがうち内にいしうとのわめきこゑ。なむ三寶ばう入といりもせずしばらくやうすをうかひける。なむしうとなを納もなつとくせずヲめをとが女夫いひあひせ。おやをだましてしんだいづぶせ。地居ねてゐるもうそじやどこへうせたとせんさくす。はてなんの何るすならすといひひでへ。あれ暖のうれんのあちらへと。ゆび指させばそうとくひ。のうれん打うちあげ。ま孫このこと氣もつかずらうがんの何見てか。詞ム、ッ。ま先つしよく人似合にあひぬあのびんつきがきに入らぬ。つづう頭痛のするねやうでない。地食又くらひゑふたかはる春のそう／＼まくしだしや。あの様なむ癖こなら廿人や三十人は今のまにとつて見しよ。三日とひとり癖ねさせいせぬ

もがり 紺屋の物干。嬉遊笑覽
 「三十二番職人歌合に竹賣が歌
 手あだりのよき枝あれば折る
 もうし。はなのかこひのもがり
 竹めせ云々」もがりは枝葉をも
 きたるなれば、竹木にわたるべ
 ければ、竹もがりといふなり。
 烏帽子折草子に「あのみつひに
 見ゆる竹もがりの内こそ五郎太
 夫と申て、えほしの上手にてさ
 ふらへ」と有り。もがりは物を
 かけてほしなどする故えほし折
 などは用あるなり。また家のつ
 こひとす。今は紺つきなどの染
 ものほし場に作るをのみもが
 りといふ。その造りやう、昔と
 つはれるは、かこひのかたの用
 ならればなり。近くは貞享頃の
 繪に、染物を張てほすとこゝろの
 竹もがり、垣の如く懸たる竹に、
 絹どしは横に幕をひきたるやう
 にはけてほじたり。」もがりの
 陸に懸るとあれば、やはり垣の
 如くに竹を立てならべたるもの
 なるべし。(附圖第十四を見よ)

とつぶやき／＼せきだはく。うちのもの共もふお歸りなさ
 れますか。詞をくりませふといひければ。ヤアみぢならち
 とをくつて。それいひたてにやしよくくひふといふことか
 と。地かどのとあくれば徳兵衛もがりのかけにかくれしを。
 それ共しらで歸りしは、あやうかりけるしだいなり。
 いれちがふて徳兵衛つゝとおつてはをりをうしろへひら
 りとなげ。じつことのかくの見おぼえたり女ばうのひざも
 とにむんずとゐて。詞こりやさいぜんからのしだいかどぐ
 ちにきいてゐた。留守のおれをねてゐると。おやじの手ま
 へのおとこをかばふやうなれど。しよく人にあひぬびん
 つきなあとこを。身がかのりにねさせたのねんがいつてか
 たじけない。入むこのことなればいへやしきかさいにも。

實事の格 實事は歌舞伎の語に
 て、一に捌き役ともいふ。立役
 を動じる役者の藝に属す。格は
 仕方。
 けしほども 少しも。
 ちうに提ぐ 足を下につけさせ
 ず提ぐること。
 奴頭 頂額の髪を深く長く剃り
 落し、僅に頂後の髪を遺して鬚
 を短く結ひたるをいふ。下男、
 下部などの髪風の風なり。
 元日から元日迄 年が年中とい
 ふに同じ。

けしほどもきつにつけまいがうぬが命にきつつける。地た
 つた今まおとこをひきずりだして見せふぞと。おくにとび
 こみ何かのしらすわつとさけぶをむなぐらつかみ。ちうに
 ひつさげをどり出どうどひつするよく見れば。こいかに
 ばうずあたまの小市郎ぼんにかふたるをどりのかつら。や
 つこあたまをふりながらかゝさまこいとなきゐたり。徳
 兵衛もしまひつかずことばなければ女ばうの。よひよりつ
 もるうきなみだ一とに。わつとさけびふしきへいる。ばか
 りになきけるが。なふ徳兵衛殿むごふごさるつらいぞや。
 ふぎせふものと見するたら。なせつきはつてもゐもせいで。
 ぐのん日からぐのん日迄よふいきどころもあることぞ。こ
 なたのるすのいひわけにふつつりことのかく。いんぎん

樂人 因果の理によりて苦を受くる人。因果人。
 十さい人 十さいは重罪。但し、十悪をなしたる極悪非道の人をいふにや。十悪は殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡。
 せと さしあたりたること。場合。
 うかくとつくした うかくと阿呆の數々をいふ意。
 明日は伊勢の御縁日 十二月十五日の夜のことなれば、うかいふ。日次紀事「伊勢講。俗間三人或五人常合心約其日聚其家謀其事」謂其日多用三首日及十六日云々。
 三世 過去現在未來。
 ●明日は云々よりふつと思ひきつた迄は暫文の詞。
 人置 奉公人の口入を業とする者。
 一角 金一步のことなり。一步金の形の長方形なるよりいふ。一角とよぶ。當時京阪地方に

あゝあやまつたく。地あく人共こゝ人共ぬす人共かたり共。われながら十さい人今迄もそなたにはち。詞やめふくと思ひしが是ほどのせとがなふてうかくとつくした。われ一人思ひきればそなた子共いんきよのため。あにきのしんしやうわが身のためふさめがのちのためもよい。地そこをしらぬ身でもなしあすはいせの御えん日。こよひの月にけころされ三世のしよぶつ御ばちをうけ。二人のおやにめいとからにらみころさる、ほうもあれ。ふつと思ひきつたぞ。詞けふのをんなもふさでない。人をきのむすめをかくでたのふだ。せうこに其かねこにありと取出し。地あすすぐにへんべんしきやうこふさとつうろせぬ。今迄心をむげにしたうらみもつらみもゆるしてたも。

廣く行はれたることなり。
 向後 この後。かされて。
 通路 八文字屋物などを見るに、皆文通復出入等の意に用ゐたり。
 むげにす なまけなくす。
 生薑酒 すりおろしたる生薑に砂糖を加へ、これに熱き酒を注ぎたるもの。寒さを防ぐに效あり。
 釜の下焼けた下女の名の竹にいひつけたり。

さりとして此徳兵衛女ばうのばちがあたつた。つみをゆるしてくれよとて手を合せてぞなきあたる。女房につこと打わらひ。詞エ、忝けない。あいさつきつたすてたのといきたびか聞たれ共。地かね迄見せてのせいもんとんと心もおち付て。けふからほんのふうふみなよろこんでたもやとてうれし涙をながせしが。とてものことにとしよつて一やの心もやすめたし。たいきながらいんきよへいて今のせいもん一とおりの。きかせまして下されかし。是のわたしが御むしん御をんにうけふと有ければ。何が扱ゆつりうければわが爲にもおやとうぜん。ついちよつといつてこふそんならそふしてくださいさんせ。しやうがさけしまちませふそれしやうがおろしやかまのした。たけの手だるをふつて見る。

南無三寶 *
せりふ 浪花方言に「せりふす
る。一理屈いふこと」と見ゆ。
理める詞の意。
はつたりと はつたと同じ。

酒通さげのかよひちひきかへて夫おつと北「きたへと出ける
が。つちにてふつと思ひ出しなむ三ぼう。きりにつまつた
女房のせりふ。もつともとむねにこたへしよりふさが大じ
をはつたりとわすれたり。いりあひかぎりにまてまたふ此
手はづちがふてい。いきしにの出来で銀きるかねいやくおやじ
の明日あすのこと。ちよつとあふてと立もどる。調ア、そふも成
まいか。たつた今せいもん立ことにかねも手ばなしたり。
地まづ此方こちらをしまふてのけふか。ハア、かひいやふさがど
ふぞかねのしゆびなつて。たまごさけのむ様にしたこと
じやとなげきを。きづかひすなといさめしがきのよひい
を女子な子こなり。こちらハマよと又立歸り。思へばくをん
な共しやうが酒して待ますと。手づからしやうがおろした

三重 三味線の一種の引方にて
甚だ長き手なり。文句ありても
語らざることあれば、まゝ文句
を略せり。此所の略したる文句、
何ともいひ難けれど。強ひてい
はば「消えて行く」または「跡
つけて君が方へと急ぎ行く」の
類なるべし。

中橋 道頓堀に架せる橋にし
て、今の相合橋のことなり。中
橋は寛文始頃の大阪地圖を見る
に道頓堀の大和橋と日本橋の間
にあり。此間いっしつ絶えて、
日本橋と大左衛門橋との間に一
橋架せられ(貞享年中)て、これ
亦中橋とも相合橋とも呼ばれた

心中重井筒

る心志ざしもふび不んなりと。つちをこへて越い又もどり。つち
に立たりつくばふたり行も歸るもさ定たまらず。どふせふか
こふし(爲)生やうが酒いりつく様に氣きがなつて。むねかきま胸いす
たま玉ご酒。心を二ツに打わつて君が方へとはしり行。後走の
涙のたま玉ご酒しものしろ白みに三重

中之巻

月早のはや。わたり(直)渡ぞめして。なかばしや。六けん町軒のさよ
がうし格から子のひじりの望のたま宣い。色徳のとく徳に際なり有
むかひ向両側かわか側やかす。のき軒のとも燈し火び日め標じるしに。さ
のふ日も今日けふも。あす明日のよも。かさね重る井づ筒のつる釣べ瓶な手れた

葉於門窓、添以三海鯉頭、爲追隨
之用、題額、飾其尖刺、不可敢
近之、義乎、
ひしこ、鯉(鱈)の屬、
ひともじ、葱の女房詞。
しやらくさい、分にすぎて已れ
をひけら、し、人を侮りて無禮
がちなるをいふ。寛永頃よりの流行詞なるべし。仁勢物語、下「おかし大いせい屋ありけり」の條に「かのおとこつ、けがひにして、つ
れに女と向ひをりければ女いとしやらなり、かれもいとせなんかくなかふそと、ひければ云々」と見え、可笑、三にも「けいせいとい
へる物はうはべ、こそいろよき小袖をきざりあふらとろ、かれくろくうすげしやうに花車めがしてしやらなる風情をおもてに云々」
二瀬、好色一代女、六、旅泊人誰の條に「食後下女も見るを見まれに色つくりて大客の折ふしは次の間に行て、御機嫌をとる。是を二瀬
とはいふなり。」今いふたきさはりのことなり。勝手向と夜の御と二瀬にわたるよりの名なるべし。傾城色三味線、淡の巻にも「茶屋の二
せめく女」と見えたり。當時、六軒町あたりにもありしものなるべし。(附圖第五を見よ)
仲居、誹語通言「茶屋にて座敷のかけ引諸事とりさばく女なり」
平野葛藤、播磨群談「住吉郡平野莊ノ田圃ニ作り則チ當所ノ市店ニ於テ製之所々ニ送リ味他ニ勝テ宜シ因テ之ヲ作り商フ者總テ平野商賣ト
云ハレ」

吹 竹。りやうり人迄ひやし物。かこの彦兵衛ひさがしら。
ひしやくひとんすひきがへる。ひらのごんにやくひしつむ
ぎ。ひらのやゑきやうひこずいぎ。
平野 葛藤 肥後 幸 壺

ひし袖、明かならず。好色伊勢物語に「好色男ありけり下女しけるもの、許にひしつむぎといふ物をやると、思ひあらば六まい宿にもし
もしなんひしつむぎをば袖にしつ、も(但音集覽所引) ●平野屋ふきやう 淫蕩又は房具などの名にや未詳。 ●肥後幸壺 肥
後の國より出す、はすいもの莖をばしたるものないへど、房具に此名のものありといふ。それにや。
紙燭、紙縷に油をぬりて燭の
如く火を燈すに用ゐしものをい
へど、こゝは、さきに引製紙の
ひれり元結と見えれば、た
の紙縷に火をつけたるをいふ。

紙燭 何
サアくじそくがみなになるなんとふささまサアどふじや。
どふじやくくとつめかけられ。調ア、かしましいいきが出

火屋 火葬場。
灰寄、死人を火葬して、その骨
を拾ひ集むることをいふ。近俗
佛事編「火葬ニハ必灰寄アルニ
シ古ヨリ傳フ是ノ世尊ノ茶毘ノ
遺意ナリ涅槃ノ雙林ニハ七日ニ
シテ薪盡クルガ故ニ第八日ニ當
テ舍利ヲ拾フチ人間天上及ビ龍
宮ニ分テ塔ヲ建テ、供養ス今世
俗モ倣之骨ヲ拾テ靈場ニ收ムレ
てんがう わるふざけ。浪花方
言「江戸でいふじやうだんなり」
まちつと、いましばらく。
きつふ、正しくは、きつう。は
なはだ。
まそつと、まちつとに同じ。い
ましばらく。

ぬ。物がいれぬゆるしてたも、地いきが出すば火屋へや
れ。そんならひばしてやいてのけ。なむ二ばうひがきへた。
サアふささまのはひよせじやと。どつとわらひしてんがう
も。明日のあつれとなりけり。ひまのしななはへひきや
く屋が何も御用のござりませぬか。ヤアふささま京へのほす
銀も有。御状も有との御ことつかひされませぬかととひけ
れば。調ア、よふよつてくだんした。まだふみをかきませぬ
まちつとしてからきて下され。それならあすのたよりにな
されませ。こよひのしまひでござるといふ。もつともなれ
共こんやのぼしてあすのまにあいせねば。きつふかなぬ
大じの用。地むしんながらまそつとしてま一どよつてくだ
さんせ。頼みまするとわぶれ共へんじもせずに出にける。

初夜 浪花方言「初夜、戌の刻なり。五ツとは決していはず上
下男女ともすべて、しよやと唱ふ」今の午後八時。
四ツ 亥の時。今の午後十時。
つば 狙ふ所。見込の所。北を見つ云々徳兵衛の住む萬年町は六軒町より北に當れり。
ばま 川岸のことなり（大阪の方言）こゝは道頓堀の川岸をいふ。
幾瀬 幾何の瀬、轉じて幾何の意に用ゐる。
つまらぬ 落着せぬ。
いんま いまの訛。
とほん と 茫然と。ぼんやりと。
首尾 計畫。

ふさは心も心ならず日のくれ迄のやくそくが。しよやすぎ
四ツのかねてより思ふたつばへあたりしと。かどに出でき
たを見つはま迄あゆみにしひがし。あしもひへてかなぐさ
をむねにうたる、いくせの思ひ。ヤアきたから人がはしつて
くるそりやとくさまとはしりより。見ればいぜんの飛脚屋
なり。詞おふささまかどれ、御状のふねが出来ます。ヲ、道
理、此銀の。京のわしがおやざとへあすの日に中になたさ
ねば。いかふつまらぬ銀なれ共今にさきからこぬいの。
さためしいんまにこふ程にまそつとしてからきて下され。
いやもはやさられませぬ。きてからこんやの地出されませ
ぬといひすて、こそ歸りけれ。ふさはひとりとほんとして
こんやのしゆびをちがへては。一代京へつながれてつれそ

根掘云々 根掘葉はりに同じ、
群に。くはしく。
ぢよさい 正しくはじよさい。
わけめ。ておち。
おのさま 京阪地方にて、中以下の人の妻を呼ぶ語。かみさん。さしこみ 銀籠にて邪鬼の意。
格子祝 遊女が馴染の客も来ず、知らぬ客の呼出しもなくて淋しき夜に、近邊をちよつとあるくことをいふ。かくすれば、客必ず来ると信ぜられたり。
か、らましかばくくとだにの下に「いばせしものを」を補ひて見るべし。

ふこともかぎりとい。ねほりしつてのうへなればちよさい
のあらふはつもなし。皆おかさまのさしこみと思ふもじた
いこちのむり。身一ツむねをすへたればいつそかなしいこ
ともなしと。内へかへればあるじのなきふさの今迄かど
にか。詞此さむいに物ずきな。そふじて此中うかくしや
るちつと心をしめや、と有ければ。さればあんまりよそが
にぎやかさに。地かうしいはひに出ましたといひすて二か
いへあがるてい。きが、りなればめをはなさず、チクリお
折、心を付けるがふさのそれ共しらかみのしやうじの月
をあかりにて。かみそり出しあへせどにか、らましかばか
くとだに。ま一どかほ見てしにたいと。思へばひかる、う
しろがみ手もわなくとぞふるひける。あるじ見付てうし

箱たれる。顔を刺る小さきツツミ
そりをひたひたれといふ。たる
は刺るに同じ。女重寶記、大和
詞の條「ツツミそりは、おけたれ」

肩がつへる。肩がこる。肩が
はるに同じ。

それや。客商賣などをする者を
それしやといへばそれや客商
賣屋のことなるべし。それしや
といふ語は可笑記に見えたり。

曲がない。愛想がない。
むげなう。情なく。いちづに。
せく。ささへる。さへざる。邪
宛をする。

男の間男云々。男が夫ある女の
間男たらんとするが如く、遊女
が非子ある人と末の約束する
は、思ふばかりにて、はかのゆ
かのものぞの意。

身のひし。身の引けり、落度と
いふに同じ。ひしは挫きの意
ともいへど、挫にて物の圓からぬ
よりいひ出しと思はる。井筒屋
源六戀楽庵に「親と親とのいき
づくはうはばまるい。が心はひ
しがき」毛吹草「とり得ずば身
のひしになる泥まぶれ」
管根崎心中「頼りだてが身の
ひして」今宮心中「向後ふるま
ひいたすまい御馳走が身のひし
屋」

かこふ。かくす。かくまふ。外
妾にする。
子養。子供の時より育て教ふる
こと。

ろよりふさそれの何しやる。詞はつとおどろきふりかへり
ハアないぎさまの。なんじややらびつくりとしました。あ
んまりよい月かげに。地ひたひたれふと思ふてと。まぎら
せば打わらひヨ、よい所へきて仕合や。さいのひだんな殿
ひげそつてくれと有。ちと其かみそりかしてたもと。ひつ
たくりをしつみ。しばしのかほを打まもりあたりしが。
詞ア、おとつひのす、はきにたんとかたがつかへた。そろ
くもんでたもらぬか。地あいとうしろにまはりしも扱の
けしきを見とられしと。かなしさこのさいやましてさらに
わかちもなかりけり。さすがそれやの女房とてせけんばな
しにきをゆるませ。詞是なふふさ。いつぞくと思ひしが
ついでにそなたにいけんが有。我もはじめつとめの身。

しろふとのいふこと、ひとつにきけばきよくがない。心し
づめて聞てたも。くるわやこの奉公のたのしみなふての
つとまらず。むげなふせくでいなければ共それにさへなをか
け引有。必つま子有人とすゑのやくそくせぬことぞ。地男
のまおとこ同前にて思ひばいかぬ物ぞとよ。徳兵衛さま
共今のあいさつきつたと有。ヨ、く仕合くめてたいこと。
詞おたつさまをりべつさせ。そふてそなたのほんもうなら
ず。いとしい人の身のひし一もん中のにくしみうけ。そな
たをおによじやよといふ。又かこわれてよをしのびごけと
うぜんにくらしても。是がなんの手がらぞやわか木の花の
一さかり。おひ木のかれば色うせてかゝるの男の心ぞや。
よのお山衆とちがふて十ヲのとしからこがひにて。とうふ

取來八百走とてこいやを屋へはしれ。かこよんでおじやはきそうちと
 だ欄なのかき迄あつけし預。ち小いさいからのな馴じみだけ我子
 の様に思真ひれて。よい客きやくもがな出世させ下女のひとり
 もつれさせたふ。思此方人ふのこちとばかりかみ皆な親おやかたの
 お同なじこと。わけ無もないことし出様してむ目ごいめ見せてたも
 んなや。た為めのよいことあるならば今でもいとまをくれと
 いや。よく欲をは無なれた是証せうこそんといふてわ僅つかのこと。
 ふ不びんなめを見よふかとあんじ案すこしがせらるゝぞや。思
 ひもよ寄らぬうれひをかけかな必ならずなかせてたもんなと。涙
 も聲こゑもしめくとの殘ころかたなきをんの程。ふさ無のかほ
 を上あげもせず。た表ごあいぐとしやくりなきのべの。いく
 へをし取ぼりけり。地客きやくかあらぬかおもてにてよふこ表さ

のべ 延紙の略。杉原紙の小さ
 きもの、大きき凡て七寸横九
 寸ばかり、よりに七九寸とい
 ふ。鼻紙に用ゐる。
 わけのないこと つまらぬこ
 と。

人事はば席しけ 噂をいへば
 のしがくる。(北條氏直時代註
 留)又は噂をいへば影といふの
 類。人のことをいふなら、席を
 して、その人を待て、其人は
 よくその處に來るの意。
 ちやつと 取急ぎて。早く。
 御客は堺の下に 誰某と替名な
 どいふべきを略したるなり。
 合點 *
 さればいの さればに同じ。い
 の、ともに感歎詞なり。
 あつてすぎたこと ずつと前に
 ありしこの意。とうの昔のこ
 となどいふに同じ。

りましたといふこ萃ゑす。たれ誰さまじやとす澄ましてき問げばい
 かふ合ひへるが。調兄あにきの氣色變か變つることもないかといふ。
 地事ハア、人言こといは席ゞむしろし後け徳兵衛さまそふなと。聞よ
 りむ胸ねもさ下いぐと。と飛びも下おりた詞き心なり。時下にてつ
 ち雜が門かどぐちより。む向かひの座ひ座こ屋からふ早さ早さまちやつと
 を送くらつしやれ。お御きやく客の早さかひ早のは早やふ早ぐとよ早ば、
 れ料ば。れ理うり人不ふしん審をたて。と立ひも問せぬ御お客きやく客のこと斷の
 り合がつてん點が行いかぬ。ふ様さ御さま座いお座ひ座まが座入座ならぬといふ
 を。ふ問き聞て。あれ問いな問ぜにとと問ひ問ければ問フ問、さればいの。
 あのや宿ど宿で徳兵衛達さまに達あ達やつた故。それ道で道やるなといひ
 付た。エ内、ない儀き様さま無の無わけ無もないそれは有い有あつて過すぎたこ
 と。地採今の採あい切さ上つ上き様れたう此へ所徳何さま何い何こ何になり何なんの

正月 正月買の時。正月は三ヶ
 日を始めとして、引續きて数日の
 多き時にて、遊女の全盛を競ふ
 折なり。自然客の物入も多けれ
 ば、遊女は皆早くより馴染の客
 に頼み置くを常とす。なほ委し
 くは索引によりて見よ。
 駕籠 駕籠屋の時。島之内の遊
 女は一寸隣へ行くにも送迎必ず
 駕籠に乗りたる由、南水邊遊に
 見ゆ。
 心得太郎へのばは 心得た
 の洒落。「おつとあやまつた」と
 いふ程のことを庄兵衛のばはま
 まといふこと延寶二年の役者丸
 はだか、元禄十三年の御前義經
 記、その他にも見えたり。〇〇
 兵衛のばはまといふこと、早
 くよりの流行詞なるべし。
 際の商あとなつめ 支拂時の商
 なれば跡を引く様にしつとせよ
 との意にや明ならず。

氣遣 ぎづかひ。さかひのきやくの正月をたのまねばならぬ人。
 平 ひらにやつてくださんせといふもまこと、思ひね共。ヲ、そ
 れもそふ是なふふさをおくろぞや。と。よばれば下にてりや
 理 うり人。そんなら道じやかごへもちよつとよつてくれ。心
 得 へ太郎へのばはさまとわめいてつかひの歸りけり。サア身じ
 舞 まひしてはやふいきや。いやよもいかふふけまする。つい
 儘 此まゝとつれ立二かいおりるまに。かごをにのぞかさよ
 せける徳兵衛さまあそんでお歸りなされませと。いへばと
 ばけたかほつきにてたれじやふさか。きののあきなひあと
 をつめやとよそくしう。くちにいひてたましひ。ひ
 とつかごなるつかひ鳥とびたつばかりに見へにける。色を
 悟 さとりて女房是のよふけて御たいきな。先おあがりなされ

生薑茶 別につくよぶものある
 にあらず。徳兵衛が早くふきに
 逢はんと思ひてのしどろもどろ
 なるこしらへ詞。

夜とも 一夜中。よどほし。

ませいかふひへる酒一ツ。それかんつきや、と有ければ。
 詞ア、をきやくもふ歸る。此ごろ酒があたつて今も今を
 女 んな共。しやうが酒をたべさせふと手づからしやうがおろ
 すやら。地それがいやさにやうくとは是へにげて参つたに。
 又酒をのめとややれにげんと。出る所を女房とびおり立ふ
 さがり。詞なんのむりにしんぜませふ茶でも一ツ参りませ。
 いやく此ごろの茶があたります。地今も今去かたでしや
 うが茶をくれたを。やうくとにげのびたせひかへしてと
 いふ所へ。詞あにのあるじがねまより出。ヤア徳兵衛よふぞ
 く。よがねられぬによと、もはなさふ。サア地こへとよ
 びかくれば病人といひあにのめい。ぬぎもいれずぶへん
 事 じにもちくしてぞあがりける。詞なんとなかばしかけた

西國 西國三十三所觀音通の略。三十三所は那智の如意輪寺、紀三井寺、粉河寺、横尾の施福寺、藤井寺、鹽坂の南法華寺、龍蓋寺、長谷寺、南園堂、宇治堂、上醍醐准舘、岩間の正法寺、石山寺、三井寺、新熊野、清水寺、六波羅密寺、六角堂、草堂の行願寺、西山の善光寺、穴穂の菩提寺、越前寺、勝尾寺、中山寺、播磨の清水寺、法華山、香露山如意輪寺、成相寺、松尾寺、竹生寺、長命寺、藤浦の觀音寺、谷汲の華嚴寺。

心こころの落着おちつきかぬまにいふ。伊勢講いせこう、日次紀事ひつじきじ、伊勢講いせこう、俗間三人よこまにさん或五人ごにん常合じょうがっ心約しんやく其日そのひ聚あつ其家そのけ謀まわ其事そのこと謂い其日そのひ多おほ用もち三首日さんしゆじつ及十六日じふろくにち今日けふ其その所ところ聚家あつみや頭人あたまにん是首長しゆぢやう之謂也をいふなり頭人あたまにん輪轉りんぜん酒食しゆじき講中こうちゆう之人のひと每おほ其講日そのこうじつ各出おほ銀或錢ぎんあはせ聚飲あつあひ而を區まは之を爲な他日たひ登宮のぼみや之路のちみち發はな齋いひ僧侶そうりふの食事じしをいふと、

の。らんかんわたすばつかり。はるのちやう中わたりぞめ初氣色きしきもしだい次第にこころよし。かんあいたらほんぶくせふ是本といふが此こゝなつ夏の。西國せいこくの御ごりしやう利生やう生三十三所さんじゅうさんのふうけい風。一々いちじつかたつてきかせん利サア利ろくにゆるり利とゐやと。地ちは果てしもしれぬ知ながばなし長徳兵衛心とくべいゑしんもだくと。かひいかやふいさを今迄いままたせ又またやと屋やでもあ宿こがれん。はやふ早立たさ氣はせ念いていや申い。詞ことばこよひ今ひ待我わがら伊勢いせ講かう講かう講中待まつてゐ居らるべし。地ちまかり罷歸かへると立たんとす止先ままちや今迄いまたれが待ま待つものぞ。まそつとはなし止やととゞめられ。いやいやいり屋町やのいんき陰よへ。とき時に参まゐるやく約そく束ぜ是非ひおおかへしいひひけれ共とも。はてはとき時のあす明日のことことひら平にといふにせん爲かた力なく。を女んな共ともが女く何い何に産んなんに時に小小さん産いたいた知さ知ふおもしれおず。お

は僧侶の食事の相伴をする意。遊あそべた。のつつびびききならぬ方かた。自身みづか番ばん 往時むかし一町毎いちちゆうごとに町人まちにんが晝ひる夜よ非常ひじょうを警しんむるむるために守まもりたる小屋こゝろをいふ。あ痛いたし。あ痛いたしにて、こは給たまはばまぐりこといふ類るいの一種いっしゆの接尾語けつびごとも見るべきもの。

うめく うなる。

生薑火燵 生薑茶の類。

もどし辰なされ下されといへ共兄あに聞入きこず。のがれぬかた方のじ自身んば番ん見舞ま存ひたふぞんずれ共共。是是で御のおかへしなされいまい痛あ痛いた痛く。あ痛いた痛し痛こ痛く。ひ冷へる加かげん減かにいかに痛せん痛き起がお起こつた。歸かへつてやう生じ致やう度いたいたしたい。は理て理わけ理もない。や夜き夜にあ中たつてな痛を痛いた痛ま痛ふ痛く痛すり痛でも痛や痛ら痛ふ痛か。いや通も通ふ通く通すり通も通と通ら通ぬ通か通こ通に通の通つ通て通歸通り通たし。あ内いた内く内と内う内め内け内共内。ない外き外す外い外して外そ外と外へ外と外て外い外出外す外に外こそ外。小座ざ座し座き座の火こ火た火つ火に火火火を火た火ん火と火入火さ火せて火。と泊まつ泊て泊こ泊ざ泊れ泊と泊し泊る泊ければ泊。い調や調く調こと調し調の調こ調た調つ調い調か調ふ調人調にあ調たり調ます。今女も女今女を女んな女共女が女し女や女う女が女こ女た女つ女を女し女かけて女。や漸う漸く漸わ謝び謝こと謝いた謝した謝。地地と地心心の心さ先き先へ先め先け先が殺ら殺の殺。何何を何い何ふ何やら何わ何け何も何なし何こ何になり無共無ね無せ無ませ無と無。

うちものもの * 正氣づいたにて、病氣が治まりしとの意。
 輕口 いひかけ、縁語、同音異義の語などを用ゐて面白くいひなすこと。
 まきら 紛らかし。
 内と外とに云々 内には兄弟姉妹が引きとめ外にはふさが今か今かと待てるを、駒を諸手綱にて牽き合ふにたとへしなり。
 心の駒 和訓采「法苑珠林に心馬情猿と見え、自鏡錄に意馬情猿と見え、息心録に識馬心猿と見えたり。ひかれなばあしき道にも入ぬべし心のこまにたづなゆるすな云々」
 諸手綱 一方のみの手綱とるを片手綱といふに對して、左右ともにとるをかくいふ。馬術の語。さよぶとん 夜の蒲團といふに同じ。さは接頭語。
 ころり 臥する有様を形容する語。
 らちがない 騰次なし(位次の)

蒲團 着 表 内 籠 下 内
 ふとん打させおもてにいななき手づからちやうおろし。う
 ちとの者にめくばせしそろくわきへのく様子。ム、ウきが
 ついたとそらさぬかほ。いやくさむいにいなふよりあた
 かにしてとまつたが。先此方の徳兵衛とおもき心をか
 くに。ふとんかぶつてゆくふりもなみだ。くろめし三重ま
 ぎらなり内と外とに。ひきあひの。心のこまのもろたづな
 ふさが思ひのかよふかや。ゆめといなしにうつなや。か
 ほをならべて見る様でいたきつけばさよぶとん。涙にぬれ
 てひやくとかもじほどけて身にさなる。其夜のこちちし
 みくと。身に引まといひねて見ても。ひとりころりのエ、
 らちがない。心の内ひむしやくしやまくらいつそあけても
 のけよかし。ア、大ぬきの此ふとん。小六もねつろさよも

亂れたるをいふの音便らつし
 もなしの轉じたるなりといふ。
 物事に次第もなく混雜せるをいふ。
 いつそ の下「夜が」を補ひて見るべし。
 大ぬき 大幣は大祓の時のしてなす串をいふ。大祓の果てたる時、人人これをひきとりて身をなづる事ありしより「大ぬきの引手あまた」など用ゐたり。ればな 寐入端。
 ふるひく云々 足許も震ひ震ひを飾にかけて飾の目を眼にいひかけてめもくれてといひたるなり。目もくればはは目も見えずなりとの意。

ねつらん。ふさもねよふひく手あまたにどこのたれめとね
 くさつた。ぶちたいふみたいたきたいゑ。くくふ
 むなふとんにとがもない。今のふんでもたいてもふさに
 あられぬあせぬかと。こたつにとんとこしもぬけわけも。
 涙にわが身ながら男の。様にもなかりけり。戀のねばなの
 屋ねつゞきいつか思ひの山口屋の。物ほしつたひしのびく
 るよその戀かとうら山しく。見ればあまどのとぶくろを。
 そつとふまへるあしもともふるひくのめもくれて。調ヤア
 此所 此にかいの。ふさか地これのとふぞとばかりにて。こた
 つを中に手をとりにたゞなくよりほかのことぞなき。なみ
 だの中にもおとこのかほじろくを見て。ア、いとしばやき
 をもまんす故にやら。かほにたんとやせがきたそのくいた

すれる 我意を強りて人の意に従はぬをいふ。
しなもの つまらぬ者。
請 請人の略。

談合 談し合ふこと。相談に同じ。
待ちぼうけ 待ちくたびれること。

観念 覺悟。あきらめ。決心。

きつれど云々 その詞をきく前からお前の誠意に満足してゐるの意。

死脈が打つ 望の絶えたるないふ。

心中重井筒

れがさするぞい。皆わし故とそれい〜わする、こともあるにこそ。さりながらもふくにしてくだんすな。こふいへばどふやらすねていふにたれ共。みちんもそふした心もなし。調わしが京のとつさまよしないもの、うけに立。あすぎりに銀たてねばわしをやるのはんじやげな。地わし此所へ身をうつてさきからつれにきたとき。一ちううり二ちうばんらうしやのかぢみにかけたこと。ならぬことをくどくと思ふのぐちのいたりなり。調さき立しなにかみそりを手にとりとりたれ共。ないぎさまに見つけられぬしにもせずある間に。地こなさんのこゑのするむかひがわよりよびにくる。うれしやさきでなにこともだんかうせんと。今迄まちぼうけになつたれ共。一めあへばこれほ

んもうすゑたのみないちぎりなれば。是かぎり〜とあふたびごとのくいんねん今さらためていふことなし。ていぢよをたてるおたつきまのさげしみもはつかしい。中よふしてくださんせたがひにむまれかいつたら。ほんさいさだめぬそのさきにはやふめをとになりませふ。いひをくことのはばかりサア〜もどつてくださんせと。おつとにひしとしがみつきたへいる。ばかりに。なきゑたり。調ラ、さかねどばんじしこくした。さりながら其ことばうれしい様でうらみ有。ほんさいあるいしれたことおなじ口でもろ共。地しんでくれといふてたも京のたよりを大じに思ひ。かたり同前のさいかくにて銀四百目から出し。一ときばかりいふところにあつたれ共。とかくふたりにしみやくがうつどこもか

いかな張其樊噲でも ippinaru
智者でも勇者でもの意。張其樊
噲ともに漢高祖の臣。

空響文 本心よりせざる偽の響
文。
胸がすはる 腹がすはる。覺悟
がきまる。

つこちがほ わびしさうな顔つ
き。憂へ顔。
曲もなし *

あぢきなし 面白くなし。もの
うし。つらし。

ぢやう 必定に同じ。眞實。ま
こと。

しほりなき あたりに聞えわや
う。聲を立てずに泣くこと。

しほも一どきに。しほのさいてくるごとくばらくとしゆ
びわるく。詞もとよりをもつをんな共りくつをつめてう
らみなき。いかなちやうりやうはんくひいでもだうりにむ
かふやさきない。銀もわたす其はにてみすくうそのそ
らぜいもん。地とてものがれぬ此はちぶつじんをまたず共。
此方からあたつてらちあけん道からとうのすひつたり。
しになをしひ二とならぬかこちがほのきよくもなし。手に
手をとつてにつこりとしねしなふといふてたもと。こたつ
にかほをうちなけて世にあぢきななき涙のてい。ナフそふ思ふ
てがちやうかいの。思ふがふしきかめをとじやもの。ほん
にそふじやかたじけない。うれしうござるといだけあひこ
るを。たてずのしほりなき。すみ火も。さへてこぼるらん。

やみばふく 病のために、つが
れて感になるをいふ。
空耳 ききでこなひ。ききちが
ひ。
うたてさ 厭はしさ。うるささ。
ひつき じふのう。

おくへかくとや聞へけんあにのこゑにて。なんと徳兵衛
いたみのよいかと。地こつくせいてくるをとすやれかく
れよとうろたへて。ふさをこたつにをし入ふとんかぶせて
徳兵衛の。うへにもたれおほひになりかほもきよろくな
りにけり。ほどなくあるじ立出。詞物いふこゑの聞へたの
たれであつたとふしんがほ。いやそれの私ねことかな申た
か。たゞしおまへがやみぼふけてそらみ、でかなござりま
しよ。かへつておやすみなされといへば。イヤいかふよがね
にくい地はなしさいたいさくの。物がたりしてきかせふ
とこたつにあたるうたてさよ。ヤアこたつの火がうすひ。
是女ばう共火をくいつとおこひて。ひかきに二三はいも
つてをじやとよばれば。徳兵衛きよつとして申々。火の

膝のさら 腹。膝頭。

北脇 北脇のことなり。淀屋出
世流徳に此ところを引きて「北
ばまへのよいしゆはこたつに
水を入ます」といへり。
よい衆 身代のよい衆にて、金
持。富める人。
氣のとほらぬ 氣がきつぬ。無
粹な。

池田炭 一庫炭ともいふ。播磨
群談「一庫炭。河邊郡一庫村ノ
山中に炭窟ヲ造リ山林ノ腐木ヲ

斃り採り竈ニ入レ口ヲ閉塞テ土
ヲ以テ之ヲ塗リ日ヲ經テ之ヲ開
ク市店ニ送ルノ始先ツ池田ノ市
ニ立ツテ以テ世ニ池田炭ト稱ス
今近郷ニ之ヲ習ヒ得テ所々ニ竈
ヲ置ケリ此炭自然ト香甚美ニシ
テ火氣強ク和カ也因テ茶爐ニ置
ケリ

たへがたき地獄 焦 地獄をい
ふ。
一たんこらしめの下に「ために
としたるもの」を補ひて見
るべし。

きついのおどく御むようにあそばせ。いやくすそがひへ
る。地^膝ひさぶしのこげるほどながこちのよいといひければ
ひらに^平それの火のよう^用じんと申。ひさのさらに火がついた
らば御しんだいのさま^身たげと。いへ共^兄あにのこらしめと思
ひ^意ぢわるふ。火をは^早やふもつておじやとぞせがみける。
詞ア、申。お前の病氣で引こもつてせけんを御ぞんじござら
ぬ。此^冬ふゆからいつかたも火のつよいこたつすたり物。さ
たわき^脇へのよい衆の大かたこたつに水^入をいれるげにござ
る。かさね^重るつともい^井ゆる、身^氣がきのとやらぬ。こたつ
に火^入をいれなんと、のさりとてい^御おせうしな。あれおかさ
ま火^入のいらぬとおつしやる。と。身^一をもがくその間に火
か^魚きのこがる、もみ^紅ぢばを。もつたることさい^池けだずみ^田る

んり^慮よもない^無きがこたつにうつし。サアあたらんせといひす
て、^蓋だい所にぞ出らる。そば^側で見^火るさへ徳兵衛身もこ^魚げ
わたるこ^心ちにて。詞^兄あに^火や人其火であつふのこざらぬ
か。いつそのことにひ^火あぶりにならしやれぬか。こ^火、迄^火く
きが^氣きまする地^來ちとい^止けてけ^消しませふと。よらん^寄とすれば
そのま^止をきやと。と^止められてい^火こたつよりむねをこ^魚が
す^苦い徳兵衛。ふさ^蒲いなみ^源だのうづみ^埋びにやき^火つけらる、身
のくるしみ。ふ^蒲とん^團のかげ^隆より手^火を出し^新すそに取^付つき。こた
へんとするにた^堪へがた^地き^獄ちこくもかくやとふび^火なり。あ
るじも一^且たんこ^燃らしめのさのみ^哀あ^火れと思^詞ふにや。詞ア、
あた^暖、まつたもふか^暖へるそなたもやすみ^思やと立^脚かへる。
地^兄徳兵衛あ^怨にながらう^思らめしくやおも^思ひけん。詞^詞とても

岩木を分けぬ人心 岩木を分け
て生れたるものにあらば、人
の心には情ありとの意の諺。
威陽宮 秦始皇帝の宮殿なり。
宏壯を極めたるものにて、前殿
阿房宮のみにても、東西二百間
南北四十丈に達せり。頂羽威陽
宮を焼きしとき、火滅せざるこ
と三月の長きにわたれりとい
ふ。
威陽宮の煙の中に さきに火を
紅葉にたとへたるより思へば此
の句は謡曲、紅葉狩の「ふしき
や今までありつる女。とりんく
化生の姿をあらはし。あるひは
殿に火焔を放し。または虚空に
炎を降らし。威陽宮の煙の中に。
七尺の屏風のうへになほ云々」
とあるよりとりたるものなるべ
し。物凄く恐ろしき様のため
なり。
まぶる *
尋常の下に「諸共に死なん」を補
ひて見るべし。
榎屋町 酒邊町ともいへり。

ことにまつくろにこげる迄。あたつてお歸りなされかしと。
地いへどもさすが一ごんも。いの木をわけぬ人こころおく
の。ひとまにいりにけり。徳兵衛の小ばらたち。やくらも
ふとんもひとつにつかんでとつてなぐれば。かんやうきう
のけふりの中にかほも手あしもくれなるの。ふさめばか
りじろくと。ものをもいはずかたいきのしやうねもみだ
る。ばかりなり。やうくにいだきあげたもとにあをぎ身
をさまし。はないけのみづさいのひと。かほにそぎくち
しめしすこしこころもさやげり。サアあにきまでがしられ
たり。なにめんぼくにのめくと人につらまぶられん。
いざ此ところぞじんじやうにとわきざしとらんとせしとこ
ろを。そふさへかくこころいまればうれしいくさりながら。

今の相合橋の方によれる玉屋町
の一部。
日親様の御門 生玉中寺町正法
寺の門をいふ。正法寺は攝陽群
談に「法華宗受不施派京本法寺
末院ナリ日親堂境内ニアリ」と
見ゆ。又、正徳二年の印本、入
子枕に「當世のはやり物、正法
寺の日親上人もよい場所におら
れて、生玉のもどり足、萬歳彦
八についでしたるあまり錢を十
二灯に包み云々」。日親上
人は京都本法寺の開山。應永年
間、立正治國論を作り、將軍義
教を諫めて、獄に下され、嚴刑
に處せられ、遂には活火に焼
きたる鍋を頭に冠せしめられた
れど風せざりしより、世に鍋か
ぶりの上人ともいふ。
そなたは法華我は浄土願ふ所が別
なれば 法華すなはち日蓮宗に
ては即身成佛を願ひ、浄土にて
は極樂往生を願へばなり。法華
と浄土とは、法華より浄土をそ
しりて念佛無間ともいふ程に

此所
こゝでなか／＼おもふやうによもなるまい。やねづたひに
うらへぬけたる屋町のもんへおり。しうもんなればにつし
んさまの御もんでしなせてくださんせ。ヨもつ共くあり
がたいこゝろざしサアおじやとたちけるが。詞ヤアそなたの
ほつけわれのじやうど。ねがふところがべつなればさきの
いきのもおぼつかなし。地しうしをかへて一しよにゆかん
今だいまくをさづけてたも。とくくと手をあはすればふ
さいふかくのなみだにくれ。詞わしにじやうどになれとも
いはずほつけになつてくだんする。地扱もうれしい心やな
もつたいないことなれど。今までまい日千べんづ五年と
なへただいまくのとくでゆるしたびたまへとたがひにが
つしやうこころをしづめ。こんじんよりぶつしんにいたる

て、犬猿もただならざる間柄なり。

今身より佛身にいたる迄よく持つ南無妙法蓮華經。日蓮宗に於て受戒の時に唱ふる語。日蓮上人が其兩親に戒を授くる時、妙法蓮華經を父母の額にあてて、かく唱へたるに始まる。よくたもち來るといふは受戒者の唱ふる語。たもつは戒をたもつなり。鷲の峯。印度摩竭陀國王舍城の傍にある香閼山をいふ。山の形鷲に似たるより鷲鷲山ともいふ。釋尊多く此所にて諸の教を説けり。中にも法華經を説きしを以て名あり。

三途の河。さうづかはともいふ冥土の入口にありといふ河の名。此河を越ゆれば、火途(地獄道)刀途(餓鬼道)血途(畜生道)の三途にわたるといふ。

鬼瓦。屋根の棟の兩端に穿く大なる瓦をいふ。鬼の面の形などに造るより此名あり。これを限の立酒や云々。人の野邊送をする時には、立酒を呑む習はしなれば、今ぞ冥土の……立酒や樽とつづけたるなり。

までよくたもちたてまつる。南無妙法蓮華經。今身より佛身にいたるまでそのせたまへそのせてたべ。なむめうほうのちからをたのみに。しつかとおほてのぼる二かいや三重屋ねのむね。わしのみねぞと。ひとすちにはふつたどりつたひゆく。みちはさんづのかへらぶさしものつるぎの山さへて。こゝにちこくのおにがいらゆん手もめてもおそろしく。のがれくてゆくすゑはいまぞめいどのかと出と。これをかぎりのたちさげやたる屋町にぞ。三重まよひ行

ちしほのおほろそめ 下之卷

血潮の塵染。塵染は寛文年間京都の紺屋新右衛門が初春の月の色を見て創めて工夫したる由。近代世本談に見ゆ。同じ紺屋の徳兵衛が最後なれば血潮の塵染と附けたるならんか。筒井筒井筒の水は濁られど。此句は傾城善の綱(松の落葉六、中興富流所作)の書出しにあり。これよりとりしにや。朝の雲夕の霜。あだしといひ出さんため序。あだしが浦。あだしが原の類にて、あだしは、あなしの意。うつほぶね。大木をくりて造りたる舟。身をなきもの。うつほぶねは、別に澤(海又は川の船路となる深きところ)なきを、身を無きにいひかけたるなり。此岸に此世の意、彼岸に未來の意をこめたり。かきぶね。牡蠣船にて、牡蠣の附着せる船のことなるべし。色駕籠。遊女の乗れる駕籠をいふ。

筒井筒井筒の水は濁られど。今なみだにかきにこす。月もたもとに。かきくもる。あしたのくもゆふべのしもあだしがうらのうつほぶね。身をなきものとしりながら。いとしくしのたひふれも。しばし此きしかのきしの。かりのうつほのかりばしや。もにうつもる、かきぶねの。とまのすきまのともしびの。かぜをまつまの。かげよりも。あす迄またぬわがいのち。我とうしなひふたおやの。そだてし御をんいかげせんあゆみもやらすなきあたをくりむかひの色かこもしばし。とだへいづくにも

演劇 大阪にては川岸を濱と呼ぶ。こは道頓堀側の意なり。
竹田 竹田近江のからくり人形芝居をいふ。寛文二年の創立にて、大阪に行きて、竹田の芝居を見れば、そのつひなしと迄世にはやされしもの。
千日寺 道頓堀太左衛門橋南街の南に延びたる所、今の千日前のあたりにおりし寺。
七つの芝居 竹田近江のからくり人形芝居、片岡仁左衛門座、山本飛騨座の手づま人形芝居、岩井半四郎座、嵐三右衛門座の五芝居の外に竹本、豊竹の二操芝居を加へていへるにや。寛永二年刊の衆大門屋敷に「道頓堀足代屋長左衛門、新宅古宅をひとつにしての振舞、芝居はいつれ成とも、心／＼に御出と相觸、七櫓の棧敷残らず買取、提重二百組四芝居舞臺子出見世中の、陰子壹人も残らず買取其日の給仕人として、終日の馳走云々」と見ゆ。これによれば、歌舞伎芝居は、さきの片岡、岩井、嵐の三座の外に、なほ一座ありしものと思はる。或は篠塚次郎左衛門の座元たりし芝居もありしにや。未詳。

なじみくのねいりばな。我身のこよひちりはつる。なごりつきせぬはまがいの。歌こゝりたけ田かよはなんときぞ。五ツ六ツ四ツ千日てらのかねも八ツか七ツのしはる。ふたりがうのさせばきやうげんの。しぐみのたねとなるならばわれをこん屋のかたおかに。何とか思ひそめがひ、せりふにないてくれよかし。つゝむたもとのひたのせう。ふたつがひの手づまにも。かゝるなりふりうつすとも。此思ひ

「染川十郎兵衛にゆきあひ。是は久しやお前も過し年。大阪で病死あそばせしと聞しが云々」と見えたり。寛永三四年の頃歿せしにや。傳未詳。せりふ 歌舞伎役者の舞臺にて使ふ詞。 ●飛騨座 手づま人形の名手山本飛騨座をいふ。衆大門屋敷に「からくり細工はおやま五郎兵衛其子山本彌三五郎、是を傳て無雙の名人となる、一筋の糸をもつて大山をうごかせ、小刀一本を以て形ある物を作りて、是をなたらしむ、別て水學の術を得、水中に入て水中より出るに、衣服をぬらす、繰なるはさみ箱にふれを仕込、川水に浮て用を達す、此儀をいふんに達し禁庭におゐて、細工の術をいらいんに備、則細工人に仰付られ、山本飛騨座源清賢と受領し、翌年雨龍の細工をさしあげ、河内樓に重官にせらる。」
おしまの心中 明ならず。心中二枚繪草紙のおしまは曾根崎天満屋の遊女にて、そのあつ、屋にわれが今かされぬづ、云云」の文言に合はず。
篠塚 歌舞伎役者篠塚次郎左衛門をいふ。始め敵役を勤め、寛永六年に立役に轉じたる人。寛永四年の位附、寛文の上上吉。享保の初年より其名見えず。没年未詳。
岩井半四郎 道頓堀歌舞伎芝居座本の名。此人の傳明ならず。あやめぐさ 歌舞伎役者芳澤あやめを指す。名人忌辰録「齋藤某の子。始め色子なりしが、歌舞伎へ出て、若衆形より立役となり後若女形となる。元禄十六年には女形の巻頭、正徳六年に

をばよもしらじ。こぞのおしまの心中の。そのあつ、屋にわれが今かされぬづ、と。しのづかに。いんれいゐるの半四郎。うれひせりふのあやめぐさ。つゆのおとしも御身とわが。つもる涙のしづくかや。西にあらしのふきはれてそらひさへてもわれくゝ。れんぼのやみにくらがりによしなきことをしだしてあつまのはてに名をながす。それにをとらぬなげきぞといとゞ。思ひに。くれ竹の。ふしをならひしじやうるりも。よそのことよとなくさみしが今身の。うへにふるしもの一あしづ、にさへうせて。しに、ゆく身

は三ヶ津總護頭、享保二年には古今無類と評判記に記載せり。自姓を橋屋權七、享保十四年七月十五日歿歳五十七。道頓堀歌舞伎芝居嵐三右衛門座をいふ。寶永の初年は三代目三右衛門が弱年の頃なり。元祖三右衛門は大坂根生の太夫元。(播津四宮の人、西崎新平の子)六法(江戸の丹前)を家の藝とす。元祖三右衛門一年江戸に下り小夜嵐といふ狂言を演じ、其六法の内に、花に嵐といふ臺詞ありしが、此臺詞世好に投じ、世人に嵐々とよばれしより、本姓西崎を嵐と改めたりといふ。(南水漫遊による)元禄三年十月十八日歿、歳五十六。

戀慕の闇に暗がりによしなきことをしだして、八百屋お七の歌祭文より出でし句なるべし。松の落葉、四條河原涼八景に「祭文」はらひきよめたてまつるの色のさかりはあづまなる八百屋のむすめお七とて戀路のやみのくらがりによしなきことをしだしてつみはしさいにきはまりて云々」と見えたり。●それに劣らぬなげき 八百屋お七に劣らぬなげき。

今身の上に降る霜の一足づゝにきへうせて 會根崎心中の道行「此世の名殘。夜もなごり。死に行く身をたふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えて行く夢のゆめこそあはれなれ云々」より出づ。

歸口 佛殿(神佛混淆の時には神社にも)の簀につるす銅器のことなれど、こゝは、世に危き所を脱するを歸の口をのがるといへば其意をもこめたりと見ゆ。

此三界の衆生云々は法華歌題目などの文句かと思はるれど明かならず。此句の出典は法華經二の卷にあり。親は佛をさす。

五逆の提婆云々 五逆罪を犯したる提婆達多が妙法の力に依て天王如来の記別(印可に同じ)を蒙りたるをいふ。五逆は佛法にて説く五つの大罪、即ち害母、害父、害羅漢、破僧、出佛身血

のあぢきなや。あれ見かへれば人ごゑの。我を尋ねてかうづの町をいそぎのがるゝわにくちや。頼みをかけし御經の。此三がいの衆生。みな是我子と聞時。親もろ共に。いたるなりけりなむ妙。ほうれんげ經なむ妙法れんげ經。なむ妙法れんげ經。五ぎやくのたいばの天王によらい。龍女も成佛する時。ぼんなうぼだいと。なるぞたのもしなむ妙。法れんげ經なむめうほうれんげ經。なむ妙法蓮花經。

にして、此罪を犯すものは必ず無間地獄に墮つといふ。よりに五無間業といふ。法華孔目に五逆罪を殺父母、破和合僧、出佛身血、殺阿羅漢、破羯磨僧の五とす。法華經、提婆品、成等正覺、廣度衆生、皆因提婆達多善知識、故告諸四衆、提婆達多却後過無量劫、當得成佛、號曰天王如来云々。●またら聲 斑に少し龍女も成佛云々 婆娑羅龍王の女八歳の時、妙法の力によりて忽然として男子に變成し、南方無垢世界に往きて、等正覺を成じたること同じく提婆品に見えたり。●煩惱菩提 摩訶止觀に「煩惱即菩提」と見ゆ。煩惱菩提となるぞたのもしといへるは、提婆、龍女の如きものも、妙法の力によりて、苦患を脱れて悟を開きたりと聞けば妙法の力ぞたのもしきの意。

六万九千三百八十四文字を。たゞ此七じにをさまりし。大まんだらやまたらゆきあめにもかせにもまふてきて。朝のげんぜゆふべのこせ。此世あの世のふたおもてこよひ。ひとつにならのはの。かげのうき世のちりあくたともにいのちのすてばぞと大ぶつてんのくひんじんしよ。身をすつる。やぶとなりけり

六万九千三百八十四文字は法華經の文字の總數。●七字は南無妙法蓮華經の七字。●大受茶羅 日蓮宗にて、即身成佛の本尊とするものにして、七字の題目を中央に、其左右には諸の佛菩薩の名を、四隅に四天王の名などしるせるものなをいふ。●またら聲 斑に少し降りたる聲をいふ。

大佛殿の勸進所 生玉正法寺(日親堂のある寺)よりは北の方、高津上磯町(今の東區東平野町一丁目)あたりと思はる)にありき。貞享の初年、南都東大寺再建の勸進のため、沙門公慶、安治川の大佛島に勸進所を立てたりしが、元禄年間其地の市店となりし時、此地に移りしなり。寶永年間の大坂地圖を見るに、上磯町北一面の地は畑なり。身をすつる聲云々 世には「子身を捨る聲はあれども身を捨つる聲はなし」といふ語もあるに。

涙 迷 中 男 女 先 立 男 後 死 詞 喃 世 間 開 女 先 立 男 後 死

なみだにまよふそのなかにもおとこのいさすがおとこにて。詞なふせけんをきけばをんなさきたちおとこのいとにしに

心 中 重 井 筒

五三

おふさや徳兵衛には身を捨る敷
となりけりの意。此語大和故
事に見えたり。毛吹草には「子
を捨る敷なし」とあり。

うらやす うらやすの詠。

石の鳥居 高津の宮の鳥居に
よ。

南無三寶

そこなひ。見ぐるしきさたにあふむねんのうへのしにはち
ぞや。地まづわれからとわきざしを。ぬかんとすればいた
きつきなふまつてくださんせ。いましぬる身といひながら
大じのおつとがめのまへで。あけにそまつたていを見ばき
もうろたへめもくれて。どふしてかしのなれふぞなからじに
してはちさらし。こなさんのしがいのおびときひもときう
ちかやし。せんぎのあるをじろくともや見てあられふ
か。わしからさきにと手をもちそへわが身にさしあて。し
のびなき。おとこいちからなみだにまよひはものもつ手も
よやくと。をんなのひさにふしまろびおほひ。かさなり
なきるたり。いしのとりのあなたよりをなごのなくこゑ
子のなくこゑ。なむ三ばうわがいへのちやうちん女ばう子

小橋 高津の東、四天王寺の北
にある村名。

ちかのしほがま云々 間は僅半
町に足らぬ程なれども、因果の
隔ては百里を隔つと同じにて、
近き甲斐なくして思ひに身をこ
がすこそあはれなれ意。ちか
の鹽釜は近きかひなきとの顔
を踏むための手段と身をこがす
とつづけんがために出したる
なり。ちかのしほがまは陸前の
鹽釜浦をいふ。松の葉、一、と
り組の歌に「みるめばかりの戀
なしてちかのしほがまをこが
す」
駈落 跡をくらまして、にげか
くれること。ちくてん。
はしり者 出奔者。かけおちに
同じ。
あさまし いまはしに同じ。

ともけらいども。見付られていなさけなしをばせのかたて
しぬまいかと。たちあがらんとせしところへはやみちばた
までたつねきて。間ひわづか半町にたるやたらずもいんぐ
のへだて。百里もおなじごとくにて。ちかきかひなきち
賀のしほがま身をこがすこそあはれなれ。つまのおたつ
よひよりのなみだとしもにそてこほり。ものいふちからも
なき中であれくよあけもちかづくか。からすがいかふな
くいの。詞ほかのかけおちはしりものちがふてあすた
づねふといいのれぬ。しに、出た心中なればとくにいのち
のもふない人。地あさましやかなしや女房子のない人なら
ば。ころすまいしぬまいものどさぞやさいこのくやみこと。
おふさがうらみもおもひやるおもへばわれがあるゆへに。

位牌 おふさと徳兵衛との位牌
をいふにや。

一興 一つの面白ことの意味
れど、二は反語にて、奇怪の
意。

霜風 霜の上をわたる寒き風。

うる／＼涙 おろ／＼涙に同
じ。おろ／＼は泣き泣きといふ聲の
うるむまをいふ語。

れんげを一つれんげにと云々
脚をれんげといへば、それと一
蓮托生の意とをこめたるなり。

生玉 高津の雨一帯の總稱、今
の東原の内。

埋井戸 草木などにおほはるる
井戸。

御法の水 御法は佛法の敬語。
深き意あるにあらず、まきに眼
目を腫出したるより、妙法の水
をたたへけると結びしなり。

二人 殺
人ふたりころすよないはるにむかふていひわけない。めい
土 族 連 立
どのたびをつれだんと下人がさいたるわきざしに。とり
付 所 指 放
つくところをもきはなし。 嗣これはいつきやう此子のいと
しうござらぬかと。 地とゞむれば小市郎かゝさましんでく
ださるなど。 なげくこゑさへ身にしみてのべのしもかせさ
夜 風 丁 雜
よあらし。 てつちの三太もうろ／＼なみだ。 心中といふも
のり。 いかふさむいものじやとてともこそをぞしほりけ
る。 徳兵衛さゝやきて月のかたふくひがしのしらむ。 ため
ろふて今のまに見つけられんあさまし。 いざなにごと
もよひよりいふたとほりぞや。 おふとうなづくばかりにて
なみだに物をいひせつ。 おつとのひさをしつかとをさへ。
あをのきまつたるくちのうちなむめうほうれんげさやう。

南無 妙 蓮 華
なむめう法れんげをひとつれんげにと。 ぐつとつきぬく一
かたなわつとさげびし一こゑの。 あいれはかなささいこな
り。 詞今のいどこじや サアしれた。 地そこかこゝかいやく
みなみに聞へたと。 こたまのひゞきいさもつかず皆 三重い
く玉へと はしりける。 見付られじと徳兵衛はたけの中を
にしひがし。 こゝにかゞみかしこに忍び今いれし一所
にと。 ふさがしがいを尋よる道も心もむもれんど。 ふみは
づしてかつはとおち水のあひれやくみあげて。 かさねるづ
の心中とみのりの。 水をぞたへける。

右之本令吟覽頌句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開板者也

竹本筑後様

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

大坂高麗橋登下目

正本屋

山本九兵衛板

山本九右衛門板

イ本奥書

我等かたり本の通ちがひなく寫させをわんぬ此外口傳とてさのみむつかしき事もなくいたゝ人の心を慰るを秘傳にいたしむしかしふし付は作意と文句のはだゑが大事にては秘事のまつげとやかしく

山本九兵衛板

信禮小舟抄巻

淀鯉出世瀧徳解題

淀鯉出世瀧徳は、江戸屋勝二郎實は大阪北濱の富豪淀屋辰五郎の事蹟を仕組みたるものにして、巢林子の世話物中殊に名高きものにはあらず。されど和歌謡曲を始めとして當時の俚諺俚謡を挿入して宛轉の巧を盡したる所翁が中年の筆力を見るべく、結構また決して平凡にあらず。ただ結尾新七の弟の最後に至りては聊か不自然の嫌なきにあらずして、進行の自然といふに至りては心中物に一籌を輸するものの如し。されど時代の徒らに變化に富みて統一を缺けるが如き類にはあらざるなり。左に此作の實説と、登場年代につきての思考とを掲ぐ。實説は元正間記に見えたり。

一、其實説

淀屋辰五郎が事(元正間記)

萬代不易の長者號名許り残る淀屋橋大阪の北濱岡本三郎右衛門といひしもの、元來材木屋にて大阪御陣の砌り、御忠心に天王寺茶臼山にて夏冬兩度の御陣に小屋を作りて差上、權現様の御威に預り、其時御褒美として八幡にて山林田地三百石被下置、御朱印頂

戴仕り且又帶刀御免の爲八幡侍格に被仰付夫のみならず彼が願ひにて諸國より大阪
堺へ來る干鯛の運上を被下置夫より家富繁昌して自分の屋敷前なる所へ橋を懸て淀
屋橋と名付四十八戸前の伊呂波藏にあらゆる寶を買あつめ長者號を得淀屋は家名本
名は岡本なり其子岡本三郎右衛門老年に及び隱居して古安といへり彼古安が代に奢
り重過して屋敷を百間四方に構へ家作の美麗はたとへて云べき様もなし大書院小書
院は總體金張付金襖勝田興則興信が彩色の四季の花鳥なり庭には泉水立石唐大和の
樹木を植させ夏座敷と名付て四間四方四面に雨椽を付てびいどろの障子を立て天井
も同じびいどろにて張詰め清水をたたへ金魚銀魚を放したる體天下の御涼所にても
是にはいかでか増さるべき右の外敷奇屋の構金銀を延べたる如く奥座敷には欄間に
四季の草花を彫らせ雨椽高欄は朱塗に仕立つ大名高家の籠中方もいかで及ぶべき表
廻りの手代座敷料理の間臺所は廣大なる事言語に絶え夫々の役人を定めて家内は常
に市をなしけり依之西三十三ヶ國の大名衆の御用を承り西國九州の諸大名淀屋金借
用なきは一人もなしといへり金銀の威勢には諸大名よりの附届家老用人の歴々にも
手をつかせ高位大祿の輩とも膝を組んで威を振ふ古安は生附たる花麗の者故に諸大
名へ金銀貸す事を面白く思ひ千兩無心あれば千五百兩も用立もの故にいよ／＼諸大

名へ金銀を貸し始の程は元利懸て返済も無相違年重なるに隨て寐るといふ事時花て
いづれの大名方もはやり煩同前に枕をならべて寐られたり古安は町家に生れながら
一生算盤と秤の目を知らず親の譲り金如何程ありしことにや年中家内くらし方何程
の入用やら一向に知らず賢人とやいはん又やく體なしとやいはん雨天に長き衣裳を
着し泥の中を引ずりて大阪中を経めぐり直に座敷へ上りて泥だらけにする左様の身
持ゆゑに是も手代まかせの身代になりて大名方には寐らるる自然と金銀なくなりて
ほしかり運上といふものばかりゆゑ世間向へは金のないとはしれず誠に淀屋が身上衰
へたるも理なり古安が代に家屋敷を調へ二萬兩三萬兩の仕込いたし自分になりし手
代三十四人ありかやうの事は前代未聞と云べし然れば古安には四人の子ありし所に
三人早世して末子は古安が六十一の年持し男子にて辰五郎と云此辰五郎十歳の時親
の古安は相果たり幼少なれども淀屋が家督被仰付手代ども相はたらき成長の程を相
待うちにいよ／＼金銀へり大名衆へ用金の返済を願へども取上げかつてなく漸々ほ
しか運上ばかりにて家内百七十人暮して居たりとかくする内辰五郎も十七歳になり
ぬ腹のうちより長者にて生れしゆゑ親の古安に替りもなく家内の事は何にてとも知ら
ず物心付しより手代どもがそそらかし辰五郎を新町へ連行我君の御目利次第と名代

の太夫多き中より吾妻を見立、假初の盃が二世の縁深き中とは成りにける。終に翌年元祿十二年、身請の約束二千兩、手代の内に權六が就中の氣に入萬事の用を承り、早速右の身請金なくてはならぬ主人の仰畏て候得ども、はしかばかりにては金不調、幸右衛門無二の中ゆゑ額を合せて、天王寺屋五兵衛に無心申せば、今の内に借りて來るは心易きことなれども、辰五郎が名にては借にくし。小西屋源右衛門を借主にして、辰五郎を請合にいたせば、相違なく瑠明べし。先天王寺屋へ相談すべしと云て、權六は五兵衛方へ行て、小西源右衛門長崎へ遣はす、藥種の代金二千兩、辰五郎方へ無心に罷越し候得共、諸大名へ御用立置候金一向返濟無之、ことに天下への上納金三萬兩、火急に可差上申旨、御城代様より被仰渡、かれこれ手支へ迷惑におよび候。小西屋儀は年久しく懸意の者ゆゑ、是以て見すてがたく存じ候へば、辰五郎を請合に御立被成、源右衛門へ二千兩御貸可被下といふ。五兵衛開て、扱々淀屋にさへ金が手支へ候や。たまゝの御無心仰に任せ申べし。小西とは終に參會不致候へども、辰五郎殿御加判と候はば、難相背候間、證文を御持參被成候へ。金子相渡し可申といふ。權六はしすましたりと悦びて歸り、幸右衛門に右の趣申知せ。此上は小西を借主に頼むばかりなりといふ。幸右衛門いやとよ、小西屋は随分かたい儲な者ゆゑ、早速瑠明たり。源右衛門を借主に頼む儀は、直に旦那の名が出る故頼みても承

引する男でなし。幸かな毎度源右衛門が商賣物受取の手形があれば、手形の据判を盗み、早く瑠明けたが能いと談合して、古手形の判を切抜て證文を相したためけるに、彼小西が切抜きたる判をうつして見ごと、謀判を据ゑて、加判は辰五郎が判を据ゑ、是をもつて天王寺屋へ趣き、一禮を述べて左右なく金二千兩請取り、吾妻が身請隠れなし。淀屋が妾にぞなりにける。其頃大阪にての風聞専らにて、吾妻請出せ山崎與次兵衛、歌に作りて狂言の仕組に淀屋が替名をば山崎與次兵衛と出したり。斯て月日も重りて二千兩の返濟なければ、天王寺屋は淀屋が手代權六を呼寄、小西へ口入の金子約束の月切たり。其方より取立早々皆濟可有と申渡す。畏て候と受合て歸りける。扱借主の事故、小西へも催促の使を立たり。石部金吉と名代を取たる小西屋源右衛門、天王寺屋が使にむかつて、思ひもよらぬ御使にあづかるものかな。大阪十八軒の藥種屋借金いたして、日本國へ商ひ罷りならず、ゆめゆめ覺なき事罷歸て此段を五兵衛殿へ申されよと放れきつたる返答に、使は驚き馳せ歸り右の趣を達しける。五兵衛は驚て、合點の行かざる小西が返答、儘に金子請取る砌、手代まで差越たり。定て仔細のあることと、また權六を呼にやる。權六は外より又借出し、早々天王寺屋の方を瑠明んと大阪中を走り廻る内、天王寺屋より頻に催促、權六が同役、幸右衛門是は大事が出来たりと忽ち透電したり。火急に金も借出し難く同

役幸右衛門が逃たるに氣がおくれ權六も駈落したり、天王寺屋は權六が駈落は合點不行、捨置れぬ出入なりと、小西源右衛門を呼び直談に様子を聞に最初の通りなり、證文に判据たるは如何といへば、千枚證文がありしとも、金に於ては借らぬといふ、然らば是非に及ばず、公儀にせんといふ、小西は御勝手にめされといひ捨てかへりける、是非なき事に成て、町御奉行松野河内守殿へ訴へに及ぶ、それより辰五郎を御奉行所より被召、通り御尋ねの所、辰五郎は前後とも存ぜざる由申上たり、天王寺屋が方にある金の證文御吟味の所に、小西借主、加判辰五郎、兩人判形なり、小西を御尋の所、一向覺無之旨申上る、口入れ御尋の所、淀屋手代權六幸右衛門駈落の由申上ぐるに、必定此兩人の所爲なりと御察しなれども、止る所は辰五郎一人なり、依て當日より辰五郎は牢舎被仰付、權六幸右衛門人形にて御尋の所に、終に行衛不知、天下へ御忠心したる者故、江戸表御披露あつて、何卒辰五郎が身の上無別條様にと町奉行松野河内守殿心を盡されけるに、御城代土岐伊豫守殿如何思召けるにや、淀屋へ被下置たる八幡三百石御朱印を被召上、謀判の筋たるによつて死罪に被仰付べき義といへども、先祖の忠心に依て死罪御免三ヶ津御構にて追放被仰付たり、此騒動半年に及ぶ大阪中の騒ぎにて、辰五郎身に覺なきものなり、皆これ手代の仕たる儀なれば、何卒辰五郎別條無之様にと願はぬ者はなかりける、僅に二千

兩の金ゆゑ追放に及びける、江戸にて水谷同年に同様の義にて潰れける、其頃大阪中にて不思議なる物語あり、辰五郎斯様に可成とてか、吾妻を身請の砌より、毎夜、寶藏の内にて鶏背鳴を仕たり、數十羽の鶏は臺所の内に時を作つて宿らせけるに、嚴敷二重三重に戸を立錠をおろし置に寶藏の内にて背鳴せしこと、後々に思ひ合すれば、淀屋が第一の寶藏の鶏にてぞあらんと沙汰しけり、去程に御法式の事ゆゑ辰五郎繩をかけられ、牢屋より町奉行所へ被召、最前の通仰渡され、直に夫より送り出され御追放と成りける、即日檢使を被下、家屋敷關所家財不殘公儀へ被召上げる、辰五郎屋敷百間四方坪數一萬坪、右の内家作三千八百坪、右之外四間に二十四間の土藏四十八戸、是を淀屋がいろは藏といへり、寶物は筆紙に盡しがたし、第一金の鶏つがひ一羽の目方八貫五百目といふ、ひよこ十二羽、一羽五百目より八百目迄、枝珊瑚珠枝の長さ三尺六寸二本、徽宗皇帝の筆應の繪ならびに兆殿司筆十六羅漢懸物東坡が筆竹の繪、顏熙筆三皇五帝懸物、雪舟筆四季の富士十二幅組十二月、雪村の琴棋書畫屏風、定家の色紙五枚、道風筆富士の詩、紀貫之の色紙三枚、紫式部の假名手本、其外古筆古法眼、永徳永眞探幽等懸物、屏風利休遠州などの筆數多々筆に記されず、且つ又左文字正宗義弘の刀脇差十二腰、粟田口義光則光則長宗親國光國俊等の高金の道具百六十七腰、天國神息對根七筋、五六の錠

五懸、堆朱の膳五十人前、おなじく盆百枚、南京皿千枚、伽羅にて打ちたる琴一面、瑪瑙の碁盤、水晶の白石、瑠璃の黒石、八疊敷の蚊帳、渡り物なり、楠正成の鎧一領、太閤の唐冠、後三條院の御震筆、色紙、古安頂戴虎の皮二十五枚、八間幅の猩々緋二枚、二十間幅の毛氈二十五枚、右之外茶入、茶碗、家具の類は限りなし、關所の砌り箱に封印せらるる。是迄召仕ひの腰元はした三十四人、下働きの男八十七人、手代伴頭二十四人、大阪の内に田地二千石、尼ヶ崎堺に下屋敷四ヶ所、千石以上の船十八艘、一々に御改め公儀へ被召上げる。前代未聞の事どもなり。辰五郎十八歳にて、手代どもの所爲たることは公儀にて御存にて、長者號を得て大阪の傍になりし淀屋を相潰されし事、後々沙汰をせしは、其時の御城代土岐伊豫守殿相潰され關所の寶物多くは伊豫守殿の所得になされたるといふ。依て殊の外評判あしく大阪中にて落首を立る内に、

土岐くは餘所へも行きやれ貧乏神永々伊豫とは祈らぬものを

去程に辰五郎は三ヶ津追放にて大阪を追出さるる砌、古老の手代六兵衛といふ者、吾妻を供して漸く金子千兩もちて辰五郎が跡をしたひゆく。辰五郎は大阪より南都へ立越縁所ある者を頼み、借屋いたし主従五人渡世もなく三四ヶ年くらしける。大阪堺の内に我家より出て、身上を持二三萬兩の差くりして居る者三十四人あり、彼等を頼んで無盡

をいたしなば、百兩づつの無盡をしても三四千兩の金は出来べき事なれども、根元手代どもの事故に、今更無念に思ひ、一家一門へ無心申さず、漸千兩の金ばかりにて空しく奈良に月日を送りける。寶永六年に女房を南都にさし留め、辰五郎御朱印地を頂戴仕らんと小者一人召つれ江戸へ下り、御構ひあるゆゑ町宿に居られず、米津出羽守殿一萬千石とらるる大名屋敷は虎の御門にて、辰五郎縁類の事ゆゑ、御頼み申長屋を借て爰かしこと縁を求めて、公儀へ便らんとする内、中川内膳正殿留守居瀧川左平太といふあり、出合の節辰五郎申けるは、先祖三郎右衛門より出入致したるもの、貴殿の御取持にて内膳正殿へ御歎き頼入候と、餘儀なく申けるに、最と右左平太が取持、内膳正殿承知あつて不便の事なり。汝取持何ヶ年も辰五郎を見ついでくれんと申され、夫より七年が間、此辰五郎は米津殿に居て、中川殿より扶持を送られ、不自由なく月日を送りける。其砌、此書^〇の撰者^〇此辰五郎に數度^〇參會^〇して心安く咄しを承り候所に、辰五郎申けるは、扱々忝は中川殿の御志にて候。先祖より御出入申たるばかりにて、中川殿には、豊後の岡を取られ、七萬四千石と申せども二十萬石どりの大名にも増る程の御内所にて、代々御内福にて出入の町人へ拜借被申付候外の大名の如く借金有之大名にては無之候。凡西國九州の大名がたへ某御用立ざるはなく候。中川殿に限り御用に立べき様無之御出入ばかりの私へ御懇

意の御手當忝次第に候。大阪追放の砌り六兵衛と申年寄手代が相働き追放被仰付ても是こそ大切の物なれと申て、古安が代に御用立たる金銀の證文を壹箱某に預け申候。江戸表へ罷下り申候に付、若も用に立申儀も候やと持參致候得共、扱々世界に情なきは大名衆にて候。是程多き證文のうちに御使にても被下たるは御一人も無之候。是御覽候得と申て、箱の中より一包の證文を取出して見せたり。大概披見候内に黒田右衛門督殿家老連判にて金高拾八萬兩一口に御用立たり。細川越中守殿へ一口に拾五萬兩用立たる證文あり。其外西國四國九州の大名に用立たる證文いかほどの金高なるべし。黒田細川二軒にて三十三萬兩といふ金寐ていたり。

去程に辰五郎中川殿の御蔭にて上野源光院へ便り、日光御門跡様の御耳に達し、上野より御老中方へ御頼被仰遣ける。然れども斯様の願は天下の御法事大赦の砌ならでは御免無之儀故、辰五郎七ヶ年江戸に居たり。大望の身なれば随分身を慎み穩便に罷在るべき旨御内意故、夏はさいみ帷子高宮島の袴、冬は絹小袖に蛇形の袴、竹の皮草履にて江戸を勤めけり。然共本望は、正徳五年未四月十七日東照宮百年御忌日日本一統大赦の砌時の御老中井上河内守殿より御奉書をもつて辰五郎を被召寄願之通山州八幡に於て古來の田地山林三百石被下置御朱印河内守殿直に辰五郎へ被相渡、その上にて吸物出て

目出度との仰にて辰五郎へ御盃を下されける。凡日本國の町人へ御老中方如此懸命の儀不可有、これ偏に日光御門主様御蔭、且又中川殿御深切ゆゑなり。夫より辰五郎元祖の名にて岡本三郎右衛門と改め八幡に住居いたし、八幡侍と成りて何の御奉公も不仕三百石作りどりに仕り、昔とは黑白の相違といへども、是よりは萬代不易の身上になりける。しかれば三郎右衛門女房吾妻が腹に娘一人設け、其ほかに子なし。家繼これなきゆゑ、京都御城代與力安藤久左衛門が次男文七郎を養子にいたし、娘を妻合家を譲り、享保年中に辰五郎も吾妻も相果けり……(下略)

附記 元正間記の世に行はるるもの數本ありて異同あり。今二三本を對照して、そのうちよしと思はるるものによれり。各本異同あれども年月等には違ふことなし。

二、登場年代につきて

巢林子、海音出雲、宗輔、半二等が作の登場の時日を知るべきものは、僅かに一樂子の著せる浮瑠璃外題年鑑の一書あるのみ。此書は信賴するを得と雖も、まゝ首肯し難き所あり。此淀鯉の登場を元祿十三年四月八日としたるが如きも、其一にして實説に合はず。

此作の下之卷、勝二郎の詞の中に

此なつこ、(奈良)のしばぬへ、竹本が弟子がくだつて重いつゝをかたつた。

と見えたり。これ明かに此作の登場は寶永元年に興行したる心中重井筒より後なることを示すものなり。番に右の詞のみならず、此作には重井筒の巨燧の段の作り込みもあり、重井筒より出でたりと認むべき語句も所々に見ゆ。

又、同じく下之卷の勝二郎の詞の中に

なんにもとくはなけれ共、坂田藤十郎が夕きりをま一ど見たひと思ふたが、此かみ子で手夕きりを仕る。太夫又あひにきたわいの……

と見えたり。これ坂田藤十郎が存生中の作なることを證するものなり。しかして坂田藤十郎は寶永六年十一月一日に歿したり。

故に此作は寶永元年より後にして同六年十一月よりは以前に登場したるものと見るを得べし。

右の外、内面より更に委しく登場の時日を立證するを得べきことあり。すなはち下之卷の結尾に

五畿内五ヶ國神々に先願ほどきに悦びのへいはくをわけかぐらをわけ、参り治る

八つた山此なにいつのゑはう神たみあんぜんこそめでたけれ

とあり。これ此作の登場の年に、八幡が大阪の恵方に當りたることを示すものにはあらざるか。八幡は大阪の東北方即ち凡そ寅の方にあり。東北方にありて恵方に當るは寅卯の間に限り、寅卯の間に恵方のあるは甲及己(きのえ)の年に限る。外題年鑑に掲げたる元祿十三年は庚辰にして、恵方は申酉の方即ち西南の方にあり。然るに辰五郎が追放せられし元祿十二年より巢林子の歿したる享保九年迄の間に甲又は己の年は、次の六回あり。曰く元祿十二年の己卯、寶永元年の甲申、寶永六年の己丑、正徳四年の甲午、享保四年の己亥、同九年の甲辰、これなり。假りに結尾の文を以て其登場の年の恵方が八幡に當れりと定めんか、此作の登場は以上六ヶ年の中ならざるべからず。

さて此間に竹本座一連が、夏、奈良に下りたることありや。外題年鑑によれば、元祿十三年の夏、寶永五年の夏、正徳元年の夏の三回あり。しかして又、此作下之卷、手代新七の詞に

親だんなの十七年忌はないせうておまへから遊ばすと申なし。おそらくゑどやのついでんとわらはぬ程のほうじを致……

とあり。親旦那即ち古安は元祿四年に歿したれば、其十七年忌は實に此寶永五年に當れ

るなり。

以上述べたる所によりて考ふるに、此作の登場は寶永五年の冬または六年のことにはあらざるか。五年の冬とすれば大阪の恵方の八幡に當るは其翌六年のことなれど、翌年の暦は今年の十一月より世に弘まるものなれば、間もなく來べき翌六年の恵方を述べたるものなるべし。又、外題年鑑竹本座寶永五年の部を見るに、此年はただ四月十六日を初日とせる酒呑童子(前)心中萬年草(切)の一興行あるのみにして、當夏奈良伊勢へ行、秋より冬、備中宮内藝州宮島へ行くと見えたり。比年四五の興行をなせる竹本座としては極めて淋しき年なり。これに反して、翌六年には正月、三月、四月、九月と四回の興行ありて相應に賑し。此上より見れば、むしろ五年の冬、中國筋より歸阪早々其年の打止に興行したりと見るをよしとせん。されど、前に掲げたる實説によれば、辰五郎が願のため江戸に下りたる寶永六年に、其地の名家淀屋が奈良より江戸に下れりと聞きて其前途を祝へる際物とも考へらるるなり。外題の出世瀧徳の四字は實に其間の消息を傳ふるものにはあらざるか。寶永年間、辰五郎の事蹟を綴りたるものには此淀鯉の外に、棠大門屋敷(錦文流著、寶永二年刊)風流曲三味線(八文字屋自笑作、寶永七年刊)等あり。棠大門屋敷は辰五郎の追放を以て終り、曲三味線は辰五郎の歸宅の悦び、吾妻の嫁入を以て結ぶ。前者は此淀

鯉の作と深き關係なきに似たれど、後者の曲三味線には、其趣向此淀鯉より出でたりと思はるる所多し。

なほ又、此淀鯉の初もめんの中に

是はかの五尺いよ此手のごひと歌にうたひし手のごひか、是のまたかやすげがさしめをあらくとめしませとよげにも誠の心ざしさまがみやげのすげがさとをどりにおどりしかさよなふ、あれはあづまの花よめご……

と見えたる二つの唄は糸竹初心集、紙蔭大幣(いかりのまはりおほなま)の古きには固より、元祿十六年の松の葉、寶永三年の若緑等にも見えずして、寶永七年の松の落葉に、前者は同書、五はやり歌の部に「五尺手拭」として、後者は同書、四、踊歌百番の中に「管笠踊」として見えたり。しかして此二つの唄は其聲調、歌詞を大幣、松の葉等のはやり唄、踊歌に比するに、儘に後年のものたることは、少しく斯道に通ずるもの首肯し得る所ならんと信ず。これ又淀鯉出世瀧徳が寶永五六年頃の作たることを證する一助たるべきか。

本篇は良好なる正本を得るに苦しみしが、幸にして平出鏗二郎氏の所藏に係る山本九兵衛板の十行本を思借するを得たり。本文はすべて此十行本のまゝなり。

砂場 新町の西口の南にある町の名。

九軒 阿波座 狐軍町 ともに新町の麻の通りの名。

九軒阿波座ののら烏 攝陽落穂集に「あわざがらすが新町に行てくれもたずにかをく」といへる事人口に残れり」と見えたり。此頃古くよりのものにて菓林子の筆に入りしもの。また新百人一首へ紀海音作、元禄十五年豊竹座興行に「廊四筋を毎夜ささめく。とくくけんくわをいざいにぞする。夜の目のまの目もあはざの鳥」と見えたり。

族に馴れたるものを旅鳥といふの類にて、阿波座に馴れたる者の意なり。柳亭筆記「難波にて新町をぞめく者をあわざ鳥といふとぞ」。狐軍町を腰付に云々。嬉遊笑覽に「狐軍の根付、見聞集に、山椒と胡椒と問答の條「公家武家の面々たる御賞言あればこそ、よき狐などに入り、夜夜御腰をはなれず、御自愛淺からず」了意が浮世物語、二「ある者腰につけたる百なり狐軍より朝倉の山椒を取出し」(中略)東福子に、「攝南今宮村は往古は御厨子所へ日々供御の料の魚調進の所なり。扱當時より元禄寛永の頃迄は、闇の夜といへる齋屋を出せり。頭藏尾にして帯笥分らざる故、闇の夜と號す。人に益あるものとして帯佩して珍説す。珊瑚の結じめに對して寶籠せらる」と見ゆ。狐を帶ること古くよりはやりて繪譜書に見えたること多し」と見えたり。大阪の南今宮村より産したる狐軍のくびれめの前後大小なきものを後先がわからぬといふ意にて闇の夜と名づけたるより、月夜は猶か闇の夜も狐軍町を腰付にとつづけたるなり。いけんふる手の云々 阿波座鳥につづけたる所なれば威權振る手を古手にいひかけたるものかと思はるれど、嬉遊笑覽に見ゆるが如く狐軍を腰付にすること古くよりのことにて、當時はすでに古風なる人にあらずれば佩はざりしより意見古手の印籠とつづけたるにや。たきがら 伽羅のたきがら。●吸ひがら 煙草の吸ひがら。

こひも。所のきにつれてよろづ手びろき大くるわ。色になげうつ金銀の。つちかすなばの西口や思ひほころぶそて口を。くけんあひざの、らがらす月夜いなをかやみの夜も。へうたん町をこしづけにいけんふる手のるんろうの。そこなたきがらすいがらのけふりにゆるんたな引て。かすみがせきか東口こぞうきよのだての大木戸。あけぬは銀のとがしのせき。

明けぬは銀の宮燈の關 新町橋筋の東口は伽羅煙草の煙と油煙とにて、霞が關ともこれこそ呼ばば呼ばるべきものにて、實に浮世の伊達の

大木戸なり。此大木戸は千客萬來と明けて待てど、明けぬものは銀といふ宮燈の關なりといひて安宅にもちりつけたるなり。夫れつら／＼：驚かすべき夜半もなし 謡曲、安宅の「夫れつら／＼惟ん見れば、大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし」のもちり。

小傳 禿の名なるべし。三番太鼓 限の太鼓ともいふ。これを相圖に大門をしむるを法とす。攝陽落穂集に「廊中の大門を一切事寛永の末迄は亥の上刻を以て限りの太鼓打たりしに夜まじ日まじに繁榮につき自然と深更に移り、何となく亥の下刻子の上刻と延引せり」と見ゆ。八ッは今の午前二時にて丑の刻なり。寛永の頃は丑の刻迄延引せしにや。

支子餅(あのみち) 支猪(けんちよ)ともいふ。十月の亥の日に食ふ餅。支猪のこと延喜式、源氏物語等にも見ゆ。古くより行はるることなり。此月此日に

夫れつら／＼おもん見れば。大じんきやく衆の秋の月。小判のくもにひかり。小傳よびましや長へんじ。おどろかすべき夜いもなし。三ばんたいこつてんてん。天下の夜なか八ッ過。くるわの戀のひる中やかごやろばかりぞねこるなり。

ころしも初冬のこのもちあづきをりのべんがら嶋。はをりのうへに手ぬぐいおびづきんはな迄かほかくし。女郎かふべきふうにもあらずさながらようなきていにもあらず。どちらへどふ共かたづけてしあんにおちぬふうぞく。新町橋のはしのうへはし辨慶がなきなたの。さやひろふたるこくとくにてうろ／＼として立たりしが。ちよこくと立よつ

餅を食へば萬病を治すといふ。又一説には家は毎年十二子を生か間年には十三子を生むものなれば、婦人其子の多きを羨みて、此日に餅を供へて神に祈るなりといふ。

小豆織のべんがら島 べんがら島は萬金産粟袋に幅三尺九寸。地色すい竹。かば色等。島もやう。千すぢ。棒すじ。たがの羽。とかけ島など有。但たつ島ばかりの物なり。と見ゆ。和漢三才圖會「榜葛刺綿、按榜葛刺天竺國名出於此二綿。緯木綿。經絲似苧而脆。多縷柳條(タツシマ)也」小豆織のべんがら島は萬金産粟袋に「赤藍の小格子をあつき島といふ。」と見えれば、赤と藍との糸にて織りたる立島のことなるべし。

九軒 九軒町を略してかく呼ぶ。搦屋のある所。井筒屋は搦屋の名。八幡 山城國綾喜郡の地名。石清水八幡宮のある所。

替名 遊里にて本名を呼ばず、替名を用ゐること當時のなりはしなり。多く姓が名の一字をよみかへて替名としたり。半七をなひば(長町女腹切)平岡左近をひら(夕霧阿波鳴渡)と呼ぶの類これなり。されど江戸屋勝二郎を鯉と呼びたるは八幡の近くを流るる淀川より産する鯉を鯉とて名高ければそれを用ゐたるなり。かたむくろ 頑固。偏風。風流曲三味線「昨日は田舎侍の片鯉なる人にも、氣に入相頃より夜更くる迄無理酒に痛み」せいとうす 禁戒することをいふ。此語八文字屋物などに多く見ゆ。町所 町年寄の事務所、町會所のこと。茨木屋 置屋即ちくつわの屋號。長持 太夫、天神、引舟の大小の長持をいふ。委しくは索引によりて紋目の長持を見よ。

て。調是かこの衆そつじながら物とひませふ。こよひ九けんのいづつやの。客はどこの衆のなんとした人まだこゝにあらんでかどふでござると尋ねける。ア、さればいづつやのお客の。かくれもない八八の住人よとやの勝二郎殿。かへ名の鯉さま十萬兩つかふても。こちとが百錢をといたとも思ひぬ程のしんだいなれ共。新七とやらいふ手代かたむくろにせいたうし。一もん衆町所迄たのんで。くらぐにふうを付一ぶのかねもつかいせなんだげなを。惣兵衛といふ相手代わかいだんなのきをつめせき。わづらひせてならぬと新七を追出し。きまゝにぐんぐんとつかわせる。こいがいけすをとんで出て日比なじみのいはらきやの。あづまをとんと請出し。あすのすくに入れたへ。こよひくる

わのなごりやといづつやで大ぶるまひ。なんじやのしらずいづつやのののからかどまでながもちとをられぬ。こんやの物いりざつとつもつて二百兩。扱もかねのかたいきもある所にある物か。わしらひよるひるあがいても三百いもふけかねるに。よふのんだとて一ぶ取。よふ笑ふたとて二ぶ取。兩はだぬいでこそぐらはなのあなへこそせう入て。くしやめしても一かく。地いかなこいでもふなでも一くらあかふとかたりける。新七扱のとうらめしく。はらの立にも主思ひ。その聞及ふだぶげんしやすんどわか人じやげな。きやうさんな酒のみときいたが。こよひも酒であらふの。ア、くならびもないのみぬけ。親茂庵といふたも命を酒にかへられた。こい殿の母ごぜももとこゝに

物入 費用。

かたいき 片行にて普通ならざ

るをいふ。

あがく 馬の前足にて地を掻く

こと。轉じて、人の手足を勞し

て熱心に働かないふ。

一角 金一步をいふ。*

分限者 富める人。

鯉殿の母ごせもとこに...

衆大門屋敷には大橋の腹より生

れたりとしるせり。風流曲三味

線には「さすか揚巻といへる名

代太夫職の腹より出られし程あ

りて」と見ゆ。

蛇 大酒をのみ者。底わけ上戸。

物種集(延寶六年西鶴撰)「雲に

うつりて消る蛇の息。大酒の座

にはたまらずふく嵐。」蛇之助

ともいへり。柳亭筆田中常短

獨吟(延寶五年二月)巻頭の句。

蛇之助がうらみの鐘や花の暮。」

(中略)蛇之助は今いふ底わけ上

戸のことなり。」鹽道通鑑「蛇

之助と聞えし男も内損の業せん

さくに春の若水を吞得ず。」

能の脇師 能の舞曲の中の主と

なる役をする者(仕手)の相手と

なる者。單に、脇ともいふ。

手活にする 手づから花を活け

ること。轉じて、己れ一人の見

ものにするをいふ。

三才叟 能の最初に翁の面をか

ぶりて行ふ舞。

高砂 狸々 とともに能の名。

いたち畑 新町の北にあり。目

もきよろくは能に縁あり。

夜見世展 新町の夜見世を見に行きてしるもの。ぞめきがへり。*

これ狂ひ 遊女狂に同じ。よれば妓女をいふ。此語の來由につきては、遊仙窟に「晴」宿とあるより夜寐の義なりとし、羽州坂田によれと

いふよき遊女ありしに起るともいひ以上二説異本洞房語園)又は、米を菩薩といふより菩薩の如く美しとの意なりなど附説あれど皆信に難

し。一説には、ただよき女のことなりといふ。 ●みいりがよい わりがよいといふに同じ。よれを米に通はせて買入がよいといひし

なり。 ●時分柄 時節柄に同じ。時分柄云々とあるにて、當時心中の多かりしを知るべし。 ●鶴の橋 七夕の夜素牛と織女と天

の河に會する時、鶴が其翼をもつて渡すといふ橋。夫婦相逢ふ橋の意、曾根崎心中の道行に「梅田の橋を鶴の橋と架りて云々」とあり、

引舟 重井筒に委し。*(附函第

三を見よ。)

まじくら まじこり(率)の轉に

て、「ひきつれ」の意かと思はる

れど、他の用例を見るに皆「ま

じりに」の意に用ゐたり。曾根

崎心中「壺口仲間二三人座頭ま

つとめた人。地どちらへ似てもじやのしそん。それでもよ

い衆のしるしにのばんじにたつした。きよう人。のふのわ

きしを手にけにして九けんて主のざしきのふ。じやうじゆ

酒であしひよろつき三はそうも高さこも。みなしやうぐ

のみだれかと思ひますとぞ笑ひける。女房おはんも手わけ

をして。見はづまいのめもきよろくいたちぼりへんさま

よひきて。おつとを小かけへせきばらひまねきよすれば新

七かつてん。そつとよればみ、をよせ。詞なふ今迄西口に

つけていました。爰へはまだ見へぬかとき、やけば、ム、

よいく様子しれたぞ。まだいづ、屋にゐらる、げな。

地程の有まいぬかりやんな人が見ればふしんが立とひとつ

所に立もせず橋をこへたりわたりたり。忍びたゞすむめを

とのすがた夜見せもどりが氣を付て。詞ヤアこつてりとあぢ

なこと。地よねぐるひよりあの方のみいりがよかるふとい

ふも有。じぶんがら心中のしたちか又義太夫が口のはに。

新町橋をかさぎの。はしとかたりて行人も、たへて其

夜もふけにけり。

なふあれを見や中からちやうちん引舟まじくら。かぶろが

うたふて客をくるそりや是に極つた。そなたはかごに取つ

きやこつちへまかせをかしやんせと。大門きのに待かくれ

じくらどつと来り」蒙大門屋敷
「たいこまじくら主従六人」
禿 將來遊女となるべき者に
て、遊女に事へて見習する者。
禿がうたひて客を送ること此頃
のならばし。他には見えず。
(附圖第一を見よ)

やりて 遊女禿等の癖をする
者。此稱呼の來由、異本洞房語
圖に「鑓手。古來名を花車といふ。
のつなれば香車と呼ばずして、やりてといひふれたり。」と見えたり。くわしやの稱呼につきては辯遊笑覽に「やりてとは後の名にて、も
とくわしやといへり。(中略)火車とはつかむといふ意。つむかは昔のはやり詞、女郎を買ふをつかむといへり。心易く我儘にする意なり。
つかめなどいふは、とらへてこよと云が如し。やりても女郎の掟するものにて、つかむといふ意あれば、名づけしなるべし。金銀をつかむ
にはよらじ。火車は聞苦しきゆゑ花車とて風流の名としたり。さるを花車とは花にまはる心なりといふは、かの散茶をふらぬといふ語とせ
しと同日の談なり。偶その意の通ひしなり。」と見ゆ。(附圖第三を見よ)

羅生門 やりてが自分の名を網とよぶにより渡邊網に思ひよせて大門を羅生門といひしなり。 ●大じん 傾城買の上客をいふ。多く
大蒸の字をあつ。 ●雜喉場 魚類場の義。今の大阪西區、江戸堀下通、京町堀上通、京町堀通の各五丁目西端、百間堀河畔一帶の
地をいふ。延寶年間より魚市の立つところ。鯉、雜喉場、鱈、皆縁あり。 ●南無三枝扇 南無三寶を三枝扇にいひつけたるなり。三枝
扇は駕籠一挺に昇夫三人つくものなをいふ。四人つけば四枝扇といふ。

手ぐすね引く 用意して待ち構
ふるをいふ。くすね(藥煉)は松
脂に油を交ぜて煮たるものに
て、弓の弦などにひくものをい
ふ。手ぐすね引くは弦にくすね

ば。 調遊やりてのつな綱じや。 羅生門明あけてたもといふ。 地い
ばらきやの大じん。 鯉にはあらでさこばの人。 すゞきさま
明日かこの衆たのむが合つてんと。 北へはしれば新七夫ふう
ふ。 なむ三まいかた見をくりて口を。 あいてぞあきれたり。

それ／＼そこへ又ちやうあん。 こんどのよもやはまるまい
とくゞりくゞるを手ぐすね引。 女房しかとひつとらへ見れ

な引くことにて、敵を待つ意な
るべし。
みつちやづら あはたづら、じ
やんづら。

佐渡島傳八 道化方の名手。三
國役者舞臺鏡(元禄十二年刊)に
「天然とあがりたる道外、元來顔
付やみらみつちやとし、目耳鼻
のつけ所ちがうたやうな。我身
ながらもわるいと思はるゝや
ら、又しても一番がけに顔の事
を罵らる。此人よい人の側を
去らず、何やらなまざる、事上
手じや。さるによつて寸暇なく
してあそこの愛のと、引張太鼓
のうはしりなり。それゆゑ御内
殿あたた後頭にくらさるゝ事そ
のかくれなし。先齋藤いやく、
何をいはるとおもへば食ひ物の事ばかりを大事そふに申さるる云々」 ●しらける 興がさめる。

女(多くは若き) ●神ぞ
用ゐたる自稱代名詞。 ●太夫
も亂舞仕舞を習ひ、一年に二三度づつ、四條河原に芝居を構へ、能太夫、舞太夫、皆いせいども勤めし也。尤大人歴々の御方御見物あり、
種々の餘情花麗なる事ども多かりし也。去によりて今日の太夫は誰が家の何といふ太夫が勤るなどいひしより、おのづから、よき遊女ども
の總名となりけるよし。(附圖第三を見よ)

天神 太夫の次に位する遊女をいふ。異本洞房語圖「天神。勤銀二十五匁なれば北野の終日に取て天神といふ。吉原には此名なし。」御前義
經記「天神は太夫より少し劣れり。釋名は三尺(私ニイフ三十匁ノコトナリ)といふ。和名に梅といふ。唐韻に天職。俗語に中位とも、宗と

ば色眞のま眞つ眞くろ眞に。 よ横こ眞ぶ眞とつ眞たるみ眞つち眞やづら。 道頓眞は
りのさ佐渡と島傳八はつとしらけて立眞のけば。 傳八もきもつ眞ぶ
し是の君何したまふ。 人たがへとい眞ぞんずれ共色に袖を
ひかれて神ぞ忝眞ふおもほゆるホ眞く眞く。 し眞つも眞むか眞し眞の
戀をみがき年中くるわに入眞ひたり。 太夫天神に引眞つり眞ひ眞つ
はられ。 それで顔がひきつ眞つたす眞いくわ眞の様なかほなれど
色眞のくろ眞ざ眞ね。 地眞ずん眞ど眞ふう眞みの眞よい眞男。 しんぞ眞一眞され眞ふ
るま眞ひ眞たい眞ホ眞く眞く。 笑眞ひ眞て南へ歸りけり

も、むらとも、格子ともいふ。古語に二尺五寸といへり。是天神の縁目をたどれり。いつの頃より直しがかりして三尺になり給ひぬ。勤
銀の二十五匁なりしは京都の六條に遊里のありし時にて寛永年間のことなり。寛永の當時は大夫の勤銀五十三匁なり。(附圖第二を見よ)
色は黒ざれ 西瓜は實の黒きもの味よしといふに基く傳八が口合なり。 ●南へ云々 遊領堀は東口より南にあたり。

食悦 うまき物を食ひて悦ぶこと。傾城色三味線、鄙之巻「同じくは咄い物喰はせて置て。ともかくもして呉れいば。先食悦だけの徳なりと。世に連れてさもしき心になりて」
八十末社 末社は精間をいふ。客の大靈を大神に通はせて本社とし、精間を小祠にたとへて、末社といふなり。當時の祭文などに「外は四十末社、内宮は八十末社」など見ゆ。ここには多くの精間の意に用ひたり。
本道 内科に同じ。専ら身體の内側の病を治するをいふ。かさとる 威を振りまはす。はば 威勢。はぶり。肌を合せる 親しくする。羽交につく あとにつく。羽交は鳥の左右の翅を打交へたる所をいふ。筒落 落ちこぼれないふ。嬉遊

しばらく有ていづやののふがすんだと出入の者。兵法つかひざとうちやのゆ者古道具や。大酒食悦お影をかうふり八十末社。さすがのくるわかこされてせきだかたしの酔つぶれ。はるかのおとよりのさくときやつ手代の惣兵衛め。同道のねい人ぐみのふのししやうのとみがめ。京のらうにんぐん四郎。いしやのすれ共ほんどうまもらぬめぐすしななど。中にも惣兵衛かさとつて。なんとな何れもだんなのはゞを御らうじたか。あれみな我らがさする事。とかく此惣兵へとはだを合せ。はがいに付てまへらつしやれ。地一このしんだいかたためてやらふ。はてだんなのしんしや

笑覽「古今夷曲集神祇部に、千早振かみにつかへてあらよれのこぼれを拾ふつたをわざな」つたとは筒落か。今米さしといひて竹にて作り俵にさしこみて米を出す筒あり。それより落こぼれたるをつつお米といふ。永代蔵に、水場のをりふしこぼれたれたる筒落米をばき集るものを筒落米といふとあり。もとは筒より落たるなれど、後には唯落こぼれたるをいへりと聞ゆ。」
くろめる 巧に欺く。いひまぎらはず。
いきずり わるがしこきやつ。いきは人を罵るとき、いき畜生めといふ類のいきにて、接頭語。すりは物を掠め取る者。
ひつむ 曲げる。轉じて、束縛するをいふ。
まくし出す 捲り出すの訛。
うろたへる うろつくの意に用ひたり。にも用例多し。卯月の潤色にも「くじみやしてもおのれらにがやくと口をさかせふ」とあり。

うで一年に。千兩二千兩のつをでも有ことだんなを名代に立てばとふくろめふともじゆうなこと。かの新七のいきづりめおためがほでだんなをひつめ。家久しい我らをおしのけ。ひとりいせいをふるふとしをつたを。且那へふきこみまくし出してのけたが。きけば大坂にうろたへて。此惣兵衛とくじのみやのとぬかすげな。地あひれでんとへ出やれかし五幾内をせいて見しよ。今の間にこきさげて心からのひにんかたき。うち。どこぞでそこらの橋のした新七のゐやらぬかと。口あいわる口せんじやうはりどつと笑ふて通りける。

●公事の宮の 公事と圖と同音に、圖は宮より出ればといひたるにて、八文字唐物の類に用ひたり。 ●せく さへきりとどむ。 ●こき 腕に同じ。 ●非人仇討 歌舞伎芝居の外題、福井彌五左衛門の作にて、院

木與次兵衛の活劇。 ●口合 詞の縁をはなれず、同音異義、いひかけなどを用ひて面白くいひなすこと。梅草(正保四年刊)に例あり、ある人焼木にぞんと大なる木を置けるに、隣の人斧をもち来て割とるを見て告めければ、彼もこたへてわがよきに人のわる木があらばこそ、人の割木はわがわる木なりといひけり。歌のとりなしはおかしけれど、むさくなり。云々。露の門松にも「露のうらひ梅干はばがすいこなやつとおぼしめそ、おぼつかつやといひければ、チ、いや。口合をせらるゝ」と見ゆ。ここの「くじいみやの」が口合なり。 ●酒上はる 身の分に過ぎたることをいひはる。

せわやく 骨折る。盡力する。

あつさ あつしさの略。苦しき。

新七どふもこたへられず。むねをさすりしつめて見ても。
りちぎ一へんにまつすぐに一すぢなわかい者。すへの事も
おもひれずきつてくれふととんで出る女房だき付。
な人。めをとの者がせわやくの勝二郎さまへ御いけん
申すためでないか。あいつひとりきつたとてお主の爲に
何がなる。新七がいひわけなく身のあつさにきつたと皆手
まへのふみかぶり。地むねんをこらへておためになりおや
且那様の御おんを。送心ないかいの其様にたんきでい。
わしや心もとないとはぢしめとむれば新七。調それも皆が

悪性がれ 放蕩。索引によりて悪性を見よ。
曲事に逢ふ 控にあふ。野せらる。
精力 骨折。盡力。
すずしい 正しい。潔白な。
のしあがる つけあがる。
火に入る事 命を失ふ事。
揚屋 置屋より遊女を呼びて遊ぶところ。
上する女子 揚屋の座敷の世話をする女。仲居をいふ。浮世草子、八文字屋物などにも此語見えたり。好色一代男「さる揚屋に、いつよりはやく御出あつて待給ふこそ嬉しく、上する女に心をあはせて小座敷に入て語りぬ。」
浮世小路 新町通ひの駕籠の立場。傾城色三味線、大阪之巻、我大丈夫なる身代となりて太夫を自由にまはし、大盛と稱美せられ、浮世小路の駕籠に乗らずば、

つてんりがひになるといしつたれ共。今のあつかふ聞ぬか。
地あいつが此まへおや且那のあく性がねを。十四くはんめ
よこ取してくせことにあふはづを。とやかくおれがせいり
きてきたなしにことすんだ。其時に命のおやと手をあ
せておがんだ。それから十年たゝぬまにすこしも爲になり
そふな。ふるい手代をそね見出し。をそらくすゞしい此し
ん七にないなんつけてひま出させ。だんなのしんだいから
にして今の様なさうごん。のしあがつたつら見れば。火に
入ことも思ひれぬと涙をなかず道理なる。時にあげやの
上するおなご下おとこ。門はんおこいて少門を頼みます。
是のこつちの大事のおきやく。うきよしやうじまでおか
へりじや。きつうるふてござんす故。ことわりいふてうち

云々。日本新永代藏「抑此浮世小路といふ所は、南は高麗橋筋北は今橋筋の真中に細き小路ありて、爰ぞ手代の隠し宿又は間屋蓮葉女の身まゝになりて、相應より奇麗に住居する譯はといふに、奉公人の出合宿なり。」今も妾宅などの多き所なり。名の由来は浪花江南筆記に「寛文貞享の比は東堀より口堀の間、兩側に揚屋風呂屋あれば、其隣は餅屋質屋次は三味線法師詰曲指南の者もあり、或は米屋油屋と軒を争ひ家々建築ひて、實に浮世の有様眼前に見はたすの故を以て浮世小路と唱へたる由なり。」と見えたり。
断いふて云々。當時駕籠は大門口を限りにて揚屋に着くことを許さず、揚屋より乗り出すことも許さざりしなり。
氣を通す。氣をさかせる。
橋詰。東口の前にある新町橋の狼藉。みだりがはしきこと。亂

御駕籠 召
からおかごにめさせます。地氣をとをしてくだんせといふ
よりはやくもんばん。みな迄いふながつてんじやと。くゞ
りひらいてめをねぶるも日ごろのかねのいかうぞかし。ふ
うふすのやとはしづめて。かごのあとさきしつかととら
へおかご待ッてくだされと引とむればかごの者。調ヤアこり
やらうぜきして。いきづゑのむね打くらふかと。地ふりあ
ぐる。らうぜきいたさぬぞだんなのおためにいたすこと。
ぶたばぶてた、かばた、けたんなへ一こん申さぬうち。
かごをやらぬいやはなせ。いややらぬとねぢあふいきほい。
かごを打あけていびきながらの勝二郎。はしいたをころ
くく、かへおちんとする所を。おはんちやつと引おこ
しうしろをかへてひさのうへ。おと、いからのよいさめ

息杖。駕籠昇または天秤棒にて物を擔ふ者の、暫し荷を支へて肩を休め、息をつぐ杖。
奈なんきん云々。奈ん、神、けて酒には酔はぬの意。ないを南京に鉢を八幡にいひつけたるなり。八幡は弓矢八幡の略。醫の時にいふ語。
末白雲……は何とやらん身の果。謡曲兼平の文句。
望月。信濃の名。此處より昔は朝廷へ馬を納めたり。衆仲の生ひ立ちたる國なればその縁にて望月の駒といひしなり。
いやはあ。能の驥子の掛聲。

ず女郎の小袖を打かけながら。調したもまへらぬゆめはんぶん。太夫こゝまでをくつてか。エ、かたじゆけなんきんのはちまん酒にのるぬ。今のなかねひらの能ので。きそ殿がどろたへふみこまれた所ッ、末(不知)白雲。うすこほり。ふかたに馬をかけおとし。ひけ共あがらずうて共ゆかぬもち月の。こまのあたまも見へばこそこの何とならん身のはて。いやはあ。調なんと地おもしろいことかとひよろくしやうだいなかりけり。申且那樣これのどふしたお身もちぞ。おまへのおかけでるようするこんやの人もおほせい有に。おかごにひとり付者ない。是がゑどやの勝二郎様のおぎやうぎといひれまい。わたしがおとこの新七においとまを下され。地お出入さへとめられたれど。心じつおた

かい 妨。障。

熊手 っきこむこと。愁の深きをいふ。川例、八字屋物などに多し。
しじやくじつ 陽春。いたつき。

めに成者の。お家で新七ばかり。御しんしやうのかいをなす惣兵衛めと新七と。思ひかへて下さんすのおなじみ共思われぬ。其上わすれいなされまい。まへかた私御ほうこういたした内。おねまへこいのおそばにねよのと人頼み迄あそばした。地わたしのひとつも年かさなりわかいお主をそのかす。くまでよよくよといひるゝも口をし。く様およびなさるゝ時のもじやくじやもいかゞと。おいとまをこいしましたれば。心ざしをかんだ。さりとおなじにきとく者あの新七といふ者の。親茂庵ふびんをかけ我子のごとくせられて。あに同ぜんの新七とふうふにして。一生見すてぬおやくそく。地其新七をおひ出し。かたき様になさるゝ其時から私を。にくさにふうふにあそばした

併てあたり枯子であたる 當時の跡なるべし。強くあたり弱くあたることかと思はるれど、この用の方にては初めにはやさしく見せて末にはつらくあたることをいふもの如し。
酒の酔本性忘れず 毛吹草に「酒にふひ本性を忘れず」と見えたり。但言集覽「ナマエヒ本性タガハズとも云今ナマエヒを昔は酒に酔といひしなり」後訓栞「ふひて本性なたがへ」といふ証は文集、龍眼示本體、人酔顯本心といへり」

町年寄 町内の公用雑事を掌る者。町毎に一人あり。大阪には官選と民選とあり。

かにくまるゝおぼへなければ共。お心にしたがひぬうらみをきねであたりしやくしであたるおしかたか。但し今にお心のこりりんきゆへのにくしみか。夫なればなをきたない氣。何がわるふて新七が御いけん御意にいらぬぞ。たのもしうないお主様やと涙を。こぼさぬ斗なり。げに酒のふいほんしやうわすれずおはんをつきのけ。いんゑんばなしをきをろふ。新七めがいけん聞たふない。おれがおやちのな。一年に八千兩九千兩づゝ。三十年つかひれたれ共ついにうき名いたゝなんだ。こちがしんだいで五百兩や千兩つかふたらなんじや。ナアリよくわいながら。夫を新七めが。つかひつぶすの身持がわるいのと。一門一家町年寄庄屋までふれあるいて。くらゝにふうを付させてあはう者

揚屋の屑 揚屋へ時折々に金品
を興ふる事。つけとどけ。
一分 そのものたるべき分際。
そのものの義務。また名譽。か
ほの意にも用ゐる。

もが 色道大鑑「しがりと云
は非道を元としていひ分をこし
らへ理を得るたくみなどする者

にしてくれた。忝いことのなんじやそちに心かのこつてり
んきじゃあ。おけよ。尤はじめのほれていた。けれ共今新
七めがたべよこして。うら迄かやしてくさいさがいた物を此
はう所望にござらぬ。ア、りよぐのいなながら。新七めがくち
故にあげやのとゞけもぶさたに成。わかいものの一ぶんを
すてふとした此うらみつぎせぬ。かんだうのうへのかん
だうじゃ。地サアかごやれとのらんとするを新七とび出すが
り付。おなさないだんな殿。何とてさやうによこしまに
おき、なさるゝぞ。新七が御一ぶんをすてたというらめし
い。すてまひための御いけんかねのここの申さぬ。千兩が
万兩でもかねほどづゝのお身につくおなぐさみが有にこ
そ。惣兵衛めがはからひにて。もがり共をたいこにつけ。

なかくいふなり」俚言集覽「武
藏國府産の邊四辻の所を四モガ
リと云モガリはマカリ也曲者を
モカリ者と云」嬉遊笑覽「西鶴
などが草子に虎落者といへるこ
とあり。これは甲陽軍鑑などに
も有る詞にて云云。虎落は假字
なり。」雜字類編「歌師」
たいこ たいこ持の時。暫間。
太鼓持を見よ。
名物の道具 黄金の鶴。
京三界 三界に界限に同じ。名
詞と然合して用ゐらる。江戸三
界。廓三界。茗屋三界。惣食屋
三界。執許三界。旅三界の類。
分限 金持。
藤田小平次 立役の名人。棠大
門屋敷「六方は嵐寛母は藤田小
平次と。此二役はいづれのやく
しやが動るも。是をちばんにす
といへり。異なる哉。小平次。

十兩の物入を百兩に付立。九十兩のわけ取にしてたわけに
して笑ひまするが。こなたの御存ござらぬか。詞あづま殿
の身請のかねも。私お家に有じぶん七百兩と申金惣兵衛に
わたした。其上に此度めいぶつのお家のだうぐ。京三がい
しちにおき。二千兩余の御借金が出来たげな。地だんなに
の借金させ手代の惣兵衛やしきをもとめ。お出入のいしや
らう人田地かふたり銀かして。ぶげんになるが。御存じな
いか。御念比のいしやのあれどよしあしをかぐはながきか
ぬはなかけいしやが。いれのこしのめくすりでもおめがあ
かぬかなさけなや。此新七めがおやの大和のびんばう人。
詞幼少の時藤田
ら養子やらに參つて。おんながたを致たをおやだんなのお

一生顔を紅粉にぬらず。涙にならず。不断撫付つらに上下の羽織はつぎ。年中姿をうへず。實事をして見物にいやといはれず。おもへば、上手也。

●新七が勝二郎の父に引取られたること、衆大門屋敷巻二に新七を藤田勤負、勝二郎の父を與茂、九郎の名の下に詳に載せたり。

算用算勘 計算勘定に同じ。

五臟六腑 はらわた。五臟は肝、心、脾、肺、腎。六腑は胃、膽、膀胱、大腸、小腸、三焦。

顔振る 顔をそむけること。

戒名 法名に同じ。佛門に入りたるものに、其宗門より授くる名。在俗のうちにも與ふ。

相性 人の生れたる年の干支の五行(木火土金水)を其人の生れつきとし、木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生じ、(相生)、木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅ちとし(相尅)、相生、相尅の關係によりて、男女の間、主従、朋友などの間柄の吉凶を定むるを相性を見るとき。相生を吉とし、相尅を凶とす。水と火との相性は相尅にて凶なり。

曲がない * 曲がないこと

推参いふ さしてがましきこと

ないふ 無禮なることないふ。

親じや人 正しくは親ぢや人にて、親である人。

門詰も踏まされず 敷居も踏がせられず。くぐりもくぐらせられずの類。近寄ることを許されぬないふ。

六尺 下男に同じ。醒醉笑、京にて乗物をかき、あるひは庭にてはたらく男を、六尺とはなど

かけで。お家へ参り手代なみになされしが。地さすがそだちがはづかしいさんようさんかんぞんせねば。何をほうこ御恩をおくろふやうのない。りちぎをわがみの奉公にしてお爲にならふと存る一ねん。五ぞう六ッふにしみこんでお主を大事に存じます。茂菴様の御りんじう勝が事を頼むぞおきづかひなされなと地請合た。かにもなく。かやうにお身をもちくつさせ。ほとけへ云わけなんとせふ。おはか所へ参つてもかほふりてかためうをろくにおかみもいたされず。涙にしづみいまするわいのそれさへあるに此ぼんから。おまへのいひ付か惣兵衛めか私が。わかだんなのかんだうの者おだんなのはかへ参らすなと。お寺へきつといひ付さいた花も取すてたむけの水迄うちあけて。みらい

にましますだんなにさへうとませふといふ事か。おためをおもふ新七がさほどお氣にいらぬ。水と火とのあいしやうかあまりといへばきよくがない。そうでないわかだんなと主のいけんのうらみなき。ことばすこしすいさんいふ涙。主のくすりぞや。勝二郎大酒のうへなをく氣にやさのりけん。詞ヤアいけんいふも所が有。とちうにかこより引ずりおろし。はちか、せていけんせよとおやじや人のゆいごんか。地サア此りよくいひのいひわけが有かきこふといからる。是申勝二郎様ひそかに御いけん申さふも。かどつめもふまされず取つき申ものなし。よしおやしきへ伺公して六尺共が手にかゝり。ぶちころされふばころされふ。主じうのめうがわすれまいと。朔日廿八日に御門に禮

いふらんか、ろくしやくと呼ぶこと諸説あれど多くは附合なり。按ずるに、力者の轉訛なるべし。

内証 勝手向。奥。裏。目をかける よくいたはる。小者 小用にめしつかふ者。しもべ。

しなだれる もたれかかる。

凡夫心 悟らぬ心。

魂魂云々 魂魂に冥土から獄殺さるる法もあれなど用例多し。當時書に用ゐたる語なり。

して罷歸り。さもなきときにも月の中に二度三どだい所の口まで参り。つてさへあらばないしやうから申上んと存ずれ共。さりとの人のつれない者にしへのはうばいも見ぬかほし。目をかけて引まゝしたてつち小者めしたきまで。ことばをかけるやつらもなく。なじみとてかわひや。しろいぬが見しつておをふつてしなだれる。いぬにおとつたちく生共うらむまいとの存ずれ共。ぼんぶしんのあさましさむねんでならぬ女房共。エ、くちをしひ新七殿。たゞしわれわれひが事ならば。おやだんなのこんはくめいとからけころいて下されかしと。ふうふのはしにひれふしてこゑを斗になげきしひふびんなりける心なり。ゑいさめの氣のぼるぐつとせいて勝次郎。おやちまでもないこと身がけこ

笑止 きのどく。天逆様 眞逆様に同じ。平治物語「池殿の御事は故殿の渡らせ給ふと思ひ来れば、如何なるあま逆さまの仰せなりとも逆ふまじとそ存ずれども」

ろひて見せんずと。とびか、つてひつふせ。とうばねをさんくふみつくる。女ばう是のおなさけなしと取付ば。其ま、をけ。手むかひすなおはらのいるほどふませませ。ヲ、ふまひでをこふか重ねてかやうなりよくいをせば。下々にぶちころさする用心せよ。地かこもてこひとうちのるもはら立まされわけもなく。うしろむくやらまへむくやら立にのるやらよこぼりを。いそげくとはしらせしわかげのほどぞせうしなる。新七のはがみをなしエ、くちをしひむねな。あまさかさまの事にて主にもふまれてうらみひなひ。はうばひのいひなしゆへふまれたと思へば。腹わたがもえかへると。はしいたた、きらんかんもにぎりひしく斗にてなみだにまなこもくらみしが。よいかつてんじ

しやまだるい 邪覚たるいの誤
にはあらで、しやは意を強めた
る感動詞なるべし。

●女夫いさかひ大くはぬ
番太 番太郎の略。夜番、尤の
草子、座敷を廻るは盃、町を廻
るは番太郎、門々を廻るは鉢開
き」
寝は俗脱に夢を喚ふ歎なりといふ
より番太が夢喚ふ博勢町とつづ
けたるなり。
石清水云々 當時行はれたる。
婚禮の時の水祝をきかせたるな

やしあんあると。かけ出るを女ばうすがつて。しあんとい
どふぞひの。たんきを出さずとまたしやんせと引とむれば
しやまだるい。さいぜんに惣兵衛めきりぞこなふたも女ば
うゆへ。たんきもたんりよもいる事かしあん、此むねにあ
る。サア其しあんが聞たい。いや是斗ひまににして。はなせ
くしあん聞ねばはなさぬ。くらのするがはなさぬかと。
男思ひの女ばうと主思ひの男と。まことあまりてつかみあ
ひめをといさかひいぬくぬ。いぬのりんきにおとされて。
辻のばん太がゆめくらふばくろ町をぞ三重へ歸りけるうけ出
すといふ。其日よりいしやうをもみな町ふうに。ぬいはり
のいばらきやよりよめいりとして。むこは八わたのいししみ
づあびませんとあつやの。ていしゆいおくるはうばいの

り。水祝とは始めて妻を迎へた
る人に水を浴せて祝としたるこ
と。
あびせま。せんはせうの古
き形なれど、當時遊里詞に用ゐ
たるが如し。用例、八文字屋物
の類に多し。
持せやり手云々 遣るを遣手
に、遣手の名のすぎを杉重にい
ひつけたり。杉重は杉のへぎ板
につくける重箱。

太夫天神はなむけを。持せやり手のすぎちうにたるのめい
酒をもりくちや。さたのに賣を見ることもくるわでならぬ
たのしめのに。もみちたけくなべがちや屋ひらかたくす
は是も又。あづまうけたすやまさき見ゆるそつこでのり物
立にけり。

守口 京都と大阪との間に通ずる京街道の驛の名。(今の河内國、北河内郡守口町) ●佐太の煮賣 佐太は守口の東北にあり。名高き佐
太天神のある所。河内名所例會に、「此所京街道にして、茶店食家あり。」と見えたり。佐太の煮賣とは、此茶店又は料理店のことなるべし。
たのしめの 香妻が嫁入の途に駕籠の中より佐太の煮賣を見ることが麻ではならぬ樂を點野にいひつけしなり。點野は佐太の東北にありて
京街道に接する村なり。また、たのしめには、誰の占野の意もこもれり。占野とは、わが物と定めて他人の入ることを禁じたる野をいふ。
鍋が茶屋 牧方のかんなへ山の茶屋をいへる。西鶴の一目玉鉢に茶屋ありと記す。 ●牧方 京街道の驛の名。(今の河内國北河内郡
牧方町)昔は牧場にて生啖は此處より出でしなり。 ●楠葉 京街道に接する村の名。牧方の東北にあり。
香妻請け出す云々 「香妻請け出せ山崎與次兵衛請け出せ、山崎與次兵衛そつこで請け出せ三百兩」といへる寛文年間の流行唄によりて
帯けるなり。此唄は攝津の川邊郡山本村坂上與次右衛門といふ者宮土屋あづまになづみたる時の流行唄なり。(與次兵衛は與次右衛門の尊名)
あづま請け出せ山崎と唄ひし山崎の見ゆる其處で駕籠立てて休みしとの意。山崎は淀川を隔てて八幡の北西にあり。

太郎 井筒屋太郎左衛門。

あづまのり物のすたれをあげ。詞太郎さま。もはや八わたも
ちかひげな。地かねてこいさま道までむかひに出やんすは

八幡 *

わつさりとは、わつさりとしてにて、陽氣の意。

皮切 灸のすえはじめの一つな

いふ。轉じて事の始にある苦。

うきしほ云々 憂き機會に倦み

たりの意を、效驗はあれどわけ

て熱き所の癰突に於けて、膿ん

だは身の灸とつづけたるなり。

お山けんじ お山見じにて、お

山が見えたの意。

石火矢 昔の大砲の稱。

威陽宮

いとしばや 我等しきしきは、ほど又ははかりの意をもつ接尾語。

づ。そこをこちからせん先こしてによつとを押しかけていどふ
 ごさんしよ。 詞八まん太夫さま是の西ずんとしやれませう。
 地そんならとんとすげ管かきで供やらしゆやら主ごちやくの
 おもしろかる面く白とびをりて。ア、氣がはれたわつさりとう嫁
 れしやそばで山見たも。つとめのか皮きりこらへたゆへ。う至
 きしほ原本ノイんだい身のやいと十四のふゆより此ことしまで。そ
 れにし染みたるふうぞく風いかな家にもはしり出で。お山け
 んじとめをつけるかみから下るうを魚にの戻もどり。あるき
 歩の高歩はなし。 詞さてくうきよ浮いしれぬ物。江戸や勝
 二郎といふて火石びやでもくつれまひ。長じやのいへ家とい
 ふたれ共。かん威よう陽きうもほろび時。地一時とさの間時にいとし
 ばやあれもい金のばかねゆへ。なまなかもたぬわれらしき我ね

煮える にかへるに同じ。湯
 の煮えかへるが如き大混雜をい
 ふ。
 なんのいの なんのと同じ。
 の、ともに感歎詞なり。
 やすふ 安歩。

法界格氣 已れに關係もなきに
 起す格氣。法界は佛敎の語にて、
 平等無差別、誰彼の別なきない
 ふ。

ざめがらくじやといふあと後から。 詞とが何なんじやしれぬ
 が勝二郎道のついはうで。八わた編に煮るお己りや見てきた。
 百兩や五十兩何あれでも取てのこふか。なんのいの編あみ笠が
 ささへ着せぬもの。 地うけ出されたあ吾つまとやらのとふな
 る事ぞあつたらもの。 やすふでこつちへ買もらひたい。なん
 のか彼のとのわる惡ひさた口口ちいふてとをりけり。 あ吾つまふ
 つとみ耳、にたち太郎様さま今の何いどふぞひの。 いやな沙さたで
 御さん氣すときづかひがれば供とも駕の下女か者このものまで色いろ
 ちがへ。 へん辨とうも富ちも持く首ひさげちう下の重とにつまりしあん
 もちのあん餅にさう案いのかほ相つきなり。 あ井つ、やも筒氣にか、
 れど。氣落おちさせじとこれ種くす無いのやうにも詞なひ。 詞あれ
 人のほう法かいり界んき格太夫氣さまを見しつて。 き叙づかい遣かけ

ぎん 縁起の隠語。
狭間。いさこ。

ひよんな事 思ひがけの事。と
んだ事。此語狂言記に多く見ゆ。

ておもしろがるそねみで皆いふ事。ぎんを直にさけに
せふもうせんしけといさんでみても。どこやらさまが明
だるのそのころのすまざりけり。あれくあそこへな
きくはしつてくる人。勝二郎さまのをさうりとり佐五
介でないかひのと。いふところへ佐五すけいきもきれ
くなふ太夫さま。調ひよんなことができました地わたく
しやなんといたしませふとなひてことばもなかりけり。さ
てこそうわさにながひひなひちやつとやうすをはなしてた
も。ないていてすむことかきつとしやうねをつきやいのと。
しかられて涙をとめ。調ことのおこりの皆惣兵衛め。だん
なをいとしいくとぬかいたのおのれがよく。おかねに
御一門のふうがついてじゆうにならず。地けつかうな茶入

掛地 掛物に同じ。

袖判 鎌倉、室町時代に、公文
書に裁可の證として、文書の袖
即ち文書の右に捺したる判。
(花押)

よみ人しらず 和歌にその作者
の知れざるをかくいふ。金を數
ふることもよむといふよりよ
み人知らずとつづけたるにて公
卿に縁あり。

大内方 朝廷方。
あひずり 同類。(多くは悪事に
關す)

粟田口 京都の刑場のありし
所。
獄門 梟首をいふ。古、重罪の
者の首を斬り、獄舎の門外に梟
したるよりいふ。
しやうと 先途の轉訛かとい
ふ。

かけじお家のたからこがねのにとり迄。京でしちに
とて。調なんとやら申くらいたかにおくげさまの姫君を。
勝二郎がよめによぶその物入とのいひ立。其くげさまのお
袖ばんをにせばんし。地かねの取手のよみ人しらず大内が
たより御せんさく。とが人の惣兵衛一みのあひずり。十
人あまり。あいた口にてごくもんにかゝるはづ。手代のわ
ざといひひながら名さす所の勝二郎。存ぜぬといひひわけ
た、ず金銀財寶山田畠きやう大さか方々の家やしき迄取あ
げられ。さのまゝでの御ついほうとをしやうとにござろ
ふぞ。はらのうちから今日迄あらいかせにもあたらぬお身。
さぞやとはうがあるまいと思へばいとしう存じますと。か
たれば一とに手を打てあきれ。はてたる其中に。あつまひ

つうくつ 明ならず。和訓菜
に「つうくつ 通風の音なるべ
し」とのみありて解なし。此所
の用方にては、往來などの意か
と思はる。

むげない 無下にて、あんま
りな又は情ないなどいふに同
じ。

人^物の思^物のおもひ。とかくわたし^私がぶしあ^{無仕}いせと余^合のこと^事。
い^言はずなき^泣るたり。あつ^{井筒}やもた^溜めいき^息つき。詞^笑おせう^止し共^止
きの^結どく共^毒いふ^言た斗^為でせう^為やう^様なし。太夫^縁さま^先いまつ^先お歸^先
りな^取されませ。殘金^取二百兩^取の八^取わた^取のむ^取まお^取りに^取請^取とる^取は
づ。惣兵衛^取とつう^取くつ^取いた^取しい^取ばら^取き^取や^取を^取ば^取私^取請^取合^取。手^取が^取
た^取のう^取へ^取で^取今日^取お^取供^取仕^取り。か^取や^取う^取の^取御^取な^取ん^取き^取出^取來^取の^取所^取う^取か
く^取と^取八^取た^取へ^取參^取つ^取ても。地^取二百兩^取の^取金子^取た^取れ^取か^取ら^取請^取と^取り
申^取さん^取や^取ら。お^取せ^取う^取し^取な^取が^取ら^取太^取夫^取さ^取ま^取を^取い^取ば^取ら^取き^取や^取へ^取わ^取た
し^取ませ^取ね^取ば。我^取ら^取が^取手^取が^取た^取き^取へ^取ませ^取ず^取せ^取け^取ん^取に^取ば^取つ^取と^取し^取ら
ぬ^取内^取。は^取や^取ふ^取お^取か^取へ^取り^取な^取さ^取る^取れ^取ば^取わ^取た^取く^取し^取が^取た^取め^取と^取申^取。太
夫^取さ^取ま^取も^取お^取し^取ゆ^取び^取よ^取し^取サ^取ア^取お^取歸^取り^取とい^取ひ^取け^取れば。あ^取づ^取ま^取わ
つ^取と^取な^取き^取出^取し^取か^取ほ^取を^取も^取あ^取げ^取ず^取る^取たり^取しが。む^取げ^取な^取い^取い^取ひ^取ぶ

傾城 遊女の總名。傾城はもと
美人をいへり。前漢書の「北方
有佳人。絕世而獨立。一顧傾人
城。再顧傾人國。」より出づ。
くつわ 遊里の置屋。または、
置屋の主人をいふ。稱呼の由來
明ならず。人倫訓蒙圖彙「久
津輪。傾城屋の亭主をくつわ
といふは出所いまだ不考ある
人のいふは駒を乗入るをばまづ
くつわをばますを最初とす。此
のり馬をしたつる第一なり。此
ごとくあまたの女子をかくへお
きそれんくにしたるはけいせ
いやのわざなりされば東西もし
らぬ女子おやの手をばなれ此う
さふしのわざは牧おろしの駒の
ことなるによりいふとかや。
異本洞房語圖「或時御町奉行島
田彈正様。甚右衛門へ御尋には、

ん^取して^取下^取さん^取す^取か^取へ^取れ^取な^取ら^取か^取へ^取れ^取です^取む。詞^取か^取へ^取れば^取あ^取づ
ま^取が^取し^取ゆ^取び^取が^取よ^取いと^取い^取そ^取ふ^取した^取あ^取づ^取ま^取じ^取や^取な^取い^取わ^取いな。か^取
い^取ひ^取男^取の^取る^取ら^取う^取した^取の^取を^取聞^取な^取が^取ら。身^取の^取し^取ゆ^取び^取を^取お^取も^取ふ
よ^取う^取な^取け^取い^取せ^取い^取じ^取や^取と^取思^取ふ^取て^取く^取だ^取ん^取す^取い。地^取き^取よ^取く^取が^取な^取い
な^取さ^取け^取な^取い^取く^取つ^取わ^取の^取わ^取け^取が^取た^取ぬ^取と^取て。二^取た^取び^取く^取る^取わ^取へ^取立
か^取へ^取り^取身^取の^取は^取ち^取の^取扱^取置^取て。勝^取二^取郎^取さ^取ま^取の^取ち^取じ^取よ^取く^取の^取こ^取れ^取が
何^取と^取す^取が^取れ^取ふ。こ^取な^取さん^取の^取う^取け^取あ^取ひ^取わ^取た^取し^取が^取命^取有^取か^取き
り。み^取ち^取ん^取も^取な^取ん^取き^取の^取か^取け^取ま^取す^取ま^取い。し^取ん^取町^取ば^取か^取り^取が^取け^取い
せい^取町^取でも^取あ^取ら^取ば^取こそ。京^取の^取島^取原^取な^取ら^取ふ^取し^取見^取茶^取や^取ふ^取ろ^取や^取へ
も^取身^取を^取う^取つ^取て。見^取こ^取と^取に^取わ^取け^取いた^取て^取ませ^取ふ。よ^取に^取お^取ち^取や^取う
が^取ど^取ふ^取せ^取ふ^取が^取勝^取二^取郎^取さ^取ま^取の^取女^取ば^取う^取に。成^取程^取の^取あ^取づ^取ま^取じ^取や^取じ
め^取ん^取ず^取く^取に^取頼^取む^取か^取ら^取い。し^取つ^取く^取も^取こ^取れ^取に^取い^取つ^取り^取な^取い^取ふ^取た

總て遊女どもの事を譽といふは、如何なる子細ぞと御たつれありし、甚右衛門申上るやう傾城屋を譽と申事は、京の六條の三筋町より申出候言葉に御座

候、原三郎左衛門と申者、大阪太閤様の御時、御座付の奉公仕りし者にて候處、病身に罷成候間、涙人いたし、後に六條の遊女町を取立申候へども、彼三郎左衛門儀は、太閤様御出馬の節は、度々御馬の轡を取候者にて候、依之其御此子細を被存候人々は、三郎左衛門異名を譽と申候、然る間其頃京伏見などの若き侍衆中は、傾城町へゆかんといふ聲ことばに、譽がもとへゆかふと被申しより、いつともなく傾城屋の總名の株になり候由承り候と申上る、又一説には伏見榎木町の町わり十字形にて譽の形なりしよりくつわ町といひしに起るといひ、嬉遊笑覧には金銀を贈るを譽をばむるといふにとりたる名なりといへり、くつわに亡八の字をあつるは、遊里にては仁徳禮智忠信孝悌の八徳を亡ふりのことなりといふ。(附圖第三を見よ) ●奈良の遊女町は木辻、伏見は榎木町。 ●茶屋 * 風呂屋 湯女風呂をいふ。好色一代女に「一夜を銀六匁にて呼子鳥是傳受女なり、覺束なくてたづねけるに風呂屋物を獲といふなるべし。此女の心ざし風俗諸國ともに大々たる事なし。身持は手の物にて日毎に洗ひ云云」と風呂屋女の身持を委しく述べたり。大阪には願風呂願風呂など何風呂と呼ぶものあり、こゝに勤むる女を、風呂屋物、湯女、娘、呂州など呼べり。寶永頃風呂女は浴客の垢を掻くこともせず戀の中宿にのみ行きしもの多きが如し。(附圖第十五) ●じめんづく 自面盡にて今いふかほづくの意。 ●しづくも すこしも。 大々神樂 三養雜記「太々神樂」といふこといつのほどよりか始りけん。都鄙ないはずおしなべて太々神といふことさかんに行はるれど、もと太々神樂は既にいへる代神樂(代待代參ノ類ニテ神樂ヲ奏スベキ人ニ代リテ奏スル意)と同じころばえにて、かの陣中の人に代りて神樂を奏するからに代神樂なるべき

び新町のつとめをのがれ。勝二郎さまの一ぶん立てくださんせ。是手を合て頼みまする。

ほんに〜此よな〜ことふりわかふとのゆめにもしらす。いせ兩ぐうへ大々かぐら。あたご清水住吉さまへかなどうろう。八わた様へまんどろ其ほか神々宮々へ。とりあたて、のなんのとてかねの入こといとらずに。神佛へのやくそく

な、なほひとときはなみならず執行ふよしにて、重ねて太々とたたえていへる稱なれど、かつてわがらぬことなり。人間どしの云々 人間を相手の遠き契約はあてにならぬものと、神佛はわれを騙の様に思はれんの意。

たてる 金をたてるは金を返すないふ。曾根崎心中にも「此上はもうむすめはやらぬ。やらぬからは銀をたて。四月七日迄にきつと立て。」と見ゆ。されはなる 利慾の念を去りて義を通す。 ぢやう 必定に同じ。

も。今でいちがへる身となりはて。人間どしの遠けいやくのかたりのやうにも思ひんしよ。それがかなしうござんすとなげきわびたる。くどきことしんじつ。見へてあわれなり。あげやもさすがたゞ者ならずよい〜二とんと御意なされな。ぎりづめになつてきたいばらきやの手まへ此太郎が請取つた。手が一枚なされいでも今のなみだを手がたにして。おまへをこゝで手はなします。お身をどこぞへかたづけて二百兩おたてなされませ。けいやくおちがへなされても此はうからの尋ませぬ。もちろんさいそく仕らぬ是からだがひのしんていづく。これはなれたる詞の末それのちやうか有がたい。むねがちつとひらけたとふしおがみてぞなきいたる。時にむかふのつ、みのうへ大ぜい

公文所 訴訟を裁判する役所。
鎌倉幕府にはじまる。八幡は神
領なれど此名は存せざりしなる
べし。

若子 貴人の小童に對する美
稱。

橋本 八幡の西南にある驛の
名。
三國境の板橋 雅州府志「三國
は。在二洞ヶ崎麓西南。是則山城
河内攝津之境界也」洞ヶ崎は八
幡の南、山城河内兩國の境にあ
り。

俊寛僧都 法性寺の執行なり。
平清盛の専横をにくみ、藤原成
親、平康頼等とこれを滅さんこ
とを謀り、あらはれて共に硫黄
が島に流さる。治承元年中宮御
産の祈のため大赦ありて、成親
と康頼とは赦されて歸京せし
が、俊寛一人島に殘されて、翌
二年、三十七にして此島に歿す。

命が寶 命は寶の寶ともいふ。
袖を 乞食。物質。

たんなふ 十分の満足。

出入 金錢の出入、勘定の意。

埒明く *

けくて 結局にて、つまりに

後の榮。

人のわめくをと。ついほう人のさほうとて八わたくもん所
の役人あまた。手々にわり竹大地をたき。勝二郎をさき
にたて兩手をひつはり。ころをかけて追はらふい。い
ま。しくも三重すさまじしうきことしらぬわこさまのきを
うばいれしやうねをとられ。おきつころんず足たす橋本
のしゆくはづれ。三國さかひのいたばしにこそつきにけれ。
あらけなきころくにてサア此所よりおつはなす。京大坂
淀伏見堺をそへて住居かならず。詞そむくにをひて見あ
ひしだいにうちずて。何かたへもうせをれと地口々のし
り歸りし。いわうが島にすてられししゆんくんそうづ
もかくやらん。ゆききの人もめをあいてなかつに通る人も
なし。役人かへればかけ付て是わしじやあづまじや。ふり

よななんぎができました去ながら大事な。命が寶袖こひ
ひにんの身と成ても。ふたり一所に居る上いたんなふでい
有まひか。くつわへの出入もこなお人の男氣ゆへ。御く
ろうかけずに埒明はつ様子いしつかに物語。かなしむこと
もなんにもないけくどうきよがおもしろいと。笑ふて見せ
てちからを付なみだをかくせばかほをあげ。聞くいしひ様
子のきかね共。太夫が殘銀埒明といるづ、や殿のしんせつ。
なまなか礼の申さぬ。エ、めんぼくない此勝二郎の。下人の
ばちがあたつた。地大けんじんの新七が。いけんを用ひず
かんだうし。身のあたと成惣兵衛めにはかさね新町ばして
新七を足にかけてふんだるばち。たちまちあたつて此仕合。
身のさきゆきのすることい今生で思ひ切たぞ。先のことい

少分 すこしばかり。

冥加も知らず 冥加の程も知らずなり。冥加は神佛の冥々の中に垂れたまふ加護。手ぶり 空手。

服部煙草 攝陽群談「服部相思草 島上都服部村ノ田圃ニ作り 莖細ク葉厚ク色トラフノ如クニテ斑ナリ香遠ク蒸シ香味相共ニカウバシクシテ不飽好テ求之」
ささる 西班牙語。管の義。うは始め安南の西北、老撾國より舶來せる黒斑竹を用ひたるよりの名。

薬屋は云々 當時は薬屋菓子屋音曲者の類まで順によりては何様何目などと受領証を許されしなり。
花色縞子 薄き藍色の縞子。
仲居 *
延 延紙の略。
抱帯 腰帶。しこき。明暦寛文の未迄は抱帯稀なり。後に結ぶは延寶天和貞享の初までなり。貞享三四年より前に結ぶ。延寶天和、貞享中は紫はやり元祿の頃は水色流行す。當時京阪地方にては結びめを長く垂れたり(近世女風俗考)なほ附圖第九を見よ。
五尺いよ此手拭云々の唄、松の落葉、五に「五尺いよこの手拭五尺手拭ながそめておれにいよこのくりよよりやどにおけ」
嬉遊笑覽「紅梅千句」をどりに出さぬうら盆の宿。花ぞめの五尺の布や惜むらん。これ又手巾にて踊りに用るなり。不角が江戸總鹿子序に「すこぶる汗道具

しらね共まつり此よのいとまごひと思ふてそんのかぬこと。何れもさらばと立出るいづや袖を引とめていつかたへお出なさるゝにも當ぶんの御入用。路銀の余り少分ながら御くわい中とさし出す。手を付ちよつといたゞいて心ざしの千萬兩。金子の申うけまひ親おほちのたくのへを。めうがもしらすつかひすてかねのばちが當つて。金銀にうとまれ手ぶりに成たる我なれば。此たびきつと身をこらし一錢得難せんゑがたしといふことを。我たましひに思ひしらせひんくのしゆぎやうのけいこの爲。金銀とてはもらふまじ去ながら。詞はつとりたばこたばこ入させるのよけい有ならば。一本所望申したし。地ア、おやすいことくさせるのらうのほそく共。お心をふとをして心中などあそばすな。詞いやる

かくといふそくなふてしぬるこそ。本の誠の心中なれ。かねにつまつて心中する勝二郎でないせうこ。くすりもせうくもらひたい。地げに是の御尤くいの中至寶の一包。薬や命かたい石見の椽といひければ。やりてのすぎが太夫さまへ花色じゆすのまへぎんちやく。人参入ておはなむけ中るのはついのべ二折。ちよつとかりねも有物とあちな所へきをつくる。かこの衆の中まから。三尺手のごひかへおびとてしん上す。詞是のかの五尺いよ此手のごひと歌にうたひし手のごひか。地是のまたかゞすげがさしめをあらくとめしませとよ。げにも誠の心ざしさまがみやげのすげがさと。をどりにおどりしかさよなふ。

水車月の影さへ云々 慶長元和の頃より行はれたる「淀の興想右衛門が水車、誰か待つやらくくる」といふ唄をきかせてあるものの如し。

木枯の森 駿河國にあり。後撰集「こがらしの森の下草風はやみ人のなげきは生ひそめにけり。」

蒼原雀 よしきりないふ。かしましく鳴く小鳥。

孤川 淀の水垂の南にて淀川に落つる川。

それは若草……あきもあかれもせぬのは、さきにあげたる淀川所作の文句。

寶寺 山崎にある補陀落山寶積寺をいふ。

地ひろきせかいのひろけれど。京やなにのすまひさへ。

せきとめられし水ぐるま月のかげさへくるくと。かなた

こなたにくみわけられて。たんばちもどればや

まどゆくももどるも。ふたりづれめをとがらすの。とぼ

くと。きのふのねやのはなもみちけさふるしもにくちそ

めて。身をこがらしのもりのしたみち。うきしほむもあ

ぢきなきなれし。こきやうのくさも木も。今のなごりをと

ぢめかね。まてくとなくよしはらすぢめよしみくの。

ことのほに。ばかされわたるきつねがは。あたにくらせし

とし月の。あいくわいゆめのさかつきの。あひざめまくら

歌「それはわかき身をうらみぐさ。なんのそなたにいた

ていなしあきもあかれもせぬなかのこひといのちが。たか

出口 大門の出口を、牧方の西南に出口といふ處あればそれにかけたるにや。

麓に立てる云々 古今集の「なみなへしうしと見つゝぞ行過ぐる男山に立てりと思へば」同序「男山の昔を思出で、なみなへの一時なくれるにも歌をいひてぞなぐさめける」より出づ。しんき しんきくさいに同じ。心の浮立たぬこと。くさくするること。

名にも似ず月こそ出づれ朝日山山吹の瀬に影見えて 謡曲頼政の文句。

朝日山 宇治川の東にあり。紅葉の名所。

山吹の瀬 宇治川の内の名所。融大臣此地に別荘ありし時、川岸に山吹を多く栽ふしより名づくといふ。新拾遺集「ちりはつる山吹の瀬に行く春の花に掠さす宇治の川長」

大黒舞 靖遊笑覽「滑稽雜談に是も悲田寺四ヶ所の垣外の類、

らでら。むかしのさとの。ねざめにいさやらであたゝむと
このうち。おきわかれゆくあかつきのそでからそでに手を
いれて。出ぐちのかぜもさむからず。今のうき身のたびね
に。じつとよせたるはだ。とはだふきわけてふく。山お
ろし。ふもとにたてるおみなめしりんきしんきとなまめき
て。くねる心のおとこ山いとしおとこをいにしへのよにひ
きかへせゆみ八わた。神にいとまとふしおがみ。ひがしを
見れば名にもにず月こそいつれあさ日山。やまぶきのせに
かげ見へて。歌大コク舞わたつた〜ひかる君のわたつた。ゆ
めのうきはし六十でうをわたりつめ十でうとゑいじた。一
に一夜のおなさけのゆふがほのわかばへ。二ににほひたき
しめてうきふねにかげろふ。かうばいたけがいはしひめに

大黒天の姿を模し、面をウぶり頭巾を着て、民間の門々に歌ひ舞ふ。年々嘉祝の詞を新作して唄ふ。故に此唱歌をも大黒舞といふといへり。(中略)梅津の長者の繪巻物に大黒が舞ふ處の詞に「一に俵をふまへ、二に俵をふまへ、三に俵の福壽を袋一ぱいにいれ云々」と見えたり。大黒舞には一定の歌詞なきもの如し。「渡つたく……これ様の忍び舞」は源氏物語の帖の敷と名を入れて菓林子の新作せしものなるべし。大黒舞は附圖第十を見よ。

光君 源氏物語の主人公。

●夢の浮橋 夕顔 浮舟 蜻蛉 紅梅 竹川 橋姫 手習 東屋 皆源氏物語の巻(帖)の名。

横島 宇治橋の西北にありし島。今地つづきとなれり。松の葉、二、長歌、さらし「まきのしまにはさらすあまのしづがしんざのうち川のなみかゆき」としてたへにいさたちいで、のさらそ……」

笠取山 山城國醍醐山の別稱。紅葉の名所。

宇治の川霧云々 中納言定頼の「あまほらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたるせせのあじろ木」より出づ。

手ならひ。わが名ゆかしきあづまやでこれさまのしのびね

世も忍ぶ。人めもしのぶ。みちしはに。かごかるすべもし
白妙のさらしほすてふまきのしま。はんまちどりの友を
よぶ。われのともしなふ人とても。なきがほかくせかさとり
山。かくすとすれどころなやうちのかのぎり。たへく
にあらわれわたる。あじろきのかのせのみづに。そてひち
て。たがひにかけをみづかゞみ。やつれさんしたやつれた
ぞ。歌はなれぐの。あのくも見ればく。あすのわかれば

木幡里 山城國宇治郡の地名。伏見の東にあり。名所。
初名月 九月十三夜の月を名月とよぶに對して八月十五夜の月をかくよぶ。日次紀事「今夜地下良殿亦當明月」各齋芋而食之故俗稱芋明月也九月十三夜を豆明月といふに對して芋明月といふ。この縁によりて一口につづけたり。一口は淀の東にあり。
長池 大和街道の宿の名。京都より凡そ六里の所にあり。

おもひる。つらき我身のいろはのもじよく。そてにな
みだのゑひもせずこのはちりぬるこはたのさと。かちでこ
れほどゆくことも。はつめい月やいもあらひつみづたひ
のながなひて。つゞくさとくやまくも。みなちかつき
のやまなれどけふのうき身のころから。さぞ見ぬかほと
そてをほひたもとを。おほひかさおほひ。そらをおほえは
ふゆの日のいとゞ。みじかくはやくれて夜ながいけのみ
づのあり。みづのよとみにわれもとてよとみ。やすらひあ
かさるゝ

下の巻

木辻云々 奈良の遊里木辻も戀の札所といふべ名高き所にし
て標客のたづね來べき所の意。
三十三軒は三十三番の札所に縁を附したる數。
昔の京の八重櫻 九重(遊女の名)といひ出さんための序にて

赤染衛門の「古の奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひゆるかな」より出づ。
四天王 同じ社會に於てすぐれたる四人の者を四天王とよぶこと佛説より出でたることなるべし。佛説に須彌山の半腹に、世を護り、正法を護る四人の天王あり、東にあるを增長天、南にあるを廣目天、北にあるを多聞天といひ、これを總べて四天王といふ。源賴光の臣、綱、秀武、貞光、公時を四天王と呼びしもこれより出でしことなるべし。四天王といひしより續くものも勢といひしなり。

くつわ * 中年 禿立の子養ならず、稍年長けてより奉公することを中年といふ。
命がらり 命を差出すをいふ。縦横沙汰 奈良曝布といひしよりたてよ。沙汰といひしなり。かれこれと評する善惡の噂の意。曝布は奈良の名産。吉野の花も振舞つる三輪の素麵とつづけたるは花より團子といふ諺なもちりたるにや。三輪は素麵の名産地。しなだれ男 遊女にまことづき

奈良、坂 地ならざかや木つじも戀の札所にて。女郎やあげや三十三間むかしの京の八重ざくら。九重かほるこむらさき小藤を此所の四天王つゞくせいこそなかりけれ。

あひれやあつまいぎりあひのかねのけいやくもたされず。此さと一ばん名の高き山しろやといふくつわへ。中年四年二百兩命がらりに身をうりて。大坂のらちへ明たれと又けいせいとならざらし。たてよこさたをき、ふれて戀のやま和色好み。吉野の花もふりすつる三輪のさうめんくひ付て。かふ人あまれどうる日いたらず中にもたつたの

て、はなれぬ男の意。しなだれはもたれかかる、よりかかるなどの意なり。藤の縁をひきて近松の造れる語。獨武者 源賴光の臣、保昌を四天王に對して獨武者といひしによる。在所 鄙、田舎。深く染付の龍田とつづけたるは龍田は紅葉の名所なればにて、染付は思ひ込むの意なり。龍田や沖つ白波云々 伊勢物語の「風吹けば沖つ白波たつた山、夜はにや君がひとりこゆらん」より出づ。白波は盜賊のことなれば、雷間は貪慾無恥なること盜賊に似たり。白波の太鼓とつづけたるものなるべく、又沖つ白波立つた太鼓にいひつけたるなり。お敵 遊女より相手の客を、客より相手の遊女をさしていふ。あひつた。貸す 京坂地方の遊里にて遊女の見立をすることを遊女よりは

藤といふしなだれ男まとひ付あげやもしよわけよしだやの。仁三郎を定宿にてにかいを一間あてがひれ。命有たけ首尾ありたけかねありたけとつとむれば。四天王の名取をも。今のあづまが下に見てひとりむしやとぞはやりける。藤も在所にまれ男あづまにふかくそめつきの。たつたやおきつしらなみの太こもつれずけふも又。かよひ木辻の吉田屋の 仁三内にか。ヤアよねさままたちれきくのおよりあひ。おてきさまの待あひ我らがさしきへも少かして下されかしといへばかほるこむらさき。めつらしい藤さまの外の女郎をからんする。地男の心の一すじに。わきへふれぬいそばから見てもにくうない物なれど。こなさんとあづまさまとのあんまりて小ばらが立。しんきのわく程うら山しひ見

淀鯉出世瀧徳 四五

貸すといひ、客よりは借るといふ。
しんきのわく程 じれつたくな
るほど。
御鎮座 客を大盛といふより大
神に通はせて、御出を御鎮座と
いへるなり。

ぎん *
道へん どうしへんに通はせた
るなり。

あたま 物事の最初。

ぬがましじや。戀のめん^面々^々かせぎじやとばらく立ぞ入
にける。仁三郎いそがしげにしよこくと立出。詞^詞ヤア藤さ
まい^{何時}つからこゝに御ちんざ。地^地手でもおたきなされいで
夢にもしらがの母じや人。藤さまの御出じやあづまさまの
御きしよくも。けふ^{今日}いおこころよさそふな。詞^詞申。いしやの
名もぎん^起の物。はじめの西の京の。道へんと申ししやのく
すりて道へんに有た所を。きのふから三でうの元喜と申し
しや^者でめつきりげんきが見えました。地^地御きたうをほんぶ
く^院るんそくさい法印をたのみませふ。てうしくと手をた
く^是はい。あづまが氣しよくよひとのあたままでよいこ
と聞そめた。詞^詞去ながらあの病氣の。かの江戸や勝二郎がむ
かしをわすれぬ物思ひ。ねびきにこつちへとつたればきが

きつ^{きつ}い きびし。つよしの意に
てきつ^{てきつ}いせんさくはきびしい尋
ね様の意。

かいつてたつしや^達に成。そこにきづかひないこと。是に付
ても一こくもはや^早ふ請出した。四年の年を三年つかひま
一年の所を。もと銀の二百兩で請出そふと云からのおやか
たもふそくない所。エ、おやこのしゆがぶせいな。よそへと
られて此藤が一ぶ^分たずしなねばならず。地^地けふ^{今日}か
をつき付てぜ^{是非}ひ共わびてもらふしあん。み^耳をそろゑてく
い^傾申した是袖ぐちから手を入て。詞^詞うそか誠かは見や。
どれく。ホウ^可かひらしいこ^小ばん女郎。是^是はきつ^{きつ}い
せん^穿さく。扱^油ゆだんと御うらみなさるれど。ま^前へがみも有
私が親程なやま^{山城}しろや。さん^算ようだても申にくしは^母めう
けい^慶をやりまして。割^割つく^碎たいつ^音いせさ^母らりとら^母ちを明。
地^唯た^唯今^知おしらせ申さんとす^現ずり引よ^寄せ^張す^張みをすり。しか^鹿

鹿の巻筆 鹿の巻を廻旋して種
なつくりたる筆。奈良の産物、
鹿、春日、藤みな縁あり。
あやかりもの あやまるべきも
のにて、似たきもの。

林の介 禿の名。

淀鯉 淀川より産する鯉。雍州
府志「鯉魚所々有之其中淀橋下
所産爲勝是稱「淀鯉」

わさくと うきくと。

熱酒 酒に醬油と、鹽、魚節な
どを加へて煮つめたもの。刺
身などにつけて用ゐる。

のまきふで筆つまこひしかしかの藤さまめ。くわ
ほう者めかね持めあやかり物めとさひぎける。それの大け
い先あづまにあひたいよふでたもどこにぞ。詞いつもの二
かいにござりますこれ林の介。あづまさまよびましや。地あ
づまさま太夫さま。林の介とよばつても返事もせず。是の
どふじやまたれいの勝二郎といふ淀鯉を。思ひ出してなひ
てかな。鯉がついてゐるそふな鯉ならせんべいまいて見よ。
いや手ひやうしを打て見よ。こころへたんくたんくた
んと手をうてば。心うかねと身のつとめかなしひかほを見
せまいと。わざとにこくわさくと二かいの口に立を見
て。そりやこそこいがあるあられたさかつきをさしみにせふ。
此處 猪口(二寸) (入)熱酒 (差)刺身 爲
こころへちよくと御いり酒うまひことじやとわめさける。あ

口が上る 蒸口が上るの意。

下りは 下り鹿。

牛蒡様と申さう云々 八幡は
牛蒡の名産地なればいふ。雍州
府志「牛蒡 八幡山東園村之産
爲三名産一專稱「八幡牛蒡」園村
去八幡半里許」

よれさまに牛蒡はいかが云々
牛蒡は夢預と同じく男の精分な
ふやすといふよりのこと。

それも大事か云々 それも構ふ
事か加賀(鹿)の牛蒡といふこと
があるの意にて、萬歳唄に「加
賀の牛蒡毛牛蒡」とあるをいへ
るなり。加賀も牛蒡の名産地。
引拔牛蒡 當時遊女を身請する
ことを引ぬく、びつかくなど
いひしより引拔牛蒡といひかけ
たるなり。

座を持つ 座興を添ふるをい

づま二かいにこしかけて 是仁三さま。たんと口があがつ
たの。あんまり鯉々いんすな。鯉もたきへのぼりつめいま
でいどふもおりはがない。地惣して鯉といんすの勝二郎
さまゆへかいな。あのさんへ八わたの人八わたに鯉の有ま
いが。合点がいかねといひければそれならば今日より。こん
ぼ様と申そふか。よねさまにこんぼのいかゞかヤアそれも
大事か。かゞのこんぼといふこと有そんならいつそうけこ
んぼさま。おつ付だんなの引ぬきこんぼめでたいこんぼと
ざをもてばエ、にくいくちやた、きこんぼにしたひぞと。
二かいおる、もいさまねと オクッうのべ、斗の笑ひがほいふ
てなくより。なをつらし。藤もいよくきげんよくけふの
うれしひことそろへ。詞第一そなたの氣色もよし。仁三お

おじや 正しくはおぢやにて、おぢやれの略。おぢやれはお出の約。
 けでんす 化轉または怪轉の字にあつ。怪み驚くをいふ。
 取しづめもない とりとめもないに同じ。
 胸をついた事 意外な事。びつくりした事。

やこのはたらきで身請のらちがあいたぞ。地くわい申した金子をさとにのこいてそなたの身と兩がへして一兩日に吉日きわめ。たつ田へ御供仕るサア〜二かいて酒々。あづまのこれのおふくろへよふれいふてあとからおぢや。仁三こつちへと手を引ておくの。二かいへあがりける。あづまはつとけでんしてゆめ見たやうな事共やな。ねびきにするの請出すのと。取しづめもないせんじやうい。十人が十人で思ひれたさにいふこと。どこでおびさへとかぬ身によもやと思ひたのみまするといつはりしを。さきいしやうじきよろこんではやだんかうがきわまつたか。さてもむねをついた事たれにとふとだんかうせん。勝さまからいびんぎもなしサア今でも出るといふときにい。なきくとひてもかな

のみこみ 承引。納得。

常闇 いつまでも闇きこと。
 通ふ心や 心の通ひしにやの意。倒置したるは格于前と頭韻を合せんためにや。
 一度は祭え……東の方に 謡曲、杜若の文句。但し「ま」となりける世の習ひは「ま」となりける身のゆくへ」とあり。

ふまい其きいにならぬさき。とんとうちあけいふたらばきりづめにつめられて。思ひきらるゝことも有とはしごはんぶんあがりしが。いやくひよつといひ出しさきにのみこみない時い。勝二郎さまのおためまで取かやしのならぬこと。地ア、いふもいやなりいわねばわるし。つみふかひことながら今の間にあのお人の。身にさまたげもできよかし。此やまひがつのれかし。こんやのよるがとこやみとあけずにあつてくれよかし。身請のときがのばしたいととがなき天にもなんをつけ。なげきうらむる世のつらさ。わが身ながらもあさましやとんとふして。なきしつむ涙も。はしごをつたひけり。通ふこゝろやかうしまへみゝにこたゆるうたひのこゑ。一たびいさかへ。一たびいおとろふることい

無算用 損益の念に乏しき、
してやる 取り込む。
賣りへぎ 物を原價よりも高く
賣りての儲。賣割。

りのまことなりける世のならひ。すみどころもとむとてあ
づまのかたに。あづま〜とうたひわすれたかほつきで。
わが名をよぶひしつたことと。あんどのかげからおもてを
見れば戀しゆかしの勝二郎。とび立やうになつかしきおも
てに人め有。それからまひつてかう〜とゆびでをしへ
てまねかれて。小くらがりをばそつとぬけ。つつととをれ
ばすがり付なふよふきてくだんした。あひたふてならなん
だとしつかとだきしめ泣るたり。よいしゆのはてのさすが
にてひんくをひんくと思はばこそ。此なりを見てたも。
おもへば〜ぶさんやうそなたの身をうらするほどならば
三百兩もしてやつて。うりへぎの百兩も手にもつたがよい
はづ。大さかのおやかたへ二百兩わたさねば。あづまやの

差も引もなく 増もせず、へら
しもせず。
賣らさいでも 賣らてもに同
じ。さいいは「賣らて」を「賣ら
いて」といふの類にて、とも
に延音の類と見るべき。
だんない 大事なに同じ。構
はぬ。
坂田藤十郎 元祿時代の名優。
濡れ事に長じ、殊に傾城買に扮
して名ありし人。延寶六年、大阪
の荒木與次兵衛座にて「夕霧名
残の正月」に藤屋伊左衛門に扮
して盛名を博し、寶永六年十一
月一日六十五歳にて歿するまで
三十二年の間に此芝居を演ずる
こと十八回に及びしがいつも好
評なりきといふ。
紙子 *
手夕霧を仕る 手芝居(已れ興
行元となりて演ずること)にて
夕霧を演ずる意。夕霧は藤十郎
の演じたる「夕霧名残の正月」を
いふ。
太夫又逢ひにきたわいの 此文

太郎左衛門とやくそくのぎりがはつるゝとて。さしも引も
なふきつと二百兩にうらさいでもだんないこと。此どんさ
からこのつら。なんにもとくひなけれ共。坂田藤十郎が夕
ぎりをま〜と見たひと思ふたが。此かみ子で手夕ぎりを仕
る。太夫又あひにきたわいの。サアそなたもこ〜でなきやと
いへば。地ア、なくぶんゆふぎりにまけいせまひとなきけ
れば。おとこもこ〜ろしほ〜と。詞かいや。〜物まね
にまことのなみだをまぎらかす。地おく〜かいより手をた
〜さかぶろしゆ。あづま〜まよびましや。あづま〜ま。〜
とよぶこ〜すそれ人がくるア、しんき。とこへかなこれ
〜こたつへかくれさんせと。ふとんをあぐれば勝二郎。
詞此なつこ〜のしはるへ。竹本が弟子がくだつて重いつ、

句は「夕霧名残の正月」の伊左衛門の齋詞なるべし。夕霧阿波鳴波にも見ゆ。又寛政役者氣質に、藤十郎が伊左衛門に扮して、素肌に一重紙衣を着、破れ編笠をかたぶけて夕霧に逢ひに行くことを演じたるよし見ゆ。

竹本 竹本義太夫をいふ。
天教鬼宿日 天教日にて鬼宿日にあたる日。最上吉日の意。天教日は天より萬の物を養育で、其罪を赦す日にて何事に用ゐても咎なしといふ日。舊曆に此日を大上吉日とす。春は己亥の日、夏は甲午の日、秋は戊申の日、冬は甲子の日。鬼宿日も舊曆に大吉日にて萬よしといふ日。毎月一回あり正月は十一日、二月は九日。三月は七日、四月は五日、五月は三日、六月は朔日、七月は二十五日、八月は二十二日、九月は二十日、十月は十八日、十一月は十五日、十二月は十三日。善は急げ 毛吹草に見えたり。

をかたつた。地サア是から夕ぎりかいつて重いづゝこたつのだん。詞北ばまへんのよいしゆのこたつに水を入まする。地かみこ一枚の我らとてものことに。火あぶりになりたいとふとんとつてひつかぶる。仁三郎二かいよりしやうじを明あけて。詞申々あづまさま。たゞいまこよみをせんさくすればあすのてんしやきしゆく日。地ばんじそろふた大吉日銀へお身につけてなり。何にふそくないうへへ善の急げあすのあき。めでたふくるのを出しますはづ。其用意なされませのふぞく大きな物でのでくれふとしやうじ引立入にけり。こたつよりむくくおき今のなんぞ。くるのを出すとの善か悪かきづかひな。聞たいと氣をせけばサアされば。それゆへむねをいためること。せんとのおふみにもい

古くよりの遊。胸を痛める 心配する。作病 つくりやまひ、けびやうに同じ。ぐめん 工面の訛。煩悩の犬がして 諺にいふ煩悩の犬がしての意。尤の草子、へるものしなくに「煩悩の犬は門に歸る」と見えたり。煩悩の犬は打ても去らずといふ。煩悩は大智度論に「屬、姓屬、痴是名煩悩」と見えたり。在所 故郷。

ふ通りたつたの藤がこといの。さく病おこしつふつて見つ色々あかるくぐめんして。のく様にしかけてもぼんなふの犬かして。このめうけいあいさつにて請出すだんかうきひまると。聞からむねがさひぎ出し今に心がおちつかぬ。どふした物であらふやら。もはやちるにもあたぬとなくばかりこそちからなれ。勝二郎もなき出し。さてもくわるひことも。つげはつぐく物かな。五年いぜんにざいしよを出むりやうのつらさにあふたれ共。あきらめつなぐさめつ心で埒を明たるが。地命かけたそなたを人の物になすかなしさ。二百兩といふ大てきに。ゆみてつはうもかなぬとはをくひ。しほりなげさしが。詞とかふいふまによいふくるもふふんべつない所。地そなたもしにやおれもし

附をすゑる 覺悟なきめる。

八つ 丑の時、午前二時頃。

年まへ 年期の明くる前。

丹波越 駈落をいふ。東海道名所記、島原の條に「親のゆづり本手の金銀し、やう／＼うすらぎぬれども、へちまの皮とも思はず、つひに果しなきあたし心に一跡をほつきあけて丹波こしなるもあり云々」又、傾城色

なふとわかい若 同士同 氣士 をたしなみ。死をさき立先て涙をか涙くすなげ概きの色こそ哀なれ。あづま死吾妻に身とどう身をすゑ是申勝二死郎様死 詞しぬるかく覺悟こにき極のまらば死しな死ず死に死の死がる死、思案しあん有。こな案さんは先お歸り内をしまふて。よなか夜中すす通き八ツの時分じぶん又にまたござんせかねと金のへて置ませふ。地其かねもつてた丹波んばへの退き來年わたしが年まへ前に。むか迎ひ來きて下さんせとさ耳、やけば勝二郎それはし至極こ才のさい才かく。詞其かね金の借かる賃かもらふか何處とこから出るはてそれ早のかま極いんすなわるい様惡に早いませぬ。地はやうい去んでござんせとせがめばうな領づき悦で。是ぞほんのた丹波んば越こへと。不道化だうけい音ふて忍氣び出愚る。きのおろかさ實もそ實だち實からう實き事こと知しらぬ音しるしかや。あ吾妻づま妻い出来ほん出来ので出来き心出来ふつ出来とい出来ふ

三味線、京之巻に「今時の悪性者。仕通してもいさなく丹波越などすることにあらず。京の者は江戸へくと下り云々」と見ゆ。京都にてつひ果したる者の丹波へのくこと多かりしよりいひ出でたる詞なるべし。江戸八百韻「わかれ路やうき徳を巻くござ一枚。きのふの富貴けふ丹波越」不道化 おどけなどいふべき時にもあらぬにいふ道化の意。だく／＼と とき／＼とに同じ。

しすまいた 成し遂げたりに同じ。しなしたりの反對。

た音のいふたれど。これからが大事思案のしあん火こたつ燈のやぐ燈らをだ合んかう柱。おなか腹のつかへ痛だく／＼とむね胸にお腹とるをさ下すりさ下げ。詞二陪かい陪の客をさ刺しころ殺せばあ明日す難の難ん難きを難の難がる難、とく。かねを取足り勝二郎様のお為ために成是為が徳。地是程思案よいこと有物かあ目しも前と香によ中いしあん。こ香けて有中の中が見へ殺なんだ殺ころして殺のけふと思ひ立。め目のまへ斗香せな中か知をし知らぬお女んな智のち慧るこそはかなけれ。夜何い時なん時ど時き時ぞ。だ蓋い所夜中の。よなか夜中をつ告ぐるい肝び肝きも有更ふ行け行ゆ行く行ま強に強こ強の強げ立。ひ氣ざ膝の震ふる踏ふ踏を踏ふ踏み踏し踏め踏く踏。は踏し踏こ踏の踏口踏から踏の踏ぞ踏ひ踏て見前れば。客前の後る知ふ知て知せん知こ知も知し知ら知ず。仁三郎浮が氣う氣ひ氣き酒行い行きた行を行れて行い行し行や行う行ね行つ行か行ず。地仕ア濟し濟す濟ま濟いた濟は濟し濟こ濟三殺ツ殺四殺ツ殺あ殺が殺つ殺て見殺て。詞何ア何ア何こ何り何や何なん何で何ころ何そ何ふ何双物何が何

差足 歩む音をさせじと静に踏
み出すなふ。
陸奥の唐紅の錦木 錦木は陸奥
國希婦の里の名物なり。謡曲、
錦木にも「是は錦木とて色どり
飾れる木なり。いづれもく當
所の名物なり云々」又、「猶々錦
木細布の謂御物語り候へ。昔よ
り此所の習ひにて。男女の媒に
は此錦木を作り。女の家門に
立つるしるしの木なれば。美し
く色どり飾りて、之を錦木とい
ふ。さる程に逢ふべき男の錦木
をば取り入れ。逢ふまじきをば
取り入れれば。或は百夜三年ま
でも立ちしによつて千束ともよ
めり云々」と見ゆ。

なひ。地おびをといしめころそふか。いやゆるりとするま
いあるまいたばこてふすべころそふか。ゑふてさきへこつ
ちがしなふなんとしてよかるふぞ。はさみでもかみそりで
もかな物がなと。座敷中をさしあししうろくうろく尋
まひり。ヤ思ひ付たぞこたつのひばし。火にやいてのどぶ
ゑをとをさば刀も同前と。ふとんをあげて手をいれあつや
くとふところの。ふくさに持そへみちのくの。からくれ
なるのにしきゞや枝さんごじゆとやけ付たり。嬉しやさめ
ぬまにと立上らんとする所へ。仁三郎が母めうけい。調あづ
まさまだおきてか。地によろくればさきもつぶし袖
のかけにをしかくし。調ハアかみさまか。わたしもはやす
みまする。さめぬまにこなさまも地めのさめぬまにあたた

よれ *
根引 *
松 太夫の異名なり。委しくは
索引によりて見よ。

いはれぬ長口上 やくにも立た
ぬ長口上。
あほうらしい ばつらしい。

かに。あつふしてねやしやんせとうろたへあいさつ跡さき
なり。めうけいさらにもつかずおまへにくいはうなよね
様や。調くるわではん昌しつめてまもなふね引の松さま。
千年も万年も藤様との御中さめぬやうにあそばせ。地其い
としらしいおきだてゞのさめまいく明日おめにかりま
せふと。じぎをのべて立かへれば火ばしのこほりと成てげ
り。エ、いれぬ長口上やきなをさんと。ふとんあげてもこ
たつもつめたし。調エいあほうらしいなんばうさめぬといや
つても。すみ火までもさめきつたと。地ふいつあをいつきを
せく所に。二かいより仁三郎ゑいざめの長あくび。客のわ
きざし持ながらめをすりくはしごをおり。調ヤアあづま様
爰にか。扱ゑいましたと下にゐる。あづまわきざしに心つ

氣の通りぬ 無粋なといふに同
じ。
渡並 通りへん。

御見なる 御めにッ。る。

鹽茶 番茶に鹽を少し加へて點
てたるないう。醉をさます效あ
り。

ひつそばむ よそに見えぬ様に
かくすないう。

き。それハ藤様のこしの物。こなさんも先きのとをらぬ。客
の刃物を預るとハ渡りなみの客のこと。藤さまとのめをと
に成あす請出さるゝこよひとなり。心中ハせまいし其まゝ
をいていかんせと。地いへ共ふらゝゝるねふりながら。はて
一やでもお客の中ハ弓矢の礼義はづさぬと。いふうちにわ
さざしのつかをひさにおさへて。いかふつけたにやすまん
せと。いへ共つかにのきもつかず明日御げんなりませふ。
しほ茶をのんでねてくれふとわさざしの。こじりを持って立
程につかの残れと下の見ず。めいそらざやをぶらさげてぶ
らゝゝかつかつてへ入にける。アゝゝ有がたい神佛のあてがい
かと。いたゞきゝゝひつそばめ立て見てもうしろより。又
たれぞくる様であぶなさこいさ右ひたり。足もすいらぬあ

北枕 すてに死脈打てりといふ
へし。
せながに腹 せに腹はかへられ
ずの跡の意をこめたり。

んどうの我がげにびつくりして。わなゝゝふるふはこばし
こぎしゝゝぎしゝゝなるをとも。みゝにこたへむねにしみ
きをおさへいきをのみ。漸なやみのほり付ためいきついた
るおんなわさ。わが身ながらもきやうさむる藤がふしたる
北まくら。いとしやとがもない人おとおそろしながらせな
かにはら。むなさきに打またぎさつささしあてどうとの
る。詞のられてふつとめさます。これゝゝゝゝゝゝ立まい。
こなたにうらみもつみもない。かりにもほれてくれた人こ
ろしたふのないわいな。地ころさるゝこなたよりころす我
身がかなしいと。なみだのやいばにつたひしがなふいけて
おいて請出して。めをとに成が情ないわしにハ大事の男が
有。其男とゑんきれる戀ぢのあたと成故に。地今さしころ

つくる心の下に「を察して」を補ひて見るべし。

落椽 座敷より一段低き所にある椽。

南無三寶

すふところの。詞小判もひんな男にやりたい。地せつ生のつみぬすみのつみ男の爲につくる心。少しの恨もはれたもと又はらくとなきければ。とくしんやしたりけんかなのじとや思ひけん。めをふさひでへんじもせず。サアたゞ今とくつとさし。とゞめ迄の手もよりの其まゝすてふところの小判を兩のたもとに入はしごおるればうしろより。つかみ立たる其さむさ。かんふうはだへもちゞみどうふるひ。はん死はん生の手おひのりかへつてうんといふ。こゑにおどろきはしごよりばたゞどうとおちゑんのすみにかゞんでふるひある。手をひりなやみくるしみて。つゞひてはしごころびおちうめくこゑにめうけいおやこ。家内のなん女我もくとかけ出く。詞ハアなむ三寶藤様を切つた。地き

紙衣 雍州府志、俗稱糊合柿油少許、續白強紙、然後塗柿油、日乾如、此數度其色自赤稱後晴天一夜露宿則發、色於、是兩手揉和之、以是製衣服、是謂紙衣、又稱紙子、有、便、寒氣、落、下、白、山、通、四、條、邊、製、之、云々、もやつき 混雜、こたつきに同じ。

りてが有ふところ、かしこ尋さがしてゑんばなに。人こそと引出せば是はく。詞あづま殿。地それ取はなすなればれく、れと立さへく。詞いかにもきるも私ができるかねもわしが取つたから。氣遣しやるなにげのせぬ。地と。尤きような白狀。先々龍田の門衆あにこのかたへ。ちうしんをぬかる。なと追々人をはしらせける。勝二郎の約束のじぶん過るとかみこにも引。すぐにたんばのたび出立にて来てきけば。あづまが客を切たと町のもやつきつゝと入て。詞是々てい主。身はるどや勝二郎と云あづまが男。何とが成共どうざいにしてくれと。さしきにどうとざしければ。地あづまいないてめもあかず無分別なことをして。思ふがあたと成ましたとかほをさげてぞいたりける。詞町の役人龍田よりはし

物さびて 見るかげもなくて、
ものさびしくて。

こは異見 きびしく異見するこ
と。

氣病 物事に心配するより起る
病。ふらくやまひ。

り歸つて。手をいの兄頂御。只今はへ御出と。地云を見ればいに
しへの手代新七。もめん布子も物さびて御免あれと座敷に
入。主從顔を見合互にはつとおどろく驚中。勝二郎せきめん
し面目なやはつかしや。そちに顔の合されぬと。兩袖をか
ほにあてうづくま。りてぞかくれける。新七恨の兩がんに
涙をうかめ大聲上。聞へませぬ且那殿。我らにかほ
をか隠くさるゝの面目ないかはつかしい。コレ其はつかしがり
がおそかつた。五年以前に新七をばつかしいと思召ば。御
身代漬のつづれませぬ。まづかふあらふと存じた故。様々のこ
いけん。新町はしてお足にかけられふまれながらも御い
けん。地親だんなの御恩の送たさ。女房おはんのお身のう
へを苦くにいたし。氣病を煩ひ去年の春終にむなしく成まし

●元正問記によれば、辰五郎の父
古庵の歿したるは元祿四年にし
て、其十七年忌は寶永五年に當
れり。此作の元祿年間に興行せ
られざるを知るに足る。

た。詞彼かれめももとの御家來けらいお主を苦くにしてあいはつる
の。下人たる者の本望いさ、かくやみもいたさばこそ。地親
且那のおかけで少のもとで家屋敷。在所龍田の親共もうへ
こ凍へぬ程なれ共。詞いやくお主流のらうの身。家來のあ
んらく道ならずと家やしき田地迄うりしろなし。有銀十八
貫目御覽の通わがみに我身にのろくな布子もきぬていながら。
地親だんなの十七年忌内ないせうでおまへから遊ばすと申
なし。おそらく江戸屋とやのついで追善んとわらぬ程のほうじを
致。御出世の願ひの爲京都公家方折々の。付届油ゆたんもなく。
残る金二百兩いとしやあづま殿。新町の殘金故此所につと
めとき。御兩人のきを思ひやり弟の藤五郎が。請出すぶ
んできたなしにおふたり二人一所にを置きましたらば。ひん苦くの

中のおたのしみ。高高いもひ低くいも親たる身の悦びといふ子の悦び。おまへの御きげん機嫌よいかほを。くさば草葉のかげの親だ旦那んなに。見せましたい心ざし。御奉公のしを為納さめと存じ立たる所に。藤五郎へあづま殿の手にかつてしんだか。で出来かいたく。此新七のお主の爲心ざしの奉公のしたれ共。一命の奉公の其はうにをとつた。兄にまさつた忠の者。是々御てい主。只今申通りにきよごん虚言ない。兄がいひぶんないと云證文をいたすから別條の有まい。それとても是非せひ所のさはう下手人を取ならば。水いら入ず地に此新七。女房のしぬる親のなし。ひとり一人の弟の相はつる雲のうらを尋ねても。お主より外よ世の中に大事の人無のなきものを。へだて下さるだ旦那な殿うらめしう思ひますとどうとふして。なき

水入らず 俚言集覽「此は親しき者の中に疎きもの間雜するを油に水のまじりたる如しと云。それにうち反して親しき者ばかりの集會をかくいふ。」

でかいた

ければ。あづま吾妻を始亨てい主お親子やこ町内近所の者迄も。誠の心をか感んじつ。皆々涙をながしけり。勝二郎とんで出ア。あやまつた新く。か様な身と成は果てたもそちをふんだ下人のば野ちと。かねくくやみな嘆げいた藤五郎を弟と。し知らいであづま吾妻がころ殺したも我故ぞ。主故に身上潰つぶし其ていとなつたを見て。此勝二郎がいか帝にちくるいなればとて。見ても聞ても居あられふか。しぬるにも死しなれもせずともなさけに其方が。此足掛にかけい以前せんそちをふんだ様に。勝二郎をふんでくれひとつのつみものがる、爲。さりとして新七某をふんでたもと。足のしたにせなかをむけ手をあ合せてなきければ。あづま吾妻のすがつて弟ご御のかたき私刺。さしころして下さんせどうもいき生ていにくいと。なげ嘆きく

冥加ない 「冥加なし」を添へたるにて、冥加にあまれの意。

吉左右 よきたより。

いきりきる 勢のありたけなつける。

瀧の壺 瀧の下の淵をいふ。瀧の壺より湧き出る白ければ水の泡をいへるなり。

やむこゑなく新七のとびしがり。調ア、もつたいないめうがない。新七を新七と思召が定ならば。地御ふうふ心をまつたふして出世を見せて下されば。ふみころされても大事ないと。三人かほをさしよせてこゑを斗になきあたり。かゝる所に八つたのかんぬしきのたいぶより。御吉左右のはやびきやく。いきりきつてあんないすそりや吉左右とい悦ばしと。状はこひらくもとしをそしとふうじめきつてはいけんす。詞なにくゑとや勝二郎こと。家來新七數年のなげきかんに思召され。くはんばく左右の大臣御あわれみによつて。八つたの本地もとのごとくかへしあたへらる。追付きたくあるべきと。地よみもおいらす八はい九はいをよろこびをとりとびあがり。はねあがりたるよと鯉のたきのつばより

願解 神佛へかけた願事の成就したる時、その禮参りをする

惠方神 惠方の方にある神。惠方は舊曆にて歳徳神の司る方といふ。和漢三才圖會「按年徳神方。向此方百事無障。若不明。以大將軍方稱閉塞之對也。十幹配五順輪而陽陰幹相合以陽幹方爲年徳所在俗名之曰惠方。如甲巳年則甲木方。乙庚年則庚金方是也。但如戊癸年土則中央而交四隅無定位。故用土母丙火方。又云其相合兩幹共爲吉神。假令如乙庚年乙方亦爲吉」(圖を見よ)



遊鯉出世禮徳

わき出る。白かねこがねのにとりだからときのかちとき(関時)悦びとき。五畿内五ヶ國神々に先願。ほどきに三重(悦びのへいはくをあげかぐらをあげ。参り治る八つた山此なにつのゑはう神たみあんぜんこそめでたけれ

夕秀河板行渡

右此本は太夫ぢきの正本をもつて板行致しいされば初心
稽古のためことごとくかながきにしてふししやうくきり
三味線ののりかたほとひやうし三重おくりのしなくひ
みつを殘さずあらはし令板行者也

山本九兵衛板

夕霧阿波鳴渡解題

夕霧阿波鳴渡は巢林子が五十八歳の時の作にして、寶永七年七月二十四日を初日として、竹本座の興行したるもの、近松の世話物中古來人口に膾炙せるものの一たり、大阪新町扇屋の抱、夕霧藤屋伊左衛門と契りて一子を擧げしが、後伊左衛門勘當せらるるに及び、其子を伊左衛門と張り合ひたる阿波の侍、平岡左近の子なりといひて其許に送る。左近の妻、夕霧を身請して其子のお乳の人とせんとす。伊左衛門夕霧の駕籠舁となりて左近の邸にいたり、私に親子の對面をなす。左近これを見て親子三人を逐ふ。夕霧時に病中の身なりしが、是に於て病愈々篤し。伊左衛門の母これを聞きて、夕霧を落籍せしむといふが一篇の筋なり。

夕霧は寛文延寶頃の名妓なりしが、病みて延寶六年の正月六日に歿す。當時夕霧が病死の噂いたる所に喧傳したりしかば、道頓堀の荒木與次兵衛座に於て、翌二月三日より夕霧名残の正月といふ外題の下に夕霧を仕組みて興行せり。此時、名優坂田藤十郎、伊左衛門に扮せしが、意外の好評を博して、藤十郎の當り藝となり、繰返して同年中に興行すること四回に及び、爾來藤十郎が寶永六年十一月朔日を以て歿する迄三十二年の間に前

後これを演ずること十八回。しかも毎回大喝采を受けざることもなかりきと傳ふ。藤十郎の歿するや、世人再び其妙技に接するを得ざるを痛みて、これを惜むこと、さきに夕霧が歿したる時の如くなりき。此夕霧阿波鳴渡は寶永七年が夕霧の三十三回忌なりしと夕霧歿して名残の正月の出でしが如き關係とに於て藤十郎の歿後に出でしものと思はる。しかして巢林子の此作は夕霧名残の正月を材とせること、此作に夕霧名残の正月と外題を附せるものあるに徴すべし。惜むらくは藤十郎の演じたる脚本今に傳はらずして、兩者の結構を比せんに術なし。されど伊原青々園氏が日本演劇史に述べられたるを見るに、此際巢林子の手に改まりたる所尠からざるが如し。(門の作なるよし新小説第六年第一卷、宮崎三味氏の近松門左衛門の語に見ゆ)

此の夕霧の脚本は今日に傳はらざるを以て、其梗概を知る能はずと雖も、後寶永元年に彼れが之れを繰返して演ぜし時の藝評を見るに、先づ橙と海老とにて夕霧に當事をいひ、夕霧はこれを憤り、後に愁歎となる件あり、伊左衛門の妻が怨霊となりて、彼れに怨みをいふ件あり、伊左衛門後に揚屋へ來りて、親伊兵衛を取揚婆と誤まり、夕霧の産みし子は吾が胤なれば精出して産ましたるものと挨拶する可笑しみなどあり、次に傾城萩野に手管にて口説を仕掛くる所あり、更に寶永七年に近松門

左衛門が始めて操に上しし、傾城阿波の鳴戸は確かに此の脚本を材とせるにて、彼の橙と海老とを萬歳の言立てに換へたるならん。(日本演劇史、第二卷、坂田藤十郎の二節)

夕霧の傳記及び此作の實説につきては、添標に見えたり。左の如し。

夕霧の事 並引舟初發

都柳町を許命せられし原三郎右衛門といへりし浪人は京島原の内女郎屋の長となり、今に至つても相續して其家筋有今一人の林又市郎といへりし人、是も同廓に居て女郎屋と成天正年中より相續し來りて、扇屋四郎兵衛といへり同所桔梗屋意得といへるもの廓中と意味合ありて、大阪へ引越ける此あふぎやは廓中と譯もなかりしが、意得と懇意なる故おもひ立一所に大阪へ引越ける比は、寛文十二子年也。此夕霧下るといふ噂、大阪中の沙汰にてけふは下るか、明日は下るか、と毎日川すじの見物おびただし、夕霧は勿論京女郎の下るといふ歌を作りて、當津名物のまがき節を付諸人廓中に入込み、揚屋の遊びを催ふしたりか、かかる事なれば、いづれ京女郎の分は、はんどやうなりし中にも、夕霧は聞しに勝りて、美艶なる事誠に芙蓉の露を合るがごとしと、其比もてはやしける其上、萬藝に達し行義發明言語にのべがたしと、或書記に見へ侍る全盛日々、にまし一時に方々の揚屋より大臣のまねき繁

ければあまりつとめがたくとて毎日鹿子位女郎を一人宛自身より揚て召連ある
き諸方より一時に客來る時此かこゝる女郎をさきのわけやへつかはし座を持せ置
其間に初に來りし座敷を見合又其所へ行つとゆけると也夫より前當津の太夫職
二人禿はつれたれども引舟女郎を連たる事なし此夕霧より引舟女郎を一人宛連
る是はじめなりかゝる全盛の果にあひける夕霧なれども壽命は是非もなきもの
かな延寶五年の秋の比より病氣にて醫療手をつくすといへども甲斐なく貴僧高
僧を請じ大法祕法を盡せども露するしなく諸所の佛神に祈をこめけれども天命
の限りにや翌延寶六年正月六日といへるに病床に死す時の人おしひ事松を離る
る蔦かづらのごとしかくてもあるまじければ翌七日西寺町淨國寺に葬りける法
名花岳芳春信女と號今に淨國寺に件の石塔ありて扇屋一統絶ず年回を執行する
也(中略)

扇屋伊左衛門阿波鳴戸

といへる音曲の作り物有此伊左衛門といふ事跡かたもなき事なり此趣向の内に
阿波の大臣といへること有此阿波の大臣とさすことは由縁ある事なり其比の大
臣に大阪阿波屋某とて大分限の人あり此夕霧にふかく馴染病中も殊の外深切な

る世話をよそながらして死たると聞よりなをく厚恩をかけけるとぞ則九軒町
揚屋吉田屋喜左衛門方の客なりしよし其比かふき芝居の立役元祖坂田藤十郎同
年二月三日より夕霧名残の正月と云外題にて則藤屋伊左衛門に藤十郎なりてけ
いせい買の狂言にて大にはやりけり同年に右の夕霧狂言を四度出し翌年正月二
日よりまた夕霧一周忌といふ狂言を出し三年忌又七年忌十三回忌十七回忌とて
くり返し延寶六午年より坂田藤十郎死去せし寶永六丑年迄夕霧狂言を十八
度出せりことく大當りにてありしとぞ是全く夕霧が威徳と藤十郎が妙手な
るべし此事委は耳塵集に出でたり

此作の本文は山本九兵衛板の八行本によれり此書第二枚目一葉落丁なりしかば百方
搜索したれども良本を得難く止むを得ずして落丁の分は八文字屋八左衛門板と思は
るる九行本によりて補ひたり凡例にのべたるが如く假名遣句切等一も改めたること
なし。

* 索引によりて其解を見よの
符號

年の内に云々 古今集、巻頭の
歌「年の内に春は來にけり」と
せなこそとやいはむことしとや
いはむ」の三の句の一とせを一
白に轉じたるなり。

餅花 日次紀事十二月の條「此
月真昼毎の家香餅…兒女貼
小丸餅於枯餅而玩之是謂餅
花」餅花は古くよりのことな
り。宗長手記に「冬の梅は、一
りん二りんかすかに咲て匂ふこ
そ。あはれ深からめどあまりに
正月に童の餅花つけたるやうに
咲きたるを。ふさはしからず見
ての事なり。」と見ゆ。

餅餅 暁の年中行事の一なり。此日は人紋日。
雄狹津の歌「なにはづにさくやこの花冬こもり今を春へとさくやこの花」をいへど、こゝは「高き屋にのぼりて見ればけり立つ民のかまど
はにぎはひにけり」の歌をいへるもの如し。 ●井籠の湯氣の云々 湯氣の多きを大杵にいひかけ、杵を下すを卸にいひかけたり。
●おろせ 駕籠または駕籠昇をいふ。此稱呼の來由明かならず。一目千軒に「卸の事。むかしは島原駕として色里ばかりに通ふ駕なく多くは

夕霧阿波鳴渡

近松門左衛門作

地年の内に春はらへ來きにけり一うすに。餅花ひらく餅つきのに
ぎくへしや九軒町。嘉例かたよの日取吉田屋の庭の庭の難波津
の。歌の心よ井籠せいろのゆ氣ゆの大きね。おろせの長兵衛が大あ
せて。やあるい。中のまんがうす取のさつ。やあるい。
さつやあるいさつ。さつさつつけく。ハッア木やりでつきや
れな。

夕霧阿波鳴渡

歩行にて行しと也中比名高き大臣有て女郎になづみ通ふ事繁くこれが爲に駕のもの三人抱き日毎に赴く或とき出口にて駕をおろして是より歩行にてお出遊せしとて一昇いひければ大臣大きに氣色を損じ行けといはばいづくまで行くべしおろせといはばおろせといひしより駕昇ものを御と異名するとなり今おろせといふは駕はか、す駕を廻す也駕つくものは別に有云々又、嬉遊笑覽に「按るに御は駕籠に乗は奢修の至りなればつと昇となふることなはかりて異名を呼しものなり字書に舍、取解、馬脱、衣解、甲背、日、御、舟、人、出、就、赤、白、御、など見えたりすべしつみおろせといふもの去年今年就中はびこりて……かのやつばらのとろく眼にたられ芝居終れば東山にとまひあんだ乗物の序に「つみおろせ」といふもの去年今年就中はびこりて……かのやつばらのとろく眼にたられ芝居終れば東山にとまひあんだ乗物を載せられてはい、おろせ」といふことと見えたり。古くは駕籠のみにいひしと見えたり。……はおろせ宿の主人又は駕籠昇をいふが如し。(附圖第一) ●やあゑい、やあは称を上ぐる時の掛け聲。あいはおろす時の掛け聲。 ●木道をつきやれ、掛け聲にて勇ましくつけの意。木道は建仁二年築西上人夫人に下知して己が名を呼ばしめしに始るといふ。大木大石家屋などを曳く時人の力をすむるために語らうた又は掛け聲。

先るはう棚神の棚鏡とるくやり手衆の。かほにとり粉の面しろいとてよね衆の笑ひ。かぶろが手折る柳の枝の。春もちかづく。年もちかづく。やがてくるわも谷の戸も。出て初ねの。鶯の。はねづくろひの君も有。

鏡 日次紀事十二月の條「此月良賤毎家寄餅作餅鏡形或作菱鏡形供三神佛又贈宗親是俗謂居鏡其圓而大者謂鏡以三其形之相似稱之」 ●やり手、餅を延ばし又は圓めなるといふ、そのねばりけを防ぐために用ゐる米の粉。 ●取粉、餅をつけるためのもの。 ●年もちかづく、勤めの年期の終り近づきて、麻を出んと用意すること。 ●餅の谷、戸出んとて、はねづくろひ(鳥が飛ばんとする時、嘴にて羽毛を整ふること)するが如き遊女もありの意。 ●正月買、正月は三ヶ日を始として、引續きて終日の多き時にて、客の物入も多かりしなり。傾城禁短氣に「白人といふは専らしる風をして衆生をすむるにあらざるや。然るに風俗派手にして道中天職應繼の品を似せ、傾城同前にして近年正月買といふことをはじめ、先元三三獻之」

々日の晝夜の花代飯代、白人への祝儀に金五兩、しかも打の出る細金にて宿へ銀子五兩、下の者へ銀二兩、それにかつた錢とて二百文、寶引錢とて百文、布袋屋のかるた代一匁二分、手鞠代七分五厘、羽子板代が一匁と、さまざまのかり物を書立て、大臣にもめなつける云々」と見えたり。白人にてもかくの如し。以て席中の太夫の正月買などは更に費用の多かりしを察するに足るべし。

正月がひの。だいくじん。太夫さまよりつけ届。かどをうる聲山草や。ちよつといひひましようら白ゆつり葉。こまめでござんせの春ながに。いよしもかひらぬ御げんまで。あふせをちぎる餅のきね。ついてはなれぬお客をいひひうすへ入ます。ますくぜんせい。さしきいせんさい。ににににせきみこりや又めでたい。あげやのもちつき。もん日の長もちお客に太こ持。こりや又にきく女郎衆にやり持。お家のかね持だいくふくく。松ふくふくく。松風や松うる。こゑこそ三重

は節季候の詞。太夫さまよりつけ届 太夫より揚屋へのつけ届なるべし。島原にては餅つきに庭錢といひて、太夫より揚屋家内へ祝儀を出した。新町にては贈りしにや。庭錢は島原に限れりといふ。 ●裏白、齒菜に同じ。和漢三才圖會「面背皆白四時不枯以飾元旦且爲祝之物」 ●讓葉、和漢三才圖會「新葉既生舊葉落如父子相讓故俗呼曰讓葉都鄙正月鏡蓋及門戶之飾用亦取相讓之義」 ●こまめ、餅を御健全にいひかけたるなり。餅は餅を妻乾にしたるものにして、健全に寄せて祝の物とし、小殿原など唱へて子孫繁昌をいふべく物として用ゐる。 ●いよしも云々、いよしは諸説ありて、いにしの誤ならんといひ、いよくの誤なりといふ。こゑは彌しなるべし。御けんは御見参の略。おめにかかるといふ。いよしこんの語は當時遊女の文に多く用ゐられたり。遊君三世相「かぶろが持る祝箱世界の戀のやどりなり。袖からわたす一結びかたかなのより五大力。いよしと迄はほの見ゆる。長町女腹切、あつた別れのあしたより

日文血文のつけ居り。いよこげんと書たるはほだしのたれが。花すい云々。●さんざい。善哉餅の略。つぶしあんの汁粉をいふ。節季候。日次紀事十二月二十二日の條「節季候。自今日乞人笠上挿。貧首葉。以赤布巾覆。而織出。兩眼。二人或四人相共入。人家。廳上。籠。乞米錢。是謂節季候。則告節季候。之詞也。俗候字代也。字用之。至二十七八日而止。附圖第十一を見よ。●紋日の長持。紋日は廊の年中行事の日。長持は遊女の揚屋入に運ぶものにて、紋日には殊に多くつとふなり。浮標に「長持運送并調度通用。一、大夫は長持。一、天神は中長持。一、引舟は小長持。右大中小三通り有るの。女郎屋の定紋をしるし内には。皮具并料紙。籠箱。其外手箱等の物品々々。入女郎様りたる揚屋へ女郎屋より持せやる也。此長持往古より有來る事なりしに。享保九辰年類焼して今は。大風呂敷に包み揚屋へ通ふ也。大鼓持。遊客に付添ひて酒の相手となり座敷の興をすむるもの。色道大鼓。大鼓持といふは。傾城買の客に付従ふ者をいふ。此名目の起りは紀州雜賀踊より始まる鐘を持たる者は。首に懸て踊る其中に鐘持の者に大鼓を持せる也。是に因て此名目とす。嬉遊笑覽「大鼓もち古くは太鼓衆といへり其義は離離海の能の大鼓打にならへ大夫を心よくのせて廻し大鼓の氣に入やうに拍子たつれば太こと云ふ。洞房附圖には信長の時に始るとの異説あり」

金山。黄金を掘出す山のことにて、福の神などいふ意に用ゐたるなり。
つとめも心まなれど云々。秋の末よりの氣病に、重らぬ先に養生するがよしとて、勤も心のまよなれど、深き好みのある吉田屋の揚として押して行く、その道中も「神なりひびきわたりにも。せがずさわがず。内八文字外八文字。ふみはづしませず。かひとり小狭がぬれても。いかにいかなそこらへは目もやらず」(御前發經記)といふ位なるともせず、病中のこととして

戀風の。其あふぎ屋の。金山と。名立のぼる夕霧や秋の末よりぶらくと。ねたりおきたりおもやせて。薬も日數ふる雪の。おもらぬさきのやう生と。つとめも心まなれど。深きよしみの吉田屋の。足もとかるき道中や。のれんくゞるも力なくけふめだたふござんす。ア、しんどうやとこし打かけ。我身をよこになげ入の水仙さよきすがたなり。喜左衛門きげんよく是はくく太夫様。御氣色もよいか

風にも堪へぬ風情にて道中の足許はがらゝの意。
しんどう。しんどうの略なるしんどの延びたる語。つがれたるをいふ。
投入れ。挿花の語。技ぶりのよきものを運び、人工を以て扱めず活花とするをいふ。
格子。くつわの意。格子へお出なされてよりは。扇屋へお出なされてより。
頭痛八百。うそ八百、せんじやう八百の類にて、八百は意を強むる詞。
角前髪。小姓のみに限らず、すべて當時少年の者のとりたる前髪。附圖第六を見よ。
小性。正しくは小姓。貴人の側近く召仕はるるもの。多くは少年。
おぼ。初心に同じ。世慣れず幼きこと。
若衆方。少年に扮する役者。
女方。こは若女方の意。年若き女に扮する役者。

して聞た程やせもなされず。おかほ持もずんどよい先今日今日のかけいのもちつき。格子へお出なされてより去年のけふ迄。伊左衛門さまとおふたり一どもおはづれなされぬに。今年餅搗ことしのもちつきばつかり伊左衛門さまいなるらう遊ばす。お前へ御病氣嘉例をはづす所。此喜左衛門頭痛八百。ちよつと成共よびましたいとねがふ折から。聞けふのお客の四國のお侍。つきんでつむりの見へね共すみ前がみのお小性らしい。地。其器量のよさおぼこさ。道頓堀の若衆方女方ひつさらへてもけもないこと。四國西國かくれもない夕霧といふ太夫に。近付になりたいとてわざく大坂で御越年。おきあひにかまふとて初対面のおつとめなされぬも存ながら。よびにしんぜたさすがおなじみの喜左衛門。いやおふなしの御

けもない。すこしもない。更に
ない。
氣合に構ふ。氣分に障るといふ
に同じ。
杉 夕霧について來りしやり手
の名、沖之丞は禿の名。

候べく候にやる。用捨箱「昔は
ゆきなり次第にしておけといふ
事を、候べく候にやつておけと
いふ者多かりしが、近年は稀に
なり、たま〜いふ者も其縁故
は知らざるもあるあり。是は昔
の女の文には、候べく候といふ
事多くありて、ゆきなり次第に
書ても讀めし故、それを背くや
うにしておけといふ意なり。季
吟十會集(寛文十年刻)つらねの
る歌の趣向は深かれや。候べく

候にあらしの文。候べく
候にあらしの文といひしをも
て、此証寛文前よりありしを
るべし。
紙子の火打膝の皿。破れ紙子の
形容にて、火打うたれど、膝の
皿より火が降るなどの意にや。
御伽名題紙衣に「今着てゐる破
れ紙衣の古火打うたれど向座か
ら火がふり云々」といゆ。
古の花は嵐の云々。以前の寛文
綺羅はあらずを嵐にいひかけた
り。おとがひ、くひしぼる、は
みだし鏝皆縁あり。
はみだし鏝。多くは短刀に用ゐ
る鏝にて小柄をさすところ、く
りかたとなれり。楕圓形が普通
なり。噴出しは小柄をはみ出し
たるが如きなきなすよりの名
にや。此名の由來明ならず。
かみさぶ。古くして目立ちてす
こしの意。
小尻がつまる。身動きが出來ぬ
といふことにて、おもに金錢の
融通つゞざるをいふ。京童「昔

出。身いひひと申どつといふた餅つき。調か、もしり餅つい
て悦びます。是杉沖之丞。中の間へいてぜんざいいいや。
地こ、ひひえます太夫さま先おざしきへといひければ。
ア、わたし氣色もよいがよいにいた、ね共。伊左衛門さ
まとふたりづれ一ともか、さぬけふの日なれば。命の内に
ちよつときて伊左衛門さまにあふ心。こなさん達のかほ見
たいと思ふ折ふしよびにきたを幸に。こ、迄のききましたさ
しきひきま、につとめる。そふ思ふて下んせ何が扱おさま
かせ。とふ成共のりにやらしやんせと、さしきへ、こそその
出しけれ冬あみ笠も。あかばりて。紙子の火うちひざのさ
ら。風吹しのく忍ぶ草。しのぶとすれといにしへの。花の
嵐の。おとがひに。けふの寒さをくひしぼる。はみ出しつ

ばもかみさびてこじりつまりし師走のはて。うさんらしく
吉田屋の内をのぞいて。喜左衛門やどにか。ちよつとあ
ふ。喜左衛門くとはなに。扇の大へいなり。男共口々に
ヤアあいつの何者じや。風の神か鳥おとしの様なさまでな
んじや喜左衛門にあいふ。百貫目もつかふ大じんのいふ様
な。ほうまかれなと云ければ。ヲ、百貫目がそれ程とふとい
物でない。喜左衛門といふべきものでいふ程にあいせてく
れい。どりやあひせてくれふ。こんなめにあひせてくれふ
と。竹ば、きもつてか、るを喜左衛門とびおり。ねだれ者
かしらぬそさうすな。となたてこざると笠をのぞいて。ヤア
伊左衛門様か。なんと喜左。是の夢か七ッか。扱お久しやな
つかしや。京大佛の馬町に御ひつそくとうけ給。霧さまよ

の紙は今の薬刀にていよくさ
びおとろへはがれをならすこと
あられば誰に身をとほらいよす
がもなく小尻つまりぬい浮世
をしのぎがたく云々

うさんらし 疑ひあやしむべ
しの意。

風の神云々 古紙子一枚の伊
左衛門の機子は恰も繪に見る風
の神の如く、古編笠の垢張りた
るは鳥おどしの破れ笠に似たり
しよりの言。鳥おどしは案山子
をいふ。

棒まかれな 棒をふりまかれな
にて棒をくらふなと同じ。
れだれ者 金品を強請するも
の。

夢の七ツツ 七ツは時刻の七ツ
をいへるにはあらざるべし。伊
左衛門と夕霧との間に設けたる
一于此暮越せば七ツになる子を
案じて恐れ來れることなれば、
思はず其子の年をいへるものな
るべし。
ひつそく おちぶれて世をしの

りの敷通の御状。飛脚も二三度奈良大津迄尋させ。たつた
今もお噂先おなじみの小ざしきで。二年つもるお物語いざ
お通りと袖ひけば。詞ア、紙子ざのりがあらひく。是ひ引
ばやぶれるつかめば跡にしらす坊主師走浪人。むかしはや
りが迎ひに出る今のやうく。地長刀の。さうりをぬいであ
み笠の中の座敷に通りが。お寒からふと喜左衛門。ちり
ぬ。寒ざらしの伊左衛門少もくるしからね共。心ざしを着
いたすと。地いたゞいてきる有さま喜左衛門つくく見て。
エ、うき世じや藤屋の伊左衛門さまに。此吉田屋の喜左衛
門がさせまする小袖。たとへ蜀江の錦でもいたゞいてめし
ませふか。ほんに涙がこぼれますと目をするを見ていや是

ぶないふ。
師走坊主師走浪人 用捨箱に此
所の文を引きて「委やつくし
く便りなげなるものなして師
走坊主師走浪人といふ謎の昔あ
りし故に、かくつづけて書きた
るなり。盆には僧の物もらふ事
常なれども、歳暮にはさる事も
なきをいふ云々」
やり やりての略、
長刀の草履 やりてのやりを箱
に通はせ、草履の古くなりて踏
み延ばされたるを長刀の草履と
いひて武器の縁をもたしめたる
なり。
是はいはれぬ この心持のよこ
は何とも口にはいはれぬの意。
蜀江の錦 支那の蜀江より産す
る錦。和漢三才圖會「按有蜀錦
蜀江錦者厚而美不可言其細
多雲龍也今稀有之」
俵物(へし) 米穀の類を俵に入
れたる物。
七百貫目 銀目ないふ。金にな
らして、一萬一千餘兩。

喜左。 詞此紙子の仕合さらく無念と存せぬ。惣じておも
たい俵物材木でも牛馬がおほのめづらしからぬ。犬かねこ
がおほたらば是のと人が手をうたふ。我らも其通紙子のあ
いせ一枚で。七百貫目の借銭おほて。きく共せぬのおそら
く藤屋の伊左衛門。日本にひとりの男。此身がかねじやそ
れでひえてたまらぬ。地ヤアウ此身がかねとの忝い。喜左衛
門が餅つきに大きなかねがお入なされた。これか、まだ蓬
菜のかざらね共。先正月の心三ばうかさつてもつておじや
とて入ければ。内儀のあつとゆづりはにほなが折しくだい
くかうじ。みかんや何やかやから栗おゆかしやく。久
しぶりて御無事なおかほお嬉しさまやと出ければ。伊左衛
門とかふのあいさつ涙ぐみ。詞ふうふの衆が念比に蓬菜と

「往來の袖をひかへて十丈づつに情の切實いんきよもさうな年ばへにて、ふり袖きてのたはぶれあさまし」とあれば、貞享三年も享保二年も同じ似なり。其袖を見るに、黒き布子に白き半えりなつた振袖をきたり云々」附圖第四を見よ。
 したく はらこしらへ。
 饗食 己の物を惜み、人の物を貪り、求むることなれど、轉じて、情愛のなきこと。むごきこと。邪見。
 いやとてしけんどんなら云々 饗食 饗切といふものありしゆみ、(寛文頃より)揚屋の妻が伊左衛門をけんどん邪見なりといひしを謗夢の方へかけて夕霧よりそばきりにせんといひしなり。
 しほ 機曾。はづみ。
 小性立 小姓あがり。
 ばつばの皷箱 ばつば大小つみさしなどといふ。ばつばは美しくして光るをいふ。皷箱は

も此方仕度したくよふござると立上あがるそれのお前のけん饗食どんと申もの。先夕霧さまに逢あひせましょ。いやとてもけん勘んなら。夕霧よりそば切謗夢にいたそふと。すねま勘ひる其中におくざし奥座きより手をた敷く。詞詞あれかぶる衆禿へどこにぞ。地といひつゝ、出る内儀につれてふすま襖のかけよりさし襖のぞけば。ふたりなれにし床柱凭もたれかゝるもかた見形ぞと。忘れもやらぬ物ごしの慥慥にかの人何がなしほに座を立て。あ送ひたや見たやと心もせ念きそむけてむかふ客のかほ。さも大名の小性立風よしの衣裳いしやうつき。ばつばのさめ皷箱ざやぞうが泉ん眼つばわ若か紫のほうろく頭巾。懷中より香包かづか名木火鉢くわにくゆらせ。か、是來へきやれ。身なんとが様な奉公人へ。殿の御前に相詰つめ。たまさか遊興所へ参るも氣暗さばらしと云内に。

年若きものの綺羅にしたるもの。
 ほうろく頭巾 ほうろく頭巾ともいふ。丸頭巾のことなり。嬉遊笑覽「古き繪草子を見るに圓頭巾大つた丸頭巾とみゆ(もと)僧徒の頭巾なれ共流行おのづから如此)これをほうろく頭巾ともいふ。俗つれく草に「たしかなる親の跡を踏へ後の煩蔵に積て金袋をかたけさせいふ事に穂のきくも土釜頭巾を被て意見たらしくいはれし親仁の御影云云」と見えたり。大黒天の頭巾に似たればなるべし。(附圖第八)ひらり紙花七九寸 一日千軒「遊所にて花を打とて紙を出すこれを俗に紙花といふむかしよりあること也。紙花のあたひ定りなし客々の威勢によりて多少あり」七九寸は鼻紙に用ゆる延紙をいふ。延紙の寸法は七寸に九寸なり。ひらりは紙をなげたる様子を形容したる語。なめたり 無禮たりにて、つけ

第一呑の夕霧殿に戀有故。君のきげんのよい様にお身を頼む。一ツ呑のみやれ着せんと。ひらり紙花七九寸木枕横に打敷横て。よ呑こ呑なるとのあ呑ん大じん夕霧が打福箱かけに。兩足くつと入れれば扱扱もなめたり詞。此夕霧に足もたす詞のこりやちつと慮外そふな。それ程足が苦打折にならばうちおつて捨たがよいと。地地云捨てつゝと立次へ出れば伊左衛門。ちやつとね時ころぶ時ひち枕空寐ね。いりして高い肝びき。はつと斗寐に夕霧わが身をと寐もにうちかけに。引寐まとひよせとんとね寐てだきつきしめ寐よせなき泣けるが。なふ伊左衛門さま寐く目寐をさまし寐て下んせ。わし死や煩死ふてとふにしぬるはつなれど。けふ迄命ながらへた度いま一とあ度いせて下さる。神佛度のひかへ綱是度なつかしう度ないかいの。かほが見たふ度ないかいの目め

あがりたりに同じ。此語、當時
専ら遊里にて用ゐられしもの
如し。用例浮世草子類にもあり。
神佛のひかへ綱 神佛が冥々の
中に加護を垂れて引きつなく
綱。

をあいて下んせと。ゆりおこしく揚だきおこせばむつくと
おき。調横さまにとつてなげ。是夕霧殿とやら夕めし殿とや
ら。節季師走せつきしはすこなたの様に隙でない。七百貫目の借錢お
ほて夜ひるかせく伊左衛門。此様な時ね時ばならぬ。地じや
まなされなそうか殿と。ころりとふして又こうくと空い
びき。ム、ッ身に覺えなければ共うらみがあらば聞ませふ。
ねさせのせぬと引おこす。調是なんとする。此躰でも藤屋の
伊左衛門。今のごとくおくざしきの侍に。ふまれたりけら
れたりする女郎に近付持のもたぬ。地こ、な万ざいげいせい。
万ざいならば春おじや通りやくと云ければ。調ム、ッ此夕
霧を万ざいと。ヲウ万ざいげいせい因のるんえんしらすか。
侍の足にかけてけらるゝを。万ざいげいせいといふぞや。

誠にめでたふ侍ける 萬歳唄の
句「誠にめでたふ侍ける」を
侍けるの意にきつせたるにて。
萬歳傾城といふもこれによる。
あしだはいてけるやら年立あへる
あしだにて 萬歳唄の句「あ
しやうありけるあら玉の年立
へる朝より」のしぢり。
身すき なりはひ。職業。
よくわかに御萬歳 萬歳唄の句
「よくわかに御萬歳」のしぢり。
夕霧が愁に迷ひたりと思ひての
あてこすりなり。
●此あたり萬歳唄のもぢりより成
る。萬歳唄は大經師普賢、下之
巻に出でたり参照すべし。萬歳
は附圖第十三を見よ。
傾城 遊女の惣名。傾城は前漢
書の「北方有佳人 絕世而獨立。
一顧傾人城。再顧傾人國」より
出でたることにて、もと美人を
いへるなり。
逢ひかゝる 逢ひ始る。

地誠にめでたふ侍ける。しかもあしだ足駄はいてけるやら。年
立かへるあしだにて。誠にめでたふさふらひける。調聞へた
か去ながら何も身すき。あの様なよい衆に聞けられてもそ
んのいかぬ。よくをしらねば身が立ぬ。よくわか若かに御万ざ
いや年立かへるあしだにて。誠にめでたふさふらひける。
地町人もける伊左衛門もける。ける／＼けるけちらかし。
調是喜左餅でも米でもやつてやりやと。地たばこ引よせふ
くさせ煙せるのさらぬ。躰にてあたりけり。夕ぎりわつとむせ
かへりエ、こなさん共覺えぬ。此夕霧をまだけいせいと思
ふてか。ほんのめ女をとじやないかいの。あければわたしも
廿二十五のくれ暮からあひか何り。なん年に成ことぞ。もふ
けた子さへまちつとではや七ツ。誠をいハッ今比ハ一門中